

序

讀者よ呈する所の此集は其原由する所次の如し。一の愛神者あり、己れよ注意すると神と祈禱よ於て談話するを愛しけるが一日自ら己の事を話述して曰く、家事の爲め又職分の爲めよ時として多く奔走するの已むことを得ざるあるよぞ常よ注意よ怠り祈禱よ冷なるを致す。彼れいふこれ如何よ哀むべしといへども余は自らこれよ處するの力を有せず。さりながら其後閑暇の時を窺ひ得るや己が一室よ閉居し諸事と奔走とよ終をつげて只管よ祈禱し、讀經し、及び神の事と神よ属するの事件とを默想す。神は仁慈なり、先きの平安なる心地はこゝよ再び回復せらる。余は此の時よ於て或は彼の書或は此の書よつき凡そ祈禱よ關する所のものを讀看すといひ終りて彼れ希望をあらはしけるはすべて此等の事を一の浩漚ならざる書冊よ蒐集したるあらんよは幸ならん。其時はこれが爲めよ種々の書冊よ涉獵するの勞を免れん。

視よこゝに撰集せるは一分なりといへども目的の爲めは可なり足りな
ん。そもこれが起端となりしは前述愛神者の一希望のみならず、特に他の
多くの愛神者も同様の境遇ありて讀んで祈禱の心を起さんとするも其
の祈禱の事をえるせる書冊を手よ有せざるあり。然れどもかくの如きの
讀看は知識を和げ心を醒ますよ最良なる方法なり。讀みては祈禱の望みを
温め、心の奮熱する間よ祈禱しては更よ又讀まん。これよ温められて新よ祈
禱よ立たんが爲めなり。

これぞ此集をあらはしたるの緣由又起端なる。さりながらこれ無くも凡そ
祈禱よ立たんと欲する者はそれよ必要なる教訓を此よ於て見るを得ん。
此書よ言ふ所はすべて祈禱の精神の事なり。もし夫の祈禱の規程と秩序と
の事よ至てはこれが爲めよ特別の教訓よ須つあるなし。此等の規程と秩序
とは教會よ於て指示さる。故よ人皆祈禱よ左程熱心よ注意せざる者よだも
行はるゝなり。教會よ行き又は家よありても祈禱書よよりて祈禱するを得

ん。且やいさゝかたりとも己を記憶するものならんよは兎よ角よ日々祈禱
を修せざらん者は決してあらじ。

さりながらこゝよ驚かざるを得ざるはかくの如く生涯祈禱をなしつるも
適當よ祈禱するを全く能くせざる是なり。呈する所の此集は最適當なる
祈禱をあらはして此事を記憶せしむるなり。且や誰か祈禱よ完全を得てこ
れを其心よ於ても最適當の祈禱とならしめんとどの望を起すあらばそを教
へて進歩する所あらしめんとす。

かくて集は出來りぬ。

或は集よ何等の組織ジヤクチュアも立てざりしを惜む者あらん。されど此よ就ては意見
のあるあり。そも大なる祈禱者の一人よして今は既よ故人となれる神の聖
者「エヒスコプ」ありけるが集よ組織を立てんは尙善からずやとの問よ答へ
ていへるとあり。曰く、組織は此事よ適當せざるなり。組織は祈禱の實行せら
るゝ範圍とは全く異なる他の範圍よあるの主義よよりて生ず。故よ集よ組



聖大和志理乙の教訓

祈禱及惺々の事

祈禱惺々集

一、祈禱は敬虔なる者の神に献ぐる善の願なり。然れども祈禱を立つるは獨り言を以てせず。殊に祈禱の眞實なる心情に於てすべし。されば常よりいかなる場合に於ても祈禱すべし。食卓に坐するか、祈禱すべく、食を吃しなばこれと與へしものは感謝を爲すべし。酒にて身体の弱きを助けなば爾も此の賜を與へて心を喜ばせ不快を減じ給ひし者を記憶せよ。食の需要の了りしや恩恵者を記憶して止まざるべし。襦袢したまひを着るか、與へし者も感謝すべし。衣

織をたつるは固有ならざる元素を混するなり。集は建徳の爲めよあらはざる。推理の爲めよならず。されば建徳を尋ねる者も必要なるは組織も非ずして事の教示なり。彼は祈禱の齊整を自ら其心よ建てんとするなり。而してもしるく讀得たる教示の直ちよ入るべきは心地よありて思想よあらず。組織はたゞよ彼れよ妨げん。且や祈禱の事を冷却せしむるよも至らんと。問者此よ反論する能はずして集は組織なしよ成りき。彼れよ従ふは余の素志なり。願くは主は凡その讀者をして祈禱の精神を其心よ建てんが爲めよ有益なるものを此よ於て見るを得しめ給はんを。

一千八百八十一年

露國主教フエオラン誌

服を被るか、我が爲に冬と夏との爲め、便利し我等が生命を護り我等が醜きを覆ふものを與へ賜ひし神に對して愛を倍せよ。一日を過さし、や、我等は晝の業務を行はしめんが爲め、太陽を賜ひ夜を照らし又は他の生活の要用に助けんが爲め、火を與へし者、感謝せよ。夜は汝に祈禱せしむる他の故を與ふべし。天を望み觀て眼を星辰の美に注ぐ時は見ゆる萬物の主宰に勝るべく、あらゆる物の無上なる巧藝者、みな智慧をもて造れる。聖詠百三の廿四神は膝を屈むべし。凡て生ある萬物の睡眠に圍まるゝを見る時は彼の我が意旨に對して睡眠により我等を勞苦の間斷なきより解き須臾の休息によりて更な氣力を勵ましむる者、復た膝を屈むべし。故に夜は爾の爲に全く睡眠の分わくまへとなるべきにあらす。夢中の無感覺によりて生活の半を無益とならしむるを許すなかれ、翻りて夜間は爾の爲に睡眠と祈禱とに分たるべし。かくの如くなれば汝は祈禱を言中ごんちゆうに籠めずしてすべて生涯の間神に近づき間斷なく祈禱するを得て爾の生活は絶えず已まざるの祈禱となる

を致さん。

二、凡て爾を祈禱と呼ぶは答ていふべし吾が心備はれりと、而して祈禱を廢つるとは大なる損失と思ふて最後の祈禱に至るまで奉神禮もあるべし。もし夫れ己の身体を固めんが爲め、食を管め需要に飽かしめざらん間は食堂を出てずしてこれに止まり大に已むを得ざるにあらす。んばたやすく食卓を離れざるならば、まして靈神上營養の時、於ては終りに至るまでこれと、いまり祈禱をもて心靈を固むべきにあらす。や、げだし天の地より隔たり天上の者の地上の者よりへだたるが如く、靈魂も身体より隔たるなり。靈魂は天に比すべし、何となれば主は彼れに住し給へばなり。然して肉身は地より成りて地は死すべき人類と無言なる動物の居るあり。故に身体上の要用を祈禱の時間と相應せしめ、爾を公祈禱より誘去らんとする諸の思念は従はざるの用意を爲すべし。げだし祈禱の時、あたりて少なくとも誠實らしき理由に托し誠實らしく吾人を誘ふて祈禱より離れしめん、とす

るは魔鬼の常なればなり。托言して我は頭痛し又腹痛すといひて虚病の知るべからざる證者をあらはし儆醒よつとむるの力を安息の爲めより自から弱むるなかれ。これ又反して神が隠れ見えて顯れ報わんとする隠微の祈禱をも行ふべし(馬太六の六)。

三、生涯はすべて祈禱の時となるべし。然れども唱詩と跪坐とを擧力するはそこばくの絶間をもて休息を與へざるべからざるより先づこれを諸聖人が祈禱に用ゐたる時間と照合し以て吾等の模範と爲すべし。さて大なる太關はいへり『夜半よ起きて爾が義なる定めを爲に爾を讚榮せり』と聖詠百十八の六十二。而してパウエルとシラが太關を倣ひ夜半獄中よ於て神を讚榮したるは汝曹の知る所なり(行傳十六の廿五)次よ又同預言者はいへり『晩と朝と晝とよ我れ祈りて呼ばん』と聖詠五十四の十八。されども第三時よ於ても聖神の臨み給ひしとは行傳よりて汝の知る所なり(二の十五)第九時は我等が生命の爲に成就し給へる主の苦難を記憶せしむるなり。さりなが

ら太關は『我れ爾が義の定めを爲し日よ七度爾を讚榮す』(聖詠百十八の百六十四)といはれたれど前文よのべたる祈禱の時間はこの七次の數に充つるよ未だ足らざれば日午の祈禱を食前と食後とに分ち以て此の『日よ七度神を讚榮す』てふ規則が日の廻轉を隨ひて吾等よも模範となるべきを致さん。

四、他の萬事の爲めよおのゝ其時あるとは傳道之書よいふがごとし、曰く『天下萬の事よ時あり』(三の一)さりながら祈禱と唱詩との爲めいづれの時か便ならざらん。ゆゑに事よ着手するよ際し或は能ふ時は將た一步を進めて信仰を建つるよ益ある時は言を以てし或はもし能はざる時は心を以てして詩、章、歌、頌、靈賦、をうたひて神を讚美すべし。而して其の行事の間よは或は事を作すよ手の力を與へし者と知識を得るよ才智を與へし者と器械を製するよ物質を與へし者と感謝して祈禱を行ふべく或は吾等が手業を神を喜ばすの目的よ向はしめんを願ひて祈禱を行ふべし。かゝれば上文

よ述ぶるが如く、すべての行爲よつきて作業よ進歩あるを神よ願ひ勤勉の力を與へし者よ感謝を報む彼れを喜ばすの目的を守る時は兩者共よ全きを得ん、けだし若し是時よ於てかゝる方法を用ゐずんば使徒の所謂不斷（ソルン前書五の十八）といへると、日夜作工（ソルン後書三の八）といへるとはいかんど並行はれて戻らざるを得んや。

五、定められたる祈禱の時間を輕んずべからず、何となればこれらの時間はおのゝ神より與へられたる諸善を特別よ記憶せしむるものなればなり、かゝれば晨を輕んずべからず、こは心靈と智覺の初先の發動を神よ獻せんが爲め又神を念ふをもて樂まざらん間は他の何物の爲めよも費心せざらんが爲めなり、言ふあり「我れ神を憶ふて樂めり」と、（聖詠七十六の四）又身体も所謂「晨よ我が聲をささ給へ我れ晨よ爾の前よ立ちて待たん」（聖詠五の四）の言を實行せざらん間は作業よ運動せざらんが爲めなり、さて第三時よ於ては此の時よ於て使徒よ與へられたる聖神の賜を記憶して祈禱よ

起つべし、これ我等も聖物をうくるよ堪ふる者とならんが爲め又其の益を得るの導きと教とを聖神よ願はんが爲よして所謂「神や潔き心を我れよ造れたししき靈を我の衷よ改め給へ我を爾の顔より逐ふと勿れ爾の聖神を我より取上るとなかれ」（聖詠五十の十二—十四）といひしよ倣はんが爲めなり、其後再び事を執るべし、さて第六時に於ては我等は聖人よ倣ひ祈禱して「晩と朝と午とよ我れ祈りて呼ばん彼れ我が聲をさかんとす」（聖詠五十四の十八）といはんよ緊要なり、これ第九の詩をも併誦し晝の魔鬼より救はれんが爲めなり、さて第九時を我等が爲よ祈禱よ用ふるの肝要なるとは使徒等自から行傳よ於て我等よ示されたり、録していへらく「第九時祈禱の時よわたりて彼得と約翰殿よ上れり」と、（行傳三の二）さて日没の後は是日よ於て我等よ與へられたる事の爲め又は我等が好く進歩し且よく成就したる事の爲よ感謝するとも又我等が仕遂げざる所の事よ於ては其の我等の破滅の自由よよりしか將た自由よよるよ非りしか或は隠し行ひしか或は言

語の上よ於てしたるか或は行事の上よ於てしたるか或は心中よ於てしたるかを信認するとも共よ肝要なり、すべての爲よ我等は祈禱をもて神の憐れを乞はざるべからず、けだし既往を省みるは我等再び同様の罪よ陥らざらんが爲めよ甚だ有益なればなり、故よ言ふあり、榻よあるとき爾等の心中よ謀りて己を鎮めよ〔聖詠四の五〕、されど復た夜の至る時は是時よ於ても第九の詩を誦し我等が安息の碍へられずして妄想を免かるゝを願はんを要す、さて夜半も我等の祈禱の爲めよ要用なるはパウエルとシラの教へしと行實の史よ言ふが如し、曰く「夜半よパウエルとシラ祈禱をなして神を讚美す」〔行傳十六の廿五〕、而して詠詩者もいへらく「我れ夜半よ起きて爾が義なる定めのためよ爾を讚榮せり」〔聖詠百十八の六十二〕、又朝よ先だちて再び祈禱よ起くべし、これ日が我等を夢中よ迎へ又は榻上よ迎へざらんがためなり、言ふあり曰く「我が目朝よ先だちて寤む爾の言を究めんとするよよる」〔同上百四十八〕、さて神と神の基督の言よ注意して生活せんを既よ決したる

者は此等の時間を一も輕んずべからざるなり。

六、いかにせば祈禱よ於て放心せざるを得べきか、こは目前よ神のましますを確く信するよよりて得らるべきと無論なり、もし誰か長上或は院長を己が目前よ見て之と談話するとあらんよ彼れを反目して視るあらざんばまして神よ祈禱する者は〔前述の確信をもて〕人聖手を拱して怨むとなく疑ふとなく』としるされたる言のまゝを實行し心腹を試むる者より背離せざるの智識を有せんとす〔提摩太前二の八〕。

七、すべて何れの時よも放心せざるを得べきか、我等いかにせばこれよ違すべきか、此事の能ふべき所以は夫の「我が日常よ主を仰ぐ」〔聖詠四の十五〕といひ「我れ恒よ主を我が前よ見たりけだし彼れ我が右よあり我れ動かざらん」〔聖詠十五の八〕といひし者は既よこれを證しぬ、さて此事の能ふべき所以は上よ言ひし如くよして即ちこれが爲めよは心よ神の事と神の業と賜との事を思念するなく又すべての爲めよ信認感謝するなく徒然とし

て送るの時を與ふべからず。

八、主が祈禱する者に入らんを命じ給へる密室。てふものはいかなる室か。通常密室と名づくるものは保存せんと欲する物を置き又は或物を貯藏し得べき所の空虚にして離れたる別室をいふなり。説話の事件は誠命の主旨を説明するなり。何となれば説話は諂諛の疾よくるしむ者に向ひたればなり。故よもし此の疾が誰をか煩すあらんは彼れ人々の頌讚よ心を留めずしてたゞ神をのみ望むの習慣を未だ得ざらん間は、即ち夫れ僕の目主人の手を望み婢の目主婦の手を望むが如く我等の目は主我が神をのぞみて其の我等を憐れむを俟つ。『聖詠百廿二の二』といひし者の如くなるを得ざらん間は離れ遠ざかりて祈禱を爲すを美とす。されどももし誰か神の恩寵よ依りて此疾より潔められたらんは彼れ其の美なる者を隠すの必要あるなし。これを教へて主は自ら左の如くの給ひき。曰く「かくの如く爾の光を人々の前よ耀かすべし。されば人々爾等の善行を見て天よ在ます爾曹の父を

榮むべし。』馬太五の十六。又同處よ言へる矜恤の事と禁食の事と總て敬虔の行の事よ關する誠命も其主旨これよ同じ。

九、『靈智をもて歌へよ。』聖詠四十六の八。とは何の意味なるか。食物よつきておのゝ其食物の性質を覺ゆるが如く聖書の言よつきてもそれよ通曉するをいふなり。けだし言ふあり。咽は食物を味ひ智は言を分別す。故よもし誰か其の心靈が各言の主旨よ感じ易きを味官が各食物の性質よ感じ易き如くなる時はこれ其者は『靈智をもて歌へよ』との誠命を成せるなり。

*「スラマン」譯には耳とありされども聖金口も讀んで智さいへり

十、人は何よ因りて神を常よ記憶するを失ふか。もし人は神の恩を記するなく恩者に對してこれを認めざる者となる時は失ふなり。

十一、祈禱をすべての上よ貴んずべし。馬太は主を欸待し。靈應の事を慮り。馬利亞は主の足下よ坐せり。兩りの姉妹よおのゝ美はしき熱心のあらはるゝあり。されども爾は事を區別せよ。主は兩婦人の熱心を嘉みし給ふ。され

ども馬利亞をば馬太の上よしたりき。馬太は勉勵して人よ勤むるの模範よ
 して馬利亞は神の前よ默然として祈禱よ立つの模範なり。爾は欲する所よ
 傲ふべし、彼も此も共よ救の果實を得ん、但後者は前者より高し。馬利亞は善
 業を擇べり。『路加十の四十二』爾もハリストスの機密よ參與^{あづか}る者とならん
 と欲せば彼の足下よ坐して祈禱と默想とよとこまるべし。
 十二、祈禱よ二類あり、第一は謙遜と共よするの讃頌よして第二のこれよ
 り卑きは請願なり。故よ祈禱して俄よ請願よ入るべからず、否らすんば要用
 よ迫られ已むを得ずして神よ祈禱すとの意を自から人々よ知らしむる
 なり。故よ祈禱を始めなば自ら己を棄て妻を棄て子を棄て地と離れ天を超
 えて見ゆると見えざるもろくの造物を棄ててすべてを造りし者を讃頌
 するをもて始むべし、而して神を讃頌する時は心よて彼處此處よさまよふ
 なかれ、異教の如く虚誕を言ふなかれ、聖書中の語を擇びていふべし、主よ我
 れ爾が恒忍なると温和なるとを祝頌す、主よ爾は我等をして我が族の救を

慮る所の爾を讃頌せしめむが爲よ我等を忍耐し且寛容す云々、さて爾の力
 よ應じ聖書より借り來る所の讃詞を終へて神よ讃頌を献ぐる時は謙遜を
 もて左の如く言ひ始むべし、主よ我れ爾の前よ言ふよ堪へず何となれば我
 れ極めて罪ある者なればなり、我れすべての罪人よりも尙罪ある者なれば
 なりと、かくの如く畏れと謙遜とをもて祈るべし、さて讃頌と謙遜の此二つ
 を成す時は最早爾が當然よ願ふべき所のものを願ふべし、そは富よあらず、
 此世の榮よあらず、身体の健全よ非ず、何となれば神は各人の爲めよ有益な
 るものを自ら知ればなり、故よ爾よ命せられしが如く神の國を願ふべし、我
 等が王は盛名最拔越なり故よもし誰か彼れよ或る小なるものを願ひ或は
 吾人中誰れか彼れよ當らざる所の者を願は、憤らん、故よ己の祈禱をもて
 自ら怒を招くなかれ、王たる神よ應ずる所の者を願ふべし。
 十三、神よ應ずる所の者を願ふてそをうけざらん間は願ひやむとなかれ、
 主はこれよ意を致して夜半よ麩包を他よ懇求して得たりし者の譬を設け

たりき路加十一の五―七、主が此譬を吾等よあらはせるは吾等たどひ願ふ所を立ろようけざらんも絶望せず失心せずして信仰をもて祈禱も弱らざる愈々切なる者とならんを教へんが爲なり、月を超え年を越え三年及び多年を経過すといへども受けざらん間は退くとなかれ、断えず善を爲して信仰をもて願ふべし。

十四、故よすべて爾の救は關し又善よ大よ發達するを關する所の者を切よ神よ願ふべしさらば必ずうけん、然れどもこれと共に爾ち自らも凡て汝の力よ及ぶ所の事は必ず爲さるべからざるを知るべし、さて神よ助を呼ぶは神の爾よ補助者たらんが爲なり、けだし若し誰か輕浮不定よして自ら淫慾(誠命よ反ける)を耽るあらば神は其者よ助けずして其者の祈禱を聽かざらん、何となれば彼れ先づ罪よよりて己を神よ遠ざかるものとなしたればなり、神より助を有せんと欲する者は義務を變せず義務を變せざる者よして神の助無うして棄てらるゝと未だこれ有らざるなり、故よ何よ於て

か自己の良心の己を誣むるまでよ至らしめ且かくの如きの境遇よ於て神の助を呼ぶべからず。

十五、されば助を呼ぶよ不注意を以てせざるべく彼處此處よさまよふ所の心を以てするとなかるべし、かゝる者は願ふ所をうけざるのみならず更にいよいよ主を苦ましむるなり、そも君前よ立ちて言ふあらんと欲する者は自から危きよ服するを免れんが爲めよ大よ畏れて立ち外部の目よも内部の心情よもさまよふを許さずんば、まして神の前よは特よ畏れと慄きとをもて立ちすすべての心意を彼れ獨りよ向はしめて他の何物よも向はしめざるべし、何となれば神は人々の如く外部の人を見るのみならず内部の人をも洞察すればなり、故よ必要ある時神の前よ立ち自分よりすべて爲すべき所のものを爲すある時は爾が求むる所の者を願ひやむとなかれさらば疑なくうけん。

十六、もし己の良心よて神の誠を如何よ蔑如したるを責むるあり或は放

心せずして祈禱し立つを得べからん時は爾の祈禱の罪
 となるを免れんが爲に神前し立つを敢てするなかれされどもし爾ち引
 誘なくして祈禱するを自ら勉勵するも効のあらざる時は力に及ぶたけ已
 を責むべく且心を神に向け又はこれを自己に收束して神の前し立ちつゝ
 くべし。さらば神は爾を赦さん。何となればこれ輕蔑よりするをあらすしで
 荏弱の故に神の前し當然し立つの力を有せざるより。故にもしかくの如
 く己を凡ての善行に責むる時は爾が求むる所をうけざらん間は願ひ罷む
 となかれ。求むる所の者を願ひつゝ忍耐して神の門を叩くべし。言ふあり。蓋
 し凡を求むる者は得、尋ねる者はあひ、門を叩く者は啓かるればなり。『路加十
 一の十』蓋し爾が享けんを願ふは神に於ける唯一の救は外ならさればな
 り。

十七、然れども汝はいはん我れ數回願ひしに願ふ所をうけずと、爾のうけ
 ざるは惡しく願ひ即ち不信と放心とをもて願ひしよよる。或は爾に無益な

るものを願ひしよよるや疑無しされどもし益あるものを願ひしならば恒
 固の心を有せざりしよよる。けだし録していへり。『爾等忍耐をもて爾の魂を
 獲よ』『路加廿一の十九』又いへり。『終に至るまで忍耐するものは救はれん』『馬
 太十の廿二』

十八、神は祈禱する者の心を知る。故に爾はいはん神は我等の願ふ何の必
 要やある。豈彼は我等の何に於て必要を有するを知らざらんや。故に願ふ何
 の必要やあると。神は我等の爲めに必要なる所のものを知りてすべて身軀
 上の事は更し我等の願ふ先だち豊しこれを與へて吾人を樂ましむるなり。
 神は善しして。『雨を義者にも不義者にも降し日を惡者にも善者にも照らす』
 『馬太五の四十六』然れども信仰と信仰の名に應ずる所の善行と天國とはも
 し勞苦と多くの忍耐とをもて願ふをなくんばうけざらん。何となれば先づ
 願ふべく既に願ひ信仰と忍耐とをもて勉勵して尋ねべくして其の或は
 等閑し或は輕忽し願ふを自己の良心の絶て責むるをあらざらんやうよ自分

の方よりすべてを盡さざるべからざればなり。然る時はもし此の願ふ所の者が神の意に適ふならば必ず受けん。けだし神は爾に益ある所のものより猶善く知ればなり。

十九、 けだし神が汝の願ふ所のものを賜ふを延引するは爾をしていよいよ切に神の前より止まらしむるが爲めならん。又爾をして神の賜の如何なる〔勞苦をもて得らるべき所以〕を知りて畏れをもてこれを守らしむるが爲めならん。けだしすべて人が多くの勞をもて得る所の者はこれを失ふと共其の多くの勞をも併て失ひ神の恩寵を棄て、永生に堪へざる者とならざらんが爲めこれを守るに盡力すべければなり。故にもし速にこれをうけざる時は落膽するなかれ。けだし至善の主は爾が速に賜をうくるも失はざるべきを見る時は爾の願ふ先ちてもこれを賜はんとすればなり。されども今は爾を慮るよりてかくの如く爲すなり。〔即ち與へざるなり。〕けだし「マラン」をうけ全うして守りし者さへも放ちて運轉せざりしが爲め罰せられ

しならばましてそを失ひし者は罰をうけざらんや。

二十、 故に此を知りて我等或は速に或は遅くうくるわらんも主は感謝するものとなりて止まらん。何となればすべて主宰の爲す所は吾人の救の爲に攝理するものなればなり。唯爾は怯懦によりて願を棄てざるべし。けだし主が寡婦の譬をまうけ其の切願によりて無法なる士師の心を傾かしめたるをいへるは吾人にも其の切なるによりて願の如くうくるを得べきを教へんが爲めなり。神は對する吾人の信も愛も此に於てあらはるべく、たとひ速にうけざりしも神は感謝するものとなりて止まるの時あらはれん。されば神の永遠の幸福をうくるに堪ふるものとならんが爲に常は神に感謝せん。

二十一、 先づ我等は思念に對して智識の清肅なる監察をまうけあらゆる方法を用ひてこれを制すべし。靈魂をして身体の引誘するまゝに止むべからざる奔馳に陥らしめざらんが爲なり。身体の視力は目にあるが如く靈魂

二十
の眼はこれに賦されたる智識あり、靈魂はこれを造れる聖三者をもて天然に賦與せられたる自己の智力を發動せしめ當然にして且緊要なるものを望むときは身体の不順序なる動きを預見し且勸止してこれが侵襲を避け其の適當の平和を己れに守り一切を滅する寂靜の中より己れに應ずるの默想をつとむるなり、而して此を行ふや崇拜せらるべき三者は出來るだけ注意の目をあげて神の榮の其照餘に於てすら近づく可らざる事と神の福樂の清明なる事と其の無限なる睿智の事と其の深くして何を以ても擾されざる平安の事と其の公平無偏にして何よりても動搖を來さざる本性の事とを思念しつゝ行ふなり、靈魂が節制と其の己れに應ずるの働とより己の思想力を守りて凡てしてさされたる默想に確立する時は其の性情と其の志氣とを正うして且義、美にして且和平なる者より強く向はしめんとす、されどももし靈魂が其の智識を上に向はしむると緊要なる默想とを罷むるや身体の諸欲は監守者を推退けたる犬の如く直ちより力起して

靈魂を襲はん、即ち各自の欲は強く靈魂を噛裂かん、心靈が其の直覺聰明なる力を常々醒々ならしむる時は二つの方法をもて身体の諸欲を眠らしむべし、即ち一は最良なるものと本然なるものを思ふの默想をつとむるを以てし又一は身体の平穩の爲めは監察して其の欲を潔淨靜息せしむるを以てするなり、されどもし怠惰を愛し直覺の力を働かさず棄て置く時は身体の諸欲は易く靈魂を己が方向と運動とに従はしめん。
二十二、不適當なる思想の善良なる思念を壓出だすや其の方法二あり、或は靈魂が自己の怠慢をしたがひ不適當なる者の周邊に思ひさまよふて一の妄想より他のいよゝ意味なきものに移るよりてこれ有り、或は魔鬼の奸策より智識に不適當なる事件をあらはしてこれを默想と賞讃すべき事件を注意觀察するとより引離し去る時よこれあり、靈魂が自ら思の收束と緊張とを乱してこれより空しき事件を憶はしめ思念をして無慮且無智として其の記憶する所の事件のまよゝ推流さるゝに任かし

又其の事件は見慣れてしきり不適宜なる且は耻つべき事件のまよ／＼いよ／＼遠くさまよはしむる時は靈魂のかゝる解離とかゝる散亂とは意旨の力を強く張りて智識の注意を起しこれをして同く亦善良なる事件の黙想は練習せしめつゝこれを改善せざるべからずされども魔鬼が讒せんをを試みておのづから安靜平和なる所の靈魂は自己の意思を火箭の如く放ち入るゝは盡力し俄にこれを環繞していよ／＼長くいよ／＼拒ぎがた／＼其の意思を留置かんとを要する時は吃緊の注意と覺醒とをもてかゝる侵入を拒ぎ且遠ざくると恰も角闘者が鋭き注目と体動の敏捷とをもて打撃を避け得る如くしつゝ祈禱と天上よりの救援を呼ぶとよすべてを一任すべし、即ち戦を勦絶するるとと火箭を拒ぐとを一任すべし、パウエルはこれを吾人は教へていへらく『あらゆる力を盡して信仰の盾をとるべし、此の盾をもて悉く悪者の火箭を滅すを得ん』と以弗所六の十六故はもし其の祈禱の時、當りて敵が兇惡なる妄想を入れんとするあらば靈魂は祈禱して罷

まざるべし、敵のかゝる兇惡なる感得と詭計窮りなき怪物のかゝる空想とは汝ちこれをもて自分よて生長せしめたる者と思ふべからず、淫蕩なる思の吾人はあらはるゝは惡の創製者の離れざるよりてこれあるものなるを識別していよ／＼切に神は俯伏すべく、不順なる思念の記憶はよりて築く所の中壁を落し散さんとを神は祈るべく、其の智識の進向をして妨ぐる所なく常は神は騰上せしめ惡なる記憶の侵襲の爲は遮断せられざらしむるを致すべし、もし吾人と戦ふ者の離れざるより思念のかゝる強逼の久しく續くとあらんもさる場合は於ても絶望は陥るべからず、苦行を中途にして廢つべからず、忍耐して祈禱とゞまり以て神が我等の恒固なるを見て我等を聖神の恩寵をもて照らして讒者を奔らし我等が心を清潔にして神の光を充たしめ我等が思念は亂されざる安靜をもて神は勤むるの力を與へ給はんを待つべし。

二十三、生來吾人は最美なるものをねがふ願望のあるあり、さりながら

神の美よりも驚くま堪へたるものやある。神の壯麗よりも樂しかるべきいかなる顯出やある。凡てのあしきより清められ眞實の情性をもて『我れ愛よて傷つけられたり』雅歌二の五といへる神は打たれたる希望の如く靈活よして禦む可らざるいかなる希望やある。神の美の電光燦然たるは眞ま言ひも得べからず、書きも盡すべからず、辞もこれを形容する能はず、耳もこれを容るゝ能はず、明星の爛然たるを稱せんか、將た月の光明なる將た太陽の光輝するを稱せんか、是れ皆神の光榮ま稍似たるものだもあらはず、足らずしてこれを眞の光と比すればその相距るを深夜極闇の白日光明よ於るより甚だしも、し此の肉眼よて見る可らずしてタ、心靈と思想よて及ぶべき所の美が聖徒の某々を照らして彼等よ愛の禁すべからざる傷を留むるや此世の生活よて困めらるゝ彼等は言ひたりき、曰く『哀哉我が旅は長く久し』聖詠百十九の五。曰く『我れ何の時よか至りて神の顔の前よ出つべき』聖詠四十一の三。曰く『我が靈は勇毅の神よ渴く』同上。神をのぞむ願望の心靈

よ觸れし者等が神よ進向するよ於て禦む可らざるをそれ幾許ぞや、神の善を洞察せんと欲する飽かざる望みの故よより彼等は神の美を觀る眼光の引てまのたく永遠ま至らんとを祈禱したりき。聖詠廿一の四。

二十四、我等は生れながら恩者よ對するの愛と傾向とを有してその我等よあらはされたる恩よ報いんが爲めまもろゝの勞を支度せんとす。されどもいかなる言は神の諸賜を象り得べきか、彼の諸賜は多きとよ於てはあらゆる數よ超越し又性質よ於ては其一よても我等をして賜與者よあらゆる感謝をさしげしむるよ十分なる程大よして且重し。夫れ此の諸賜の中其の大なると其の心を奪ふとよ於ては自ら非常なりといへども更よ大なる者の光輝よて照らさるゝと猶星宿が太陽の光線よて照らさるゝが如くたとひそれよよりていよゝ高めらるゝも其の作善を其の大なる者の如く明白なあらはさる者よ就ては余は黙止すべし。けだし恩者の仁慈を量るよ其の最勝なるものを棄てゝ其の更よ小なる諸賜を以てするよ暇なけれ

ばなり。故より日の上昇や、月の廻轉や、空氣の好成合や、年時の變換や、雲中の水と地中の水と海及び諸地と地より生ずる者と水中に居る者と氣中に居る生物諸類と生物の間の千差萬別なるすべて吾人の生活に資くるに定められたる者の事は余は黙止すべし。されどもこゝに唯一の誰か看過せんと欲するも能はざるべくして常識と言語とを有する者に於て黙止するとの全く能はざるものあり、何ぞや、これ即ち神が己の像と肖とを依りて人を造り神の事を知るの知識を賜ひてあらゆる動物の前は言語の賜ひて飾り、これに樂園の無量の美を與へて樂ましめ、これを凡そ地上萬物の上は立て、君主となし、蛇の狡計の爲めは勝たれて罪に陥り、罪に由りて死に入り、すべて死すべき所の事に入りし後もこれを輕んぜずして先づこれに律法を與へてこれを衛り、これを眷みんが爲めは神使を附け、邪惡を責めて徳行を教へんが爲めは諸預言者をつかはし、邪なる傾向は懲嚇して斷絶し、善行は對するの熱心は許約をもて獎勵したる事是れなり。次は我等が凡てかくの如き

の助けあるも拘はらず、憐むべからざるものとしてあらはれし時は我等を死より呼びて我等が主イエスキリストスより最奇異なる攝理をもて甦らしめ給ひし事是なり。蓋し彼は神の体からだにてありしかども自ら其の神と匹しくある所の事を棄離さと思はず、反て己を虚らし、僕の貌をとりて人の如くなれり。『フィリップ二の六』又彼は我等が荏弱をも己れより受け、疾を負ひ我等が爲めは傷つけられて我等に其の傷を以て愈さるゝ』を得せしめ。『イサイヤ五十八の五』我等が爲に詛はるゝ者となりて我等を詛より贖ひ給へり。『ガラテヤ三の十三』最辱の死を忍びうけて我等を光榮の生活に上げせ且これを以て満足せずして更は我等に神性を領するの尊きを賜ひ其の慰めの大なるやすすべての人間の思想を超越する永遠の安息を備へ給へり。言ふあり『我れ何を以てか主の我れに施し、悉くの恩を報いん』。『聖詠百十五の五』それ余れ此等の諸事を己れに思ふ時は自己の弱きを發見し、心の不注意又は空しき占有せらるゝの故より神を愛するの愛より離れ落ちて何の

時かハリストスは譴めらるゝ者となるなからんかとそを畏るゝより或る驚愕とおそろしき憤心とを生せんとするなり。けだし今日吾人を誘ひ憎むべき誑惑をもて我等は恩者の事を忘れしめて我等が靈を亡さんと百方圖謀する者は其時吾人の不従順と吾人の背棄をもて自ら誇りつゝ此の我等が忘恩をして主を譴めらるゝものとならしめん。何となれば彼は吾人を造らず又吾人の爲に死せざりしといへども神の誠命は順はざると注意せざるとは於て吾人を己が徒弟となしたればなり。この主を譴めらるゝと敵の此自負とは意ふは我が爲めは地獄の苦より甚たしからん。されどもハリストスの敵は於ては我等が爲めは死して復活せし者に対して高慢するの因由となるべし。

二十五、よろしく「凡ての操守をもて己が心をまもるべし」箴言四の二十三これ神を思ふの思想を如何しても失はざらんが爲め又神の奇蹟を想ふの記憶を空虚なる者の想像はより汚さずして易らざる且いさぎよき記憶

をもて我等が心靈は印せられたる神を思ふの聖なる思想を消磨す可らざる印璽の如く、到る處は自ら擁ひ去らんが爲なり。けだしかくの如くなれば神を愛するの愛は我等は獲らるべくして此の愛は神の誠命を行ふは奨励すると共に自らも誠命を守られて斷えざる且動かざるものとなるなり。二十六、すべて我等が目前に在る所の事は於ては其のこれを命せし者の旨を己の爲に立てし目的となして己の注意をこれに向はしむるを主の自から己の事をいへるが如くすべし。曰く「天より降りしは我が旨を行はんが爲にあらす我をつかはせる父の旨を行はんが爲なり」約翰六の三十八「けだし生活は於て必要な技藝はこれに相應する或目的を預想して自分の行爲をこれに向はしむるが如く我等の行爲も一の界限と一の規則とを置かれたるより、即ち誠命を行ふは神の意に適すとの規定を置かれたるより精確な事を發達せしむるを得るは他はあらす誠命を興へしものゝ旨のままこれを行ふのみ。而して嚴密の注意より神の旨は循ひ

て事を行ふは神と体合よ入ることを記憶するよよりて成し得らるべし、ハ
 リステアニンはすべてよろくの行爲を輕き重きと論なく神の旨を照準
 して行ふべく併てかく行はんとを命じ給ひし者を思ふの思想を守るべし
 されば己の行事よ於て誠命の確旨をやぶる者は神を弱く記憶するを明な
 り故よ『我れ豈天地よ充たざらんや』イェレミヤ廿三の廿四といひ『我れ近き
 よ於てのみ神たらんや遠きよ於て神たらざらんや』同廿三の廿三といひし
 者の言を記憶してすべての事を行ふと主の前よ於て行ふが如くすべくも
 ろくの思想を構成すると主のこれよ自在するが如くすべし。かくの如く
 ならば常住不斷の畏れも成るべく愛も全からん。

二十七、放心と諸の思念とは何處より來るかいかよしてこれを秩序よ従
 はしむべきか。放心は必要の事よつとめざる智識の閑散より生すべく而し
 て智識は心腹を試むる神の臨在するを信せざるよよりて閑散と不注意と
 よといまるなり。けだし若し誰か此を信するわらば『我れ恒よ主を我が前よ

見たり蓋し彼れ我が右よあり我れ動かざらん』聖詠十五の八といふ所のも
 のを遂げんと疑なし。さて誰か此の如きの點よ達するか其者は信仰の建設
 よ向はしめざらんものはたゞ神よ禁せられたる且は悦ばれざる者のみな
 らずたとひ善なるが如くよ見ゆるものといへどもそを思ふよを必ず敢て
 せざるべく又思ふよ暇あらざるべし。

二十八、いかよせば大よ上達して放心せざるよ至るべきか。もし誰か選人
 太開がいふ所の意思を己れよ有する時はこれよ達するを得ん。彼は時とし
 て曰へり『我れ恒よ主を我が前よ見たり蓋し彼れ我が右よあり我れ動かざ
 らん』聖詠十五の八又時としてはいへり『我が日常よ主を仰ぐ其の我が足
 を網より出たすよよる』聖詠廿四の十五而して又時としては曰へり『夫れ
 僕の目主人の手を望み婢の目主婦の手を望むが如く我等の目は主我が神
 を望む』聖詠百廿二の二。そもく些細なる例よより我等よ最重要なるもの
 を最勉めて得るとを慮らしめんが爲めよ各人をして自から左の事を熟考

せしむべし。即他の人々の前まに在るまに當りたどひ己れもひとしき人々なりしませよ。彼は如何も自ら動作すべきを考へ其の能く己の容儀を修むるま於て歩行ま於て各肢体を動かすま於て及び語音ま於ても何の非議する所まあらしめざるま達せんやうま百方自ら注意するまあらずや。されば人々の前ま於て人々も見らるま所のものを保たんとを力むるが如くもし誰か所謂「心腹を試むる」聖詠七の十の神をもて親見者となし、又「我が名の爲ま三人集るまれば我も其の中まあらん」馬太十八の二十との許約をなし給へる神の獨生子をもて親見者となし、又我等を治め賜を分與して我等も働く所の聖神をもて親見者となし、又主のいひし如く「爾曹この小子の一もも輕んずると勿れ爾曹も語げん彼等が天の使者は天もありて天も在す我父の顔を常も觀ればなり」馬太十八の十といへる我等各人の神使守護者をもて親見者と爲すま於ては其者は最重要なる且至難なる苦行を己れも任じ如何も己の敬虔をして神意も適するものとならしめんとするとは更よい

よく疑なく信用せらるべし。かくの如くなれば放心せざるまはいよく固くいよく完く彼れも確立すべし。まして彼れ「我れ何の時も主を讃揚げん彼を讃むるは常も我が口もあり」聖詠三十三の二てふ言を其ま實行せんを力め弱らず且間斷なく神の榮を默想するま於ては智識をして放心ま至るの時機だも見出さしめざらんとす。

二十九 智識も於て神も悦ばるま善なる思念も配慮の衰ふる如くなるまあるは何もよりてなるか、いかもして己をこれより預防すべきか、けだし太關いへらく「我が靈は憂もよりて眠を催す」聖詠百十八の廿八と、此もよれば心靈の睡眠も無感覺ともよりて是れあると明なり。けだし儼醒不眠の心もは神も悦ばるま配慮も善なる思念も衰ふるとあらずして反つて心靈は此等の念慮も自ら不充分を感ずるを見ん、何となればもし肉体の目は神の或る些少なる造物を觀察するま不充分を感じ一たび或物を一見して飽かず乃ち間斷なく同一の物を觀察しつゝ然も見るとを休せざらんまはまして

心霊の目は苟も微醒不眠なるあるに於ては神の奇蹟と審判とを直覺するに不充分なるを感すべし。けだし言へらく「爾の判きは大きな淵の如し」〔聖詠三十五の七〕又他篇にも言へらく「爾の智識は我が爲に奇異なり、高尚なり、我れこれと測ると能はず」〔聖詠百三十八の六〕さればもし心は善なる念慮の衰ふるとあらばこれ其の心はこれを照らすとも亦衰ふるや明なり、されどもこれ照らす所の者の衰ふるは非ずして照らさるべき所の者の眠を催すよるなり。

三十、すべての遺物が爲し、所の事は於て報告を爲さんが爲め、審判者の前は顯はる、大日は於て自ら己の行爲の爲め、困難せずして答ふる此一事を日夜配慮するの外他の慮を有せざる靈は福なり、己の目前は此の日と時とを置き誤る能はざる審院は於て稱義を得んと常し、思念する者は或は全く罪を犯さざるべく、或は犯すも甚だ微々なるべし、何となれば我等は神を畏るゝ畏のあらざるより、罪を行へばなり、されどももし誰か將よ

來らん所の者を待ちて明し、これを心は銘するあらんか、其者は存する所の畏れは輕卒の行爲又は思念に陥るの時を與へざるべし、ゆゑに神を記憶せよ、心は神を畏るゝの畏れを有し、衆人を呼んで祈禱の關係者及び幫助者たらしむべし、けだし神を和ぐるを得る者よりの助けは大なればなり、されば爾は此を爲しやむとなかれ、けだし彼等の祈禱は我が爲め、生存する間は此の生命に於る善良なる幫助者となるべく、此處より逝らん時は來世に於ける充分の送行とならんとすればなり、然れども來世の善の爲め、苦慮するは善行なるが如く、小膽と無望とは靈魂を亡すの事たり、神の仁慈を恃むべし、又もし我等當然に且謙遜として神に對するあらば、神は我等を全く棄てざるのみならず、我等祈禱の言を尙發する間は是れ我なりと言はんことを知りて神よりの代贖を待つべし。

三十一、『主よ其の聖なる庭に於て伏拜せよ』〔聖詠廿八の二〕主の庭とは聖なる教會なり、宜しく此の聖なる庭の外に居らず、その内に在りて主よ拜す

べし。庭外よりすてられ外誘より引去られて主の庭に留まるとの變じて無き歸せざらんが爲なり。けだし多くの者は表面よりは祈禱に立つも庭の内にあるはあらず。何となれば彼等が思念は彼方此方さまよひて心は徒然なる配慮より率かるればなり。

三十二、『主の堂の内には其光榮を傳へざる者なし』聖詠廿八の九。此の言を聴くべし而して饒舌より耽る者は自ら耻づべし。聖詠は何といはるゝか。神の堂内にある者は惡言せず虚誕なると耻づべき所の言を口より發するあらずして『主の堂の内には其光榮を傳へざる者なし』といふなり。こゝには聖神使の立ちて爾の言を録するあり。こゝには主の自らましくして入る者の心情を監視するあり。各人の祈禱は神の前より露るべし。誰か心情より誰か靈智をもて天上の事を願ふか。誰かたゞ外見の爲めより獨り口頭より言を發するのみにして其心は神より遙く遠ざかるか。誰か欲して祈禱すれどもたゞ身體の健なると物質上の富みと人間の譽れとを願ふのみなるか。是れみな神

よあらはるゝなり。されば神の堂に於ては特に神の榮を傳へんとを要す。神を頌讚するは神使の本務なり。常に天上にある軍の爲めはたゞ一事あるのみ即ち造成者より榮を献ぐる是なり。一切の造物即ち黙する者も言ふ者も世界より上にある者も地上にある者も造成者を讚美す。されども憐むべき哉。人類は家をすてて聖堂に集ひ來るも神の言よりは耳を傾けず本然の職分を讚榮するの職分を成さず罪の權下にあるを哀まらず罪を記憶するも痛心せず審判より戦かすして却りて微笑をなし互に手を伸ばしつゝ祈禱の家をもて冗話閑談の所となし『神の堂の内には其光榮を傳へざるものなし』と聖詠の證し且言ふよ心を留めざるなり。且爾は自から光榮を傳へざるのみならず他人の注意をも我れより歸せしめて己が喧嘩をもて聖神の教を打消して他人も妨礙を爲すなり。慎みて汝は頌讚の爲め賞をうくるよ代へて神の名を誹る者と共より罰せられて此處より出でんことを免るべし。爾よりは聖詠あり預言あり福音の誠命と使徒の訓言とあり。舌は歌ふべく智は言ふ所の意味

を尋ねべし、これ爾ち心神よて頌讚し併て心智よて頌讚せんが爲なり。神は光榮を促さず爾が讚榮するよ堪ふるものとならんを欲す。『人の種く所の者はその穫る所となる』(ガラテヤ六の七)爾は天國よ於て榮冠と名譽と頌詞とを穫らんが爲めよ讚榮を種くべし。

三十三、『主我が神や我れ爾よ呼びしよ爾は我を愈し給へり』(聖詠廿九の三)そも其の己が内部の傷を知り醫よ至りて『主や我を愈し給へ我が靈を愈し給へ我れ爾よ罪を行へばなり』(聖詠六の三、四十の五)と言ふを得る者は福なり。さりながらこゝよ預言者はこれと併て其の愈を興へられたるが爲よ感謝の言を發して『爾よ呼びしよ爾は我を愈し給へり』といへり。呼ぶと汝の恩寵との間よ間緯あらざりき。我れ僅よ呼びしや愈も亦共よ來りぬ。神よ禱るものは我等よ速愈の來らんが爲よ緊要なきをいふべからず。

三十四、『主の諸聖人や主よ歌へよ』(聖詠廿九の五)口よ聖詠の言を發する者みな悉く主よ歌ふよはわらず。たゞきよき心より唱詩をさぐる者は主

よ歌ふなり。凡て克肖よして神の前よ義を守る者、凡てかくの若き者は心神的同韻(心神の調和)を信實よ守りて神よ歌ふよを得ん。こゝに來りし者幾何か多き心よ不義を藏するものなるか。かくの若き者は當然よ歌ふ能はざるべし。彼等は己を擬して歌ふ者と爲す。さりながら實は歌はざるなり。けだし聖詠は唱詩よ克肖者を招げばなり。惡樹は善果を結ぶ能はず。邪なる心は生命(靈神的生命)の言を己れより出し費さんどす。靈神上の果實を産せんとせば心を清うすべし。然る時は克肖なるものとなり。靈智をもて主よ歌ふを得ん。

三十五、『爾の顔を隠せば我れ惶擾へり』(聖詠廿九の八)けだし預言者の意よいへらく爾の恵みの光線が我を照し、間は我れ動搖さるゝ無く平穩よして生を送りき。されども爾の顔を隠し、や其時我が心の欲よ従ひ擾されたる狀況明かよあらはれたり。されば我等は神の顔の我を照らさんが爲め又我等善よ備ふるよ依り平穩よして何物よも攪されざる聖よして且美

なる状況はあらんが爲めは斷えず禱らん。

三十六、『我れ墓より下らば我が血何の益やある』聖詠廿九の十「いふ意は肉
 体の安寧と血の多きとは一般の敗壞に付さるゝ時我れ何の益やあると
 されば」己の体は克ちてこれを服はしめ』(コリント前九の廿七)肉の肥満を
 して罪の緣由とならしめざらんを致すべし。睡眠、浴室又は軟床をもて肉
 体を悦ばすとなかれ、不斷に此の語を反復すべし、曰く、『我れ墓より降らば我が
 血なんの益やある』と、何故速に敗壞する者の爲めは苦慮するか、何故己を肥
 して肉体を重からしむるか、豈知らずや爾は己が肉体を肥満ならしむる程
 心靈の爲はよく、重き献金を備ふるなるを。

三十七、『義人や主の爲めは悦べよ』(聖詠三二の二)『主の爲めは悦べよ』とは
 爾曹の業の善く上達したるが爲めはならず、身の健全をもて樂むが爲めはあ
 らず、又我が田地のもろくの果實は富むが爲めはもならずしてたゞかく
 の如く美しかくの如く善しかくの如く睿智なる所の主を有するよよるな

り、詩は義人等をして此の如き主宰の僕となりて言ふべからざる欣喜と踴
 躍とをもて主宰は役事するを樂むを賜はりしと宛も至善者は對する愛の
 大悦より其心を奪はれし如くなる己の價値を覺知せしむるなり、もし何
 の時か落ち來れる光の如く汝の心は俄に神を思ふの意思を生じて爾の靈
 を照らしこれよりて爾は神を至愛して世界と凡て形体は屬するものと
 を輕んずるあるや此の弱くして少しく似たるものよりても義人等を一
 様と且絶間なく神の爲めは樂むは成長せしむる充分の狀況を悟るべし、神
 の照覽は依りて時々或は且罕れは此の喜を爾は賜はるとあるはこれ此喜
 びを少しく嘗むるよりて大なる善の爾は幾許缺乏するを憶はしめんが
 爲なり、さりながら義人は常は神妙なる天上の樂みのあるあり、何となれ
 ば彼れは疑なく聖神の住るあればなり、主は義人等の爲は恰も彼等を容る
 ゝ場所の如し、かくる場所は入る者の爲めは善心ならざるを能はず樂まざ
 ると能はず、而して義人も亦主の爲は彼を己れよりくるの場所となるを

得べしされど罪人は己れに於て魔鬼の所を興ふるなり(エフェス四の廿七)故に主は居りて出来得るだけ主の奇蹟を直覺しつゝ此の直覺によりて己が心の爲めは樂みを得ん。

三十八、もし誰か聖として仁慈なる神の導く所となり自ら己を妄想せずして他を高うせんが爲め己を卑うし或る大なる事を願ふて心神より呼び而して地は属する事又は世の事を尋ぬるをいひ顯はす所の不當なる事や下等なる事は絶て口は發するあらざらんか此の願者の呼籲は主は聽かれん。

三十九、『神は我等が避所と力なり』聖詠四十五の二、何も不當は避くるなかれ誰まも不當は就く勿れ。さりながら爾は一の避くべきものあるべし、罪なり而して一の就くべき所あるべし、神なり、人多くいと、神は我等が避所なり』と、さりながら預言者の如き心地をもて此をいふ者少なし、そはすべてを皆神は托ぬるまあらざればなり、又すべて彼れ一りをもて呼吸するまあら

ずしてすべて彼れ一りは希望と篤信とを有するま非ればなり、そもこの實際は我等憂患に於て凡そ他の者よりは疾く趨り就くもたゞ神は就かざる時、我等を證實するなり、爾の子女病するか、爾は占卜者を尋ね、或は罪なき子女の頸は掛くる虚妄なる符章（まじまじ）を尋ねん、夢が爾の心を攪し、や、爾は占夢者、趨り就か、爾は敵を怖るゝか、保護者を人中の或者は尋ねん、總てもろゝの必要に際し汝は言語の上は神を避所と名つくれども實際は無益なる者と虚妄なる者との助を要求するまより自ら己を證實するなり、されども義人よりは眞實の助あり——神なり、將軍は勇猛の軍兵を有して常は弱きを助けんを欲するが如く神即ち我等の助力者たり、凡て魔の姦計は向つて戦ふ者の救援者たる者も救を要求する所の者にとむる諸靈を遣はすなり。

四十、預言者はいへるあり『耳を傾けり』聖詠百十四の二、これ爾をして神に對して或る物体上の見解を下し彼れ耳を有するも靜聲の故にこれ耳

を傾くると猶我等低聲よ言ふ所の者に耳を近づけて其の言ふ所を更よ善く聴かんと欲するが如しと思はしめんとよあらず。彼れ傾けりといひしは汝の固有の病症を證示せんが爲めなり。即ち下よ臥す所の我れよ仁慈なるよより恰も仁慈なる醫の如く大よ衰弱して明よ言ふ能はざる所の病者よ耳を傾けて其の苦む者の要用を近く明よ知らんが爲めよ降り給ふを示すなり。神の耳は聞かんが爲めよ聲音を要すると有らず。神は心の發動よより願ふ所を知る。モイセイは何も言はざりしも無言の慨嘆をもて主よ祈りしよより主の聴く所となりしを聞かざるか主は彼れよつげて曰へり。何ぞ我れよ籲ぶか。出埃及記十四の十五。

聖約翰金口の教訓

祈禱及び惺々の事

一、主は爾の物を掠めたる者と爾より貪りたる者とを赦さんとを誠命せしのみならず更よいへらく最強く最誠實なる愛をもて其者を愛すべしと。けだし主は此を實よ此を勤めんと欲していへらく。汝を虐待する者の爲めよ祈禱せよ。路加六の廿八。これ即ちたゞ汝を甚だ愛する者よ對して汝が爲す所のものなり。かくの如くハリストスは虐待する者の爲よ祈禱せんとを誠命し給へるよ我等は彼れよ對して伏をまうけ我等を誣ふ者を祝すべしてよ命令を既ようけて千々の誼を彼れよ被むらしむるなり。

二、汝等いへらく祈禱するとは我れ家よありても能ふべし。されど教談又は教理をきかんとは家よありては能はずと。福音經を讀みし後金口の教談をきき終りて聖堂より退出する者等證責せらるゝなり。人よ汝は己を欺く

なり祈禱するとは家よりでも無論より爲し得ん、されども聖堂に於るが如く祈禱するとは爲し得べからざるなり、彼處よりはかくの如く神父の多きあり、彼處よりはかくの如く同心の呼籲を神よりさしげらるゝあり、汝ち自から獨り主より祈禱を行ふ時はかく己の兄弟と共にする時の如くは聽かれざるべし、けだし此處よりは更にますます多きものあり、何ぞや一意同心と和合一致と愛の同盟と司祭の諸祈禱是れなり、司祭は集中より前立して夫の固より最弱き所の民の祈禱をして最強き祈禱にて擧られこれと共に天より上るを得しめむが爲めより立てられたり、されど祈禱を傳道と合するあらざる時は傳道より何人よいかなる利益やある、先づ祈禱次は傳道なり、使徒等もかくいひたりき、曰く「我等は祈禱及び傳道を専らつとめん」(行傳六の四)又パウエルもかく爲しぬ、光の燈臺に於けるが如く祈禱の光も傳道より先たゝんが爲め、彼は其の書札を常に祈禱をもて始めたりき、もし己を切に祈禱を行ふとよ習はしめんか、爾よりひとしき僕より教導をうくるの必要あらざらん、何

となれば其時神は自から何の中保もなくして汝の智慧を照すべければなり、されば一人の祈禱にしてかゝる力を有するならば、まして多人と一致合同ある時の祈禱に於てをや、この祈禱は家より獨り行ふ祈禱よりも多くの力あり多くの勇氣あり、よろしく聽くべし、聖パウエルが此事をいかにいひしを、曰く「既に我等をかくの若きの死より救ひ、今も救へり、後にも亦猶われらを救ひ給はん、爾曹もわれらの爲に祈りて相助くかくて、許多の人より我儕に賜はりし恩寵を、許多の人も我儕が爲に感謝するよ、至らん」(コリシ後十、十一)又かくの如くしてペートルも獄より脱れたりき、何となれば「教會は彼の爲に熱切に神に祈りたればなり」(行傳十二の五)さて教會の祈禱はペートルもだも益をあらはし、ならばいかん、汝は我につげよ、祈禱の力を輕んじてこれが如何なる辨解をなし得るか、またよろしく聽くべし、許多の民の善智をもて祈禱に於て切願するある時は、傾向せざるを能はずとは是れ神自からいへるなり、けだし主はイオナに對し「ニニビヤ人を速に憐みし

とを辨解していへらく「汝は勞をくはへず又生育てざる此の瓢の一夜も生じて一夜も亡びしを惜めりまして十二萬餘の右左を辨へざるものと許多の家畜とあるこの大府ニキビヤ城を我れ惜まざらんや」約拿四の十、十二これ神は單に民の多きを示すもあらず併て汝も多人合同の祈禱の神も大なる力を有するを了會せしむるなり。

三、我等が日常勸勉の主旨は熱心の祈禱も添ふるも清醒の思と不眠の靈とを以てせん是れ聖堂に於て聖體禮儀の時是なり。魔鬼は汝の靈魂の祈禱に於て奮然醒起するを見るや己の爲に汝の思も入る所の途の通過し難きものとなれるを了知す。汝の忽々として自己も注意せざるを見れば彼れ直ち汝も跳び入ると住者の棄てたる空屋も入るが如くならん。されどももし汝の自から心を集中し眠らずして天も懸るが如くなるを見るあるや彼は汝を窺ふだも敢てせざらん。されば己れを愛みて姦惡なる魔鬼の汝の靈も入るべき途を杜ぐべし。奮勉熱切の祈禱程彼が吾等を襲ふの途を杜絶するものあらざるなり。

四、補祭が高聲も呼んで「直くして善く立て」といふ時は汝ち何を命せらると思ふか。これ他もあらず我等下地も流落する所の思念を復興し世事も醒寤たるもより吾等も生じたる心神の懶惰を振ひ落して己の靈魂を神の面前も直立せしむるとなり。是れ實もかくの如くもして此言の身体も關するもあらずして心靈も關するものなるとはパウエルが此言を特も此の意義もて用ひしを見て知るべし。けだし彼れ災難の輓下も在て落膽せんとしたる人々も論及していへらく「疲たる手も弱りたる膝とを直くすべし」エウレ^イ十二の十二。こゝもパウエルは身の手も足との事も論及すといふか。決して然らず。けだし彼は馳驅と格闘とを競争する所の者も向ひて言ふもあらず。此等の言をもて誘惑もより破られたる内部心念の力を復興せんを勸説するなり。

五、思へよ爾は誰の近きも立つか。誰と共に神を呼ぶも前進するか。ヘルワイ

ムと共よするなり。そも此の汝と共よ一の詠隊よ立つ所の者よ心を留めよ。さらば汝ち体よて扱はれ肉よて組織せられたるものよして無形の者と共よ萬物の公なる主宰を讃頌するを賜はりしを記憶する時は汝の慍々を支ふるよ此よて充分ならん。ゆゑよ此の聖なる奥密の歌よ關係して誰もこよ散乱したる注意と弱らしたる熱心とをもて立つなかれ。誰も是時よ於て此世の思念を持する勿れ。すべて地よ属するものを心より逐ひ全く天上よ移りて至聖なる歌を光榮尊嚴の神よ捧ぐると宛もセラフムと共に手を携へられて光榮の寶坐の近きよ立つが如くなるべし。これが爲め我等よ是時よ於て善く立たんとを命せらるゝなり。けだし善く立つとは他の義よあらず人が神の面前よ立つよ適當するやうよ立つをいふ。即ち畏れと戦さと醒々なる不眠の靈をもて立つをいふなり。

六、且此の言立つといふ言も心靈よ關するものなるとは同く又聖パウロこれを示しきいはく「愛する者よ汝等は堅く主よ立つべし」『フィリップ四の一』

けだし射者は箭を眞直よ鵠よ放たんと欲せば先づ自ら己を整立するを心掛け然して既よ正しく鵠よ對して整立したる後よ射始むるが如く汝も魔鬼を射るよ其の悪なる頭を射んとを願はゞ先づ思を整立せんを心掛け正しく且無礙の位置よ確立して彼れよ箭を正しく投せざるべからず。

七、祈禱は大なる武器なり。匱さざる寶なり。永く費えざる富なり。波たゞざる濼なり。扱あつかされざる穩靜なり。されば無數の善の根本と源泉と母とは祈禱なるべく。彼は帝王の權よりも強し。さて余がいふはある祈禱の事よ非す怠慢なる且は散亂したる祈禱をいふよ非すして傷める靈と深く集中したる智とより出づる所の奮熱よして重厚なる祈禱をいふなり。たゞかくの如きの祈禱は天よ昇らん。

八、それ水の平地を流れてひろく汎溢する時は高く擧らざらんもし巧者の手をもて其の四方を圍みてこれを壓する時は其の壓迫よより水の上方よ注すると箭よりも疾はやからん。かくの如く人の心もすべての安慰をもて

樂みつゝ放心し且汎濫すべし、されど事情のこれを壓着するある時はその
壓搾せられたる心は潔く且熱切の祈禱を天よさしぐるなり。且や汝は此の
祈禱の即深憂よりてさしげらるゝ祈禱の天よ大有力のものとなるべき
を確信せんと欲するか預言者の言ふ所をさくべし。曰く『我れ憂の中よ主よ
呼びしよ主は我よきけり』聖詠百十九の二『されは我等も己の心を奮然よし
罪を記憶して心臓を裂かん、これたゞよこれを壓着せんとあらず、これを
清醒不眠なるものとなし天よ關係するものとなして其の祈禱の聽かるゝ
よ準備せんが爲なり。

九、『神や我れ罪人を憐み給へ』税吏はかく呼べり而して彼はフリセイより
も義なるものとなりて殿より出てたりき路加八の十三。そも言は行よりも
高くあらはれ語は功よりも超えて脱出したりき、彼は己が義なるを禁食
と什一の税を言ひあらはし此はたゞ一言を發して行なく悉くの罪の赦
を獲たりき。何故かくの如くなりしか。神は一り言のみをさかずして殊よ言

を發する所の心情に注意し、彼の悲痛謙遜なるを見て憐んで仁慈を垂れ給
ひしよよる。我がかくいふは罪を行へよといふよあらず謙遜すべきをいふ
なり。けだし税吏は最悪の人謙遜せずしてけだしすべて悪なる者よ謙遜は
何の益あらんたゞ善智を發し己が罪を言ひあらはし有りのみよ己を告
白してかくの如き神の仁恩を己れよ引きしならばまして多くの善行を作
して毫も己を高く思はざらん者よ於ては神の寵佑を己れよ引かんを幾何
か大なる故よ余は常よ汝等すべての人よ願ひ且祈り且矢はん願くは出來
得るだけしば、己の罪を神前よ告白せんを、我れ汝を公衆の前よ曳出
すと觀場よ曳出すが如くせず、自己の諸罪を人々の前よ暴露せんを強め
ず、神の前よ己の良心を露すべし、神よ己の傷を示して彼れよ愈を願ふべし。
彼の辱めずして愈を與ふる者よ示すべし、雅各一の五、だどひ爾は黙々すと
も彼れは既よ一切を見るなり。たゞ言ひあらはすべし、さらば益をうけん。言
ひあらはすべし、罪のすべての重負を此處よ脱ぎ去て罪のもろくの疵を

なくし潔きものとなりて彼處より移らんが爲めなり、堪ふ可らざる罪の宣告〔怖ろしき審判よ於て〕を免れんが爲なり、三人の童子は獨一眞實なる萬物の主及び神を信認せんが爲よ己の生命を犠牲として火爐に投せられたりき、されど箇程の勇毅をあらはし、後いへらく『我等は口を啓く能はず、爾の諸僕と爾を尊奉する者の爲よ耻辱となれり』但以理三の三十三、希臘原文に依る』さらば汝等何の爲よ己の口を啓かんや、たゞ此の一言、即ち『我等口を啓く能はず』といはんが爲め、且此の一事をもて主をして哀憐すべからしむるが爲めよ口を啓かん。

十、祈禱の力は火の力を消し獅子の咆哮を鎮め争を絶ち天の門を啓き死の鎖を解き病を逐ひ侵攻を拒返し都府を地震より救ひ上より降るの打撃と人々のかまふる詭誣と總てもろくの災難を除けり、されど余がいふはたゞ口中に於て旋轉する所の祈禱をいふよ、あらずして心の深きより出づるものをいふなり、けだし地中より深く根を托したる樹のいかなる烈風も當

るも倒されず覆されざるが如し、其の根の堅く樹を地中より持するよよる、かくの如く心の深きより献げらるゝ祈禱も彼處より根ざし安然として天上より向ひ往きて思念のいかなる打撃を以てするも其の方向を變せられざるなり、故よ預言者もいへらく『主や我れ深き處より汝よ呼ぶ』〔聖詠百廿九の二〕十一、我等は祈禱の事よ論及せしと既よしばくなり、されど今またこれを言はん、けだし我等が衣服も若し其の縫合はされたる原料がタゞ一度着色したるものたらんよは此の染料は易すくすみやかよ剝落すべからんも若し染工が數回染料をもてこれよ着色せしならんよはその色永く變らずして存するが如く我等が心靈もこれよ同じ、もし汝は何の訓誨をかしばよきくあらば深く染めたる着色の如く容易よ忘れざらん、されば祈禱の事よ關する説教は序でながらよきくべからざるなり、けだし何物も祈禱より有力なるはなく又何物も祈禱よ等しきはなかるべし、紫衣を被むる王といへども燦然と光り輝くと神との談話よて飾られし祈禱者よは及ばざるべ

しけだし若し誰か諸の軍勢大將又は各種の首領たる人々の面前に於て王
 は接近しこれと相對して談話したらんは衆人の視力を己れに歸せしむ
 ると同時に衆人の目も特は勳功と榮譽とに當るべきものと見ゆるが如く
 祈禱する者も於てもかくの如くなるべし。是れ此の人が諸神使の在前と首
 領神使たるセラフイムヘルフイム及ひ凡て他の無形なる天軍の前立する時
 於て大に侃々として此等衆軍の王も前進談話するのいかなるを想ふべし
 いかなる榮譽をか彼れに被らしめざる。されどたゞは榮譽のみならず我
 等が爲る祈禱もよりて願ふ所をうくるの先も甚だ大なる益あらんけだ
 し誰か手を天に舉げて神を呼ぶあるか、これと共に彼は直ちすべて人間
 の事を脱離し思ひて來生に移らん、それよりしてもし熱心は祈禱するあら
 ば既にたゞ天上の事を冥想直覺して現生に属する所の事は祈禱の時
 當り毫も意を留めざるべし。是より先き彼れは怒の動きたるありしや、そは
 此に因りて易く打消さるべし。情慾の熱えたるありしや、消散すべし。嫉妬

の蝕入りたるありしや、大に易く逐拂はれん。此の時心靈は於ては日の出
 つるとき万物も於て成る所のものと同じきもの、成らんと預言者の言ふ
 が如くなるべし。預言者のいかよひしを記憶すべし。曰く『汝ら暗を布けば
 則夜あり彼の時林の獸は悉く出て廻る獅子は獲物の爲に吼て其食物を神
 も乞ふ日あれば彼等集まりて己が穴に隠れ伏す』聖詠百三の廿至廿二。され
 ば太陽の光の現はるゝに際し諸獸走りて己の穴に隠るゝが如く祈禱も或
 る光線の如く我等が口と我等が舌とよりあらはれ出づる時は智識は光照
 せられて凡て無智なる獸欲は退却潰奔しておのゝ其穴に隠れん。たゞ我
 等は不眠の靈と清醒の思をもて當然に祈禱せん。其時悪魔は近きよある
 べし。彼れ逐拂はれん。魔鬼も居るべし。逃奔せん。
 十二、主は我等も模範を示さんが爲め多くの事を成し給へり。又同じ主
 意よて彼れは多くの祈禱をも行ひ給ひき。門徒等の主に就きて祈禱すると
 を教へ給はんを願ひし時〔路加十一の二〕主はいかよ爲すべかりしや、我れよ

告げよ、彼等よ祈禱するを教へざるべかりしや、されど彼れが其後來れるは亦門徒等をもろくの智徳よ升さんが爲めなりき、されど若し祈禱するを教ふべかりしならば自らも祈禱すべかりき、汝はいはんこは一言よても爲すを得べかりしと、されど言よて教ふるは行よて教ふる程教へらるゝ者の上よ強く感徹せざるなり、故よ主は門徒よ祈禱を教ふるもたゞ言のみを以てせず自らも同くこれを行ひて終夜閑靜の處よ於て祈禱せり、これ我等よ神と談話せんと欲する時は世の喧噪又は風説を避けて遠く野處よ逃るべきをを教へ且勤めて祈禱の爲めよ場所を適用すべきのみならず時をも適用すべきをを以てし給へるなり、野處とはたゞ山のみよならず喧噪の近づかざる或る住所をもいふなり、且彼は餅を祝する時天を望み見て祈禱し給へり、馬可六の四十一「これ我等よ諸の果實を造れる神よ感謝せし後よわらずんば先だちて食を嘗むべからざるを教へんが爲なり。」

十三、生命の正さと潔きとを立て且これを固めんはしばしこゝよ聖堂

よ在りて熱心よ神の言をさくよ勝さるものある能はず、けだし身体の爲めよ食物を要するならば心靈の爲めよは神の言を學ばんを要す、「人は餅のみよて活くるよわらずすべて神の口より出づる所の言よて活く」復傳律令八の三、故よかゝる食物よあづからざるはそれよ甜ふの飢を生すべし、而して神は其者を嚇して被らしむるよ罰と譴とを以てすべし、主いへらく「我れ飢饉を地よ送らん、これ餅よ飢ふるよわらず水よ渴くよわらずして主の言を聴くの飢饉なり」アモス八の十一「さてかくの如くなれば身体上の飢を除かんが爲めよはすべて爲さざる所なく、慮らざる所無らんも心靈上の飢は自から甘んじてうけんと豈顛倒よわらずとせんや、反りて後者は前者よりも更よ禍なり、即ち彼れの最重要なる丈それよよりて損害をうくるとも最重し、ゆゑよ我れ爾等よ願ひ且祈る自己よ對してかくの如き惡謀を企つべからず、こゝよ聖堂よ留まるとを他のもろくの行事と業務とよりも貴んずべし、けだし我よ告げよ、汝はいかなるものを獲んも汝の爲よも又汝の家

の爲も聖堂の集會を轍つひるよりてうくる所の損害と比すべきもの
 るかたとひ汝は髓つて黄金を全く満たしたる寶庫を見付けてそれが爲め
 こゝも來らざりしといへどもすべていよく大なる損害を汝はうけん、靈
 神のものは物質的のものに比すれば貴重なるだけその損害も隨て大な
 り、彼はたとひ多からんも彼れは處々方々よりいよ／＼ます／＼來り來
 らんも事大なるよわらず、何となれば彼は我等も彼處の〔未來の〕生命も伴ふ
 とわらず、我等と共に天も移らず、畏るべき寶坐の前もたゞすして却りてそ
 の一部は終焉も先ちてさへ我等を棄て、飛散せんとす、たとひ生命の終り
 も至るまで我等の手中も殘らんも到底其の終りも於ては我等より奪はる
 りなり、されど靈神上の寶は奪はる能はざる獲物なり、即ち常も我等も伴ふ
 べく此處より移るも際しては我等も隨ふべくして裁判者の前も於て我等
 も大なる勇毅を與ふるなり。

十四、我等は聖堂の集會もわるもより二様の果をうくべし、我等己の心を

神の言もて滋潤せらるゝとのみ此の果なるよわらず、我等これも頼りて敵
 もは至辱を被らしめ我が兄弟もは慰藉と愉快とを得せしむるとも此の果
 なり、けだし誰か此の聖なる庭も近づきて集まれる者等の多からざるを見
 ん時は其の有する所の聖堂も對する熱心は直ちも冷かくなり懶惰の俄も
 發作するあり全く弱わりて聖堂より他も遠ざからん、されど處々方々より
 悉くの熱心をもて聖堂も急ぎ神も奉事するも集まり來れるを見ん時はた
 どひ彼れ甚だ怠慢なる且不注意の者たりとも此の熱心者を見るもは彼れ
 もも同様の熱心を燃起せんとす、けだしもし石と石と相摩るは速も閃光を
 出たすべく、石は冷もして火は熱きもこれを相擊つは天然も克つならば、十
 一石もしてこれあるならばまして心靈の互も相摩擦し互も靈火もて煖め
 らるゝ時も於てをや。

十五、夫は婦の首エフェス五の廿三もして婦は夫の補助者なり、ゆゑも首は
 其の体なくして此の聖なる所もみちびくの途も上らんとを決するなかる

べく又体も其の首なくして此處よあらはれざるべし、首も体も自から其の諸兒を携へつゝこゝよ入るべし、けだし樹を其の根より出づる所の新芽と共に見るとの樂しからんよはまして其根より出づる嫩芽の如くなる兒女を自から携ふるの人を見んは特よ樂しかるべし、而してたゞよ樂しさのみよあらずこは作善たり且は頌揚すべきものたるなり、集會せる者等の爲よ作善たるとの義は我れ前章よ於ていひしが如し、而してこは父母及び言の役者の爲めよは頌揚すべきものたり、蓋し我等農夫よ驚くは其の既よしばし拓開したるの地を耕作する時よあるよあらずして其の未だ耕さず未だ種かざる地を取りてこれよ百般の配慮を適用しこれをして膏腴ならしむるの時よあり、聖パウロもかくの如く行爲したりき、彼はハリストスの名の既よ稱へられし處よは福音を傳へずして未だとなへられざる處よ傳ふるをもて己が榮となしたりき、我等も教會を成長せしむるが爲め及び吾人自己の益の爲よも彼れよ倣はん。

十六、王冠の首を飾るは全世界よりも光榮なる十字架程よあらざるなり、先よ衆人の恐怖して避けたるものは今や衆人の爲よ大よ願欲せらるゝものとなりぬ、爾も到る處よこれを見ん、首領たる者よも属下たる者よも妻と夫よも處女と嫁女よも奴隸と自由の人よも各々見ざるなし、衆人はしばしこれに其の身体の最重要なる部分よ印し且其の額上よ畫するは紀念標よ畫せられしもの、如く日々これを佩びんとす、彼は聖なる食物よしるされ彼は神品の手撫よしるざる、彼は復たハリストスの体と共に機密の晩餐よ輝くなり、おのゝ彼を何處よも主なるものとして見んとす、——家よ市よ野よ路よ山よ丘よ海よ舟及び島嶼よ床榻、衣服及び武器よ金銀の器物、寶石及び塔壁の裝飾よ魔鬼よ恐られたる身体よ戦時よ平時よ晝よ夜よ見ざるよなきなり、吁此の奇異なる賜——この道よ可らざる恩寵は衆人の爲よかくの如くよ願望せらる、誰もこれを耻ぢず誰も其の辱死の記號たるを思ふて己の面を掩はざるなり、却りて衆人はこれを以て飾ると冠冕、頭飾及び

無数の眞珠をもて飾るより甚だし。

十七、臥褥の極好き裝飾を見んと欲するか。余は今汝は臥褥の裝飾を示さん。或る尋常村民の臥褥はならず又軍人の臥褥はもならずして王の臥褥の裝飾なり。汝は凡ての自愛者中最自愛する者たらんも然も其の臥褥の王の臥褥より猶美麗ならんを願はざるとは我れ全く保證するなり。ましてこの王は或る王はならず諸王の王たる第一の王として今に至るまで全世界に光榮なる者なるをや。余は汝は福なる太閤の臥褥を示さん。彼の臥褥のいかなりしを知るか。彼は最善く飾るは金と銀とを以てせずして涙と痛苦とを以てせり。此の事を彼は自ら言へり。曰く『毎夜我が榻を濡ひ我が涙よて我の褥を濡す』聖詠六の七、涙は眞珠の如く何處にも臥褥は洩入られたりき。そもく汝は我れよきして彼の神を愛する靈のいかなりしを見よ。蓋し晝は民政と軍事との爲は多端の配慮と注意の彼を誘引したりしにより彼は痛悔と祈禱と涙との爲は他の衆人の安んじ樂むべき休息の時間を用ひたりき。

而して彼の此をなしは一夜を徹醒して他夜を休息せんとはならず或は二三夜眠らずして間を得て安息せんとはもならずして毎夜かく爲したりき。いへらく『毎夜我が榻を濡ひ我が涙をもて我の褥を濡す』と以て其の涙の多きと涙は常なるをあらはせり。人みな休んで安んじ耽りし時彼れは獨り神と談話し悲痛と哭泣とをもて己の罪を認め目を閉さしりき。さて汝もかくの如き臥褥を自ら備へよ。黄金よて被せ飾りたる臥褥は一方よりは人々の嫉妬を引起し一方よりは神の怒を燃起せん。されど太閤の涙の如くなる涙は地獄の火をだも打消さん。

十八、何故神は我等の靈はかく日夜徹醒して眠らざる裁判者を入置き給ひしや。我れ言ふこれ即ち良心なり。人類の間は我等の良心の如く倦まざる裁判者あるを無し。外部の裁判者は金銀も腐らすべく諂媚も弱らすべく畏怖も其の權衡を枉げしむべく其他事の義なる判決より離れしむるもの多くあるべし。されど良心の裁判所は何を以てもかく傷はれざるなり。金銀も

與ふべく、諂媚も濫すべく、恐嚇もなすべく、他のいかなる事も爲すべし、されど良心は罪を犯せる意念に對して義なる判決を施行せん、而して自から罪を犯すあれば他の何人もこれを罪に證實せずと雖も彼は自ら己を定罪せん、而してこれは一次二次はあらずして多次且畢生の間もこれを爲して止まざるなり、時を大に經過するともあるべし、彼は未だ曾て爲し、所の事を忘れざるなり、罪を行ふ時も罪を行ふ先も又其の行ひし後にも嚴く我等に裁判を施し罪を犯し、後には殊に然り、其の罪を行爲するの時、於ては罪の甘きと醉へる我等はかくの如く、感ぜざるなり、良心の責をされども罪既に成りて罪事の終りに至りし時は罪の甘味竭きて悔改の痛き刺撃を覺えんとす、そも子を生む者はこれと反對なり、彼れ子を生む先きには堪ふべからざる痛みと裂かるゝ如きの苦みあらんも生みて後は喜びと安息のあるあり、けだし胎實の出つると共、すべての痛苦も去ればなり、されどこゝには然らず、罪の思念をうけて罪の欲望を起す時は喜び且樂めども

かへりて惡子即ち罪を生む時、は生まれし者の汚辱を見て子を生む者よりも更し甚しき苦痛と惱み且裂かるゝなり、故に汝は願ふ生長する所の淫慾を特に最初に於て受くるなからんとを、もし受くれあらば此の苗子を直ちに滅すべし、成熟してこれより果の生せざらん先、されど若し不注意に依りこれが入るをゆるすあらば痛悔と哭泣と自ら己を罪するをもて實地に成れる所の罪を速に打殺すべし、けだし悔改と涙にて己を罪する程罪を破壊するものあるなければなり、爾ち己を罪に罰したるか、爾は己より罪の重負を脱去せり、そも、此を言ふ者は誰なるか、神なる裁判者自らなり、「汝ち義と稱せられんが爲に先づ汝の不法をのべよ」(イサイヤ四十三の廿六)さて何故汝は己の罪を告解するを耻ちて赤面するか、我もつげよ、汝これを人もつぐるは豈人をして汝を辱かしむるを致すか、或は汝の同僚も告解するは此事を衆人につげしむるを致すか、否らず、汝は憐憫仁慈の醫たる主、己の疵を示すなり。

十九、汝ち罪人なるか。入りて(聖堂)痛悔せよ。神よつげていふべし。我れ罪を犯せりと。我れ罪を犯せりといはんは何の難きとやある。もし汝ち自から罪人といはずんば汝は魔鬼をして己を責むのる證者(裁判に於て)たらしむるをわらざらんや。されば汝は先んじて魔鬼の此の働を奪ふべし。けだし罪するとは魔鬼の働なり。何故汝は彼れ(魔鬼)をして黙止せざるの證者たらしむべきを知るも。彼れよ先んせず罪を告げずしてこれを消滅せざるか。汝罪を行ひたるか。聖堂よ入りて神よつげていふべし。我れ罪を行へりと。此の一事の外は我れ汝より他の何事も促さざるなり。けだし聖書よいへらく「汝は義と稱せられんが爲よ先づ汝の不法をのべよ」と。罪を脱せんが爲めよ罪をのぶべし。これ難きとよわらず。これが爲めよ言を多く擇ぶとを要せず。又これよ對して何の費途をも促さず。これらの事一もあるなし。言を發すべし。自己の罪よ叡智をもて關係していふべし。我れ罪を犯せりと。汝は言はんもし我れ自ら己の罪をいはんも罪の赦をうけんとは何の處より見らるべきか。

と。聖書よ例あり。甲は己が罪をいひて赦をうけ乙は己が罪をいはずして罰せらる。是れカインと太閤なり。

二十、時々刻々祈禱せよ。されども祈禱して倦むなかれ。仁慈の神よ憐みを願ふを怠るなかれ。さらば彼は汝の切なる願より汝を棄てずして汝よ汝の罪をゆるし汝が願ふ所のものを汝よ與へん。もし禱りて聽かれなば感謝して(恩惠の爲よ)祈禱よ止まるべし。さりながらもしきかれずばきかれんが爲よ祈禱よ止まるべし。我れ多く祈禱せり然れどもきかれずといふなかれ。何となればこれ亦汝を益するが爲よしばし有るべければなり。神は汝の怠惰よして己れよ姑息なるを知る。故よ汝よきくを遷延するは汝をしていよ切よ神と談話せしめ祈禱よ時を送らしむるの必要あるよ因る。されば祈禱よ止まるべくこれよ怠慢なるを自から許すなかれ。至愛者よ祈禱を屢々すべし。祈禱よ着手するを輕重なき事よ於るが如くなるなかれ。

廿一、汝罪を犯ししや聖堂よ入りて己が罪を消すべし。痛悔よて。汝市場よ

於て幾回倒れんか毎回起きんか、かくの如く汝は幾回罪を犯すとも速く悔改せよ、絶望をゆるす勿れ、更ニ罪を犯さば更ニ悔改せよ、自棄するなかれ、我が前面ニある所の善をうくるの望みを失すなかれ、たとひ汝らは既に老て罪を犯したりとも教會ニ往きて悔改せよ、此處は病院なり、裁判所ニあらず、此處ニ於ては罪の爲ニ苦みを課せずして罪の赦を與ふ、獨り神ニ己の罪を告げていふべし、曰く『汝獨り汝ニ罪を犯し、惡を汝の前ニ行へり』〔聖詠五十の六〕さらば汝が罪は汝ニゆるされん。

廿二、汝は又痛悔の他の路を有す、難き路ニあらずして便利なる路なり、そは何なる路ぞ、福音經より學び己の罪を哭する是なり、それペートルは第一最上の使徒にしてハリストスの友たり、又人より啓示をうけしはあらずして父よりうけしものたるをば君なるハリストスの彼を證するが如し、曰く『イオナの子シモン、汝は福なりけだし、汝ニ示しは血肉ニ非ずして天ニ在す父なり』〔馬太十六の十七〕さて此のペートルの罪を犯しは或る小なるも

のニ非ずして極めて大なるものたり、即ち彼は其主を棄てたりき、我が此くいふは彼を罪せんとはあらず、汝の爲めニ悔改の導きとなさんが爲めなり、主なる全世界の君衆人の救主を導きと爲さんが爲なり、そもくこは何の時ニありしか、ハリストスの解されし夜ニ於てありき、福音經ニペートル火の側ニ立ちて罪を犯ししをいふ、婢あり近づきて彼れニ告げていへらく『汝もイエスと共ニせり』と〔馬太廿六の六十九〕そも彼れ如何ニ答へしか、曰く『我れ此人を知らず』〔馬可十四の六十八〕其後第二次も第三次も亦同じく答へたりき、而して主の預言成りぬ、時ニハリストス彼得を顧みて目もて聲彼を責むるのを發したりき、彼れの口づから彼得ニ告げざりしは彼を猶太人の目前ニ責めざらんが爲め、其の門徒を辱めざらんが爲め、よして目もて聲責むるの聲を發ししは恰も左の如くいふもの、如し、彼得よ我が爾にいひし所のもの成れりと、時ニ彼得己が陥りしを覺りて始めて哭したりき、さてその哭したるは尋常の哭ニあらず、痛く哭し、兩眼より涙を流して自か

ら第二の洗禮を立てたりき。かゝる痛哭よて彼れは己の罪を消しぬ。さてかゝる罪だも痛哭よて消されしならば豈汝も痛哭しなば己が罪を消されざるをあらんや。罪は小ならざりき。己が君主を棄てたる罪なりき。極めて大にして極めて重かりき。されど涙は此の罪を消しぬ。さらば爾も己が罪の爲めよ哭泣すべし。而して其哭泣は尋常のものゝあらず又た々外見の爲めよあらずして彼得の如く痛く哭すべし。涙の泉を深處より出たすべし。主の爾を憐憫して汝は汝の罪を赦さん。が爲なり。けだし主の仁慈なるとは其の自からひひし如し。曰く「我れ罪人の死せんと欲せず。惡者が其路を離れて生きんことを喜ぶ」(イェゼキリ三十三の十二)。彼は汝より小なる勞を望みて自からは汝は汝大なるものを與ふ。汝より端緒の出づるを待つは汝は救の寶を與へんが爲なり。涙を献げよ。さらば彼れ汝は宥恕を賜はん。痛悔を献げよ。さらば彼れ汝は罪の赦しを與へん。

廿三、いかにして主を矜恤し傾かしむべきか。これいかにすべきか。己の心

は祈禱を樹立し且これよ謙遜と溫柔とを加へん。けだし主はいへらく「我が心は溫柔謙遜なれば汝は我れよ學べ。汝等の靈よ平安を獲さすべし」(馬太十の廿九)。而して太開もいへり「神よ喜ばるゝ祭りは痛悔の靈なり。痛悔して謙遜なる心は神や汝は輕んじ給はず」(聖詠五十の十九)。溫柔謙遜なる靈の如く主の愛するものあらざるなり。慎めや兄弟よ。何か不意よ。汝を難儀さする事のある時は汝人々よ助を請ふな。かれ衆人を超え自己の思よて靈魂の醫よ。赴き走るべし。けだし心を醫するは彼れ獨りなるべければなり。『彼は我が心を造りすべて我等が行を思ふ』(聖詠三十二の十五)。彼は我等の良心よ入るべく智識よ觸るべく心靈を慰むべし。もし彼れ我等の心を慰めずんば人間の慰めは無用よして意味なきものたらん。これよ反して彼が慰むる時は數ふ可らざる人々の我等よ虐を爲すありとも。彼等は一髪も我等を傷ふ能はざらん。彼が心を堅むる時は誰もこれを擾すと能はず。至愛者よ此を知りて常よ神よ趨らん。我等を壓する憂愁の密雲を吹散さん。を欲し且これを能く

する所の者も趨りつかん。
 廿四、何の願を以てか人よ就かんを要する時は時間も場所も又其人物ももすべて適應すべくして言語のつかひ方をも考へざるべからずされども神よ就かん時は一もかくの如きを要せざるなり。たゞ心より呼ぶべし。獨り口のみを動かすなかれ。すべては茲よりあり。なんぢ祈らん時は密室に入り戸を閉ちてかくれたる隠微よいます爾の父よ祈るべし。さらば隠微よ鑒給ふ汝の父は明顯よ汝よ報ひ給ふべし。馬太六の六。汝の爲よ榮譽の過分なるを見るか。我よ願ふ時は汝ち言ふ可し誰も見ざるべし。されども我れ汝を貴ぶ。聴き且賜ふて。時は我は全世界をもて恩恵の證者となさんと。主の言よ従ひてみせしめよ展示の爲よ祈禱をせざるべし。又我等をいかよ助くるか。主よ其の方法を示すべからず。汝は最早主よ己が窮乏をつげしか。心よ痛む所をいひしか。さらば汝よいかよ助けんと。事は復た言ふなかれ。彼は自から汝よ有益なる所のものを知ると汝より勝れり。他の人々は己の祈禱よ於て多くいはんとす。

曰く主よ我れよ健康を與へ給へ。我が業を増し給へ。我が敵よ報ひ給へ。これれもろくの無智を充たすなり。我等はすべて此等の事を舍き。税吏の言をもて神よ祈らんを要す。曰く『神よ我れ罪人を憐み給へ』と。ルカ十八の十三。さて神は我等よいかよ助くべきを既に己よ知る。されば我等は中心の悲痛と謙遜をもて祈り己が膺をうつと彼れ〔税吏〕の如くして祈禱を研修せん。さらば其の願ふ所をうけん。されどもし心よ憤懣と忿怒とを有して祈禱しなば神の厭ひ憎む所とならん。されば己が心を裂き己が靈を遁り而して己の爲めよも又我等を辱めし者の爲めよも禱らん。敵の爲よ禱り惡を憶はずして己の敵よ抗せざる所の者よは神は殊よ注意すべく殊よ其の願を充たしむべし。されば彼等はいよくかくの如く行は。神はいよく其の敵よ報ひん。たゞ彼等悔改すべからんのみ。

廿五、ニテピヤ人は三日の間よ罪のいかなる多きを除きたるか。神のいかなる畏るべき宣告を避けたるか。そも怯懦なる勇氣ならざる。靈はたとひ悔

改は多時を經過すとも特別の事を一も爲すあらずして神と通和するを得ざるが如く反りて熱心よして燃ゆるが如く全く痛める悔心をあらはす所の奮興したる靈は多年の罪を暫時よ消滅するを得べし。ペートルは三次諱みしよ非ずや。而して三次誓を發したるよ非ずや。而していやしき下婢の言よ對して恐れたりしよ非ずや。何ぞや。多くの年月は彼を痛悔よ要したりしや。幾何もあらずき。されば彼は同夜の中よ且滑落し且興起して健全よ趨り登りぬ。いかよ如何なる方法を以てせしや。哭して心を裂くを以てし且單よ哭するのみならず心の大なる悔悟と深き悲痛とを以てしたりき。故に福音記者もたい哭せりとのみいはずして痛く哭せりといひたりき。哭するとの何程強くして涙の幾ばく富みたりしは何なる言もいひあらず能はざるべし。さりながら。ては事の由て出る處を明示するなり。けだし箇程よ災難なる墮落の後よ於て——けだし主を諱むより災難なるものはあらず——かくの如き墮落の後よ於て主は彼を再び以前の位地よ上せられたればなり。か

れば汝も罪の重荷の下よ陥るとなかれ。罪よ於て最危きは罪よ止まるよありて陥るよ。於て最禍なるは陥りて寝ぬるよあり。廿六 神よ依りて哀むの力は大きして大なる益を産まん。これをあらはさんと欲して預言者イサイヤの言ふ所を見よ。否寧ろイサイヤよ頼りて神の自ら言ふ所を見よ。曰く「罪の爲めよ少しく彼を哀ましむされど彼れの哀み老衰して行くを見て彼を愈せり」其意いへらく我れ罪の爲めよ罰を定めたるは何か當然よ非るがごとし。けだし徳行の爲よ報ゆるよ。於て神は當然の量を超ゆ。されども罪の爲よは往々たいこれに證實するのみよして罰よ至では時としてこれを遣はすもその犯罪よ比して常よ軽くし給ふなり。さりながらも。誰か己の罪を悔改するあらば此をも廢せんと。前文よ引用したる言は此事を指示すなり。悔改より流るよ利益のいかよ速よいかよ大なるを見るかい。へらく罪の爲めよ彼を多く罰するをせずして彼の哀み老衰して行くを見し時はこの小なる罰だも彼れよ赦せりと。かれば神は我

等と復和するとよ急ぎてこれを支度したとへ至小なりともたゞ其の端緒のあらはるゝを待つなりされば常々神は機會を與ふべし己を罪より守らんとよ百万盡力しもし陥る時は主よよるの喜を得んが爲めよ罪の爲めよ痛く哀むと共に興起して其の我等よ愛をあらはすの機會を與ふべし夫れ大よ哀み老衰して行く者よして神を己れよ復和せしめたらんよはこれよ加ふるよ涙を以てし熱切々神よ祈る者よ於ては何をか遂げざらん。

廿七、紅海の濱に於て神はモイセイよつげて「我れよ何を願ふか」と宣へり然りと雖モイセイは何もいふなかりきそれ此言をもて神は左の義をあらはせり即ち我はたゞ其の口より出づる所のものを聞くのみならず心よある所のものをも知るの神なりと祈禱は口よ呼ぶ所のものをいふよあらずして心よ動く所のものをいふ「我れよ何を願ふか」とは彼の口はいはざりしも心はよびしなり速々聽かるべき祈禱は善心より出づる所のものよして一大音聲よて發するものよあるよあらず。

廿八、神の聖なる諸僕を祝讃し且これを嘆美するの當然なるはその原因二あり即ち一は彼等自ら己が救の希望を熱心の祈禱よ据ゐたりしよよる、又一は彼等が畏れと喜びとをもて神よさしげたるの唱歌と祈禱とを書籍よより保存して我等よも此の寶を傳へ凡そ彼等の後よ來る所の諸族をして其の祈禱の熱心よ倣はしめたるよ因る(けだし師の行狀は門徒よ移るべくして預言者よ聽く者は預言者の義よ倣ふ者となるべければなり)これ即ち我等をして亦彼等の如く生涯を全く祈禱と奉神禮と思神とよ於て送りこれをもて或は生命とも或は健康及び富みとも或は幸福の最上とも思ふて純然無玷の心靈よより神よ不斷々祈禱するを得しめんが爲めなるよ因るなり。

廿九、太陽は身体の爲よ光なるが如く祈禱は心靈の爲よ光なり誓者の爲よ日を見ざらんは大なる剝奪なりとせば「ハリステアニン」の爲めよ祈禱よよりハリストスの光を己が心靈よ入るゝ爲めよしばしば祈禱せざらんは

如何の大なる剝奪なるか。

三十、神が人々を祈禱に於て神と親しく談話するを得るの榮を賜ふて吾人に現はす所の仁慈は誰か驚かざらん、誰か駭き異あやしまざらん、けだし吾人は祈禱の時、於て實に神と談話し且これより諸神使と互に相接して他の生あれども無智なる所の造物よりは遠く離るればなり、祈禱は神使の行なり、祈禱は神使の職位をさへ大に高うす、蓋し神と談話するは神使の職位より一層上なればなり。

三十一、神使等は、大なる畏れと喜びとを以て己の祈禱を献げて我等も祈禱より神に就きて畏れと喜びとをもてこれを行ふべきことを我等も教ふるなり、畏れを以てすとは我等祈禱に堪へざるものとなりざらんか、と戦々競々するなり、又喜びを以てすとは我等死すべき族にしてかくの如くしばしば神と談話し且これより我等死すべき者たると一時の者たるとをやむる程神の恩恵を賜はりし榮譽の大なるか、故より我等此時かなら

ず喜びも充たさるゝものとなるべきなり、蓋し天性よれば我等は死すべきものたれども、たゞ神と談話するより不死の生活に移らん、けだし神と談話するものは死と腐敗とより一層上よ居らざる可らざればなり、太陽の光線に圍まるゝ者は至微の暗よりさへ遠ざからざる能はざるが如く、神と談話するを賜はる者は死より上よ居らざるべからず、かくの如き榮譽の大なるは我等を不死の範圍に移すなり、不死の空氣を呼吸せしむるなり、それ王と談話を接して王より榮譽を賜はる者は何れに於ても乏しかる能はずんば、まして祈禱に於て神と談話する者は不死の靈魂を有せざらんや、けだし靈魂の死とは不信と無道なる生活とをいふ、さればこれと相反して靈魂の生とは神を奉事すると又これに應ずるの生活をいふなり、さて祈禱は克肖なる生活と神を奉事するに相應するの生活を準備して我等の靈魂も奇異よこれを藏せしむるなり。

三十二、誰か童貞を愛し始めたるか、將た誰か婚姻の清潔を熱心よ貴んず

るか。誰か忿怒を鎮め溫柔をもて己が同居たらしめんと決意したるか。或は誰か潔淨をもて己を嫉妬より守り又は他の適當なる事を爲さんと奮發したるか。もし祈禱をもて誘導者と爲しかくの如き生命の路を祈禱をもて預め坦よするを得ば己が敬虔なる進行の成就せんと易うして且便ならん。蓋し誰か貞潔と正義と溫柔と寛容とを神に願ふあらば彼れ其の願ふ所のものをうけざる能はざるなり。主曰く「求めよさらば汝等と與へられ、尋ねよさらばあひ門を叩けよさらば汝等と開かるゝとを得ん。蓋すべて求むるものは獲、尋ねるものはあひ門を叩くものは開かれん。汝等の中誰か其子籐を求めんよこれよ石を與へんや、はた魚を求めんよこれよ蛇を與へんや、されば汝等惡者なるも其の子よ善賜を與ふるを知る。まして天よ在す汝等の父は其の求むる者よ善物を與へざらんや」〔馬太七の七至十一〕或は又他篇に於ていふが如し、曰く「求むるものよ聖神を與へざらんや」〔路加十一の十三〕かゝる言とかゝる約束をもて主は我等衆人よ祈禱を奮勉すべき

とを勤むるなり。されば我等は彼の神授なる勤めよ從ひ最確實なる方法をもて善く神意を悦はす。熱心し歌頌と祈禱とよ於て己が生命を送らざるべからず。たゞかくの如く生活して我等現在人間の生活を渡らん。

三十三、誰か祈禱せざるか。誰か神と屢談話するをもて樂まんと望みを有せざるか。彼は死せるなり、魂無きなり、智識の分わけわらざるなり。彼れ祈禱を愛さずして其の靈魂が神を拜さざるもこれを靈魂の爲めよ死と思はざらんはこれぞ彼れよ智識のあらざる眞の記號なる。彼等が体はその靈魂の存在を奪はるゝ時は死して臭氣を發する如く祈禱を進行するの奮發を有せざる靈魂も慘然として慰め難き狀況あり。死して臭氣を發するなり。もし祈禱を奪はるゝあらばこれをもて死より甚たしき惡と思ふべき。所以は大なる預言者但以理善くこれを我等に示したりき。彼はたゞ僅よ三日祈禱なくして送らんよりも寧ろ死せんと決心したりき。けだし波斯の王の彼れよ命せしは全く神を敬せざらんを以てせしよ。あらずしてたゞ三日の間其

の祈禱を廢せんとを望みたりしなり。

三十四、我等は神の手號と監視のある無くんば善なるものは絶て我が心
 靈に入らざらん。さて我等は於る神の手號はもし我等の祈禱を愛し去ばし
 し神に向ひて祈願しこれよりて我等もろくの善の降らんとを待つ
 あるを見れば我等の勞を下監してこれを善く輕うし給はん。故に我れもし誰
 か祈禱を愛さず祈禱は奮熱なる強き傾きの有らざるものあるを見ればこれ
 よりて其者の心より尊貴高尚なるもの有らざらんとは我等の爲より
 明白なるべし。されども誰か飽かずして奉神禮ありしは祈禱する
 を奪はるゝを大なる損失の一と思ふものあるを見れば彼はすべての徳行を
 つとむる眞の苦行者たると神の殿たるとを保證すべし。けだし智者のいひ
 し如く「人の衣服と嘲笑して齒を露すと歩行歩法」とは其者の性質をあらは
 す。「シラマ十九の廿七」ならんはまして祈禱と神は奉事するとは或る靈神
 上神は屬するの裝飾にしてもろく正義の記號たるべし。これ我等が思念

は大なる裝飾と美麗とを與へ各人の生活を善く整理し智識も或る不順序
 なるものと惡しきものとを善ふるを容さずしてこれに神は恭順ならしむ
 ると神が我等を貴うし給へる榮譽を重んぜしむるを訓示しすべて妄信
 なる卜筮を避くるを教へ耻かしき虚妄の欲念を逐ふてもろくの靈魂を
 して肉体の甘味を輕んぜしむるなり。此の唯一の誇るべきとはハリストス
 を尊信する者も相應して耻つべき所のものは決して服従せしめざるべ
 く己が靈魂をすべてより自由を守りて無玷なる生活をなさしむべし。

三十五、祈禱なくんば徳行を己が同居者たらしめこれと共に生命の途を
 進行するとのいかよしても能はざるべきは思ふは何人の爲も自から明
 白ならん。けだし徳行の賜與者たる者も就かず又これに俯伏せずして誰か
 よく徳行に於て戦はんとするか。又貞潔者となるを義人となるに及びこれ
 よりも更に大なるを我等より要求する所の者と充分談話するあらずし
 て此の如き者とならんと望をだも恒も存せんとは誰かこれを能くせん

の祈禱を廢せんを望みたりしなり。

三十四、我等は神の手號と監視のある無くんば善なるものは絶て我が心
 靈は入らざらん。さて我等は於る神の手號はもし我等の祈禱を愛し去ばし
 し神は向ひて祈願しこれよりて我等もろくの善の降らんを待つ
 たるを見れば我等の勞を下監してこれを善く輕うし給はん。故に我れもし誰
 か祈禱を愛さず祈禱は奮然なる強き傾きの有らざるものあるを見ればこれ
 よりて其者の心は一も尊貴高尚なるもの、有らざらんとは我等の爲に
 明白なるべし。されども誰か飽かずして奉神禮ありしは、祈禱する
 を奪はるゝを大なる損失の一と思ふものあるを見れば彼はすべての徳行を
 つとむる眞の苦行者たると神の殿たるを保證すべし。けだし智者のいひ
 し如く「人の衣服と嘲笑して齒を露すと歩行歩法とは其者の性質をあらは
 す」ペラマ十九の廿七ならんは、まして祈禱と神は奉事するとは或る靈神
 上神は屬するの裝飾にして、もろく正義の記號たるべし。これ我等が思念

は大なる裝飾と美麗とを與へ各人の生活を善く整理し智識は或る不順序
 なるものと惡しきものを蓄ふるを容さずしてこれに神は恭順ならしむ
 ると神が我等を貴うし給へる榮譽を重んぜしむるを訓示しすべて妄信
 なるト筮を避くるを教へ耻かしき虚妄の欲念を逐ふてもろくの靈魂を
 して肉体の甘味を輕んぜしむるなり。此の唯一の誇るべきとはハリストス
 を尊信する者は相應して耻つべき所のものは決して服従せしめざるべ
 く己が靈魂をすべてより自由は守りて無玷なる生活をなさしむべし。

三十五、祈禱なくんば徳行を己が同居者たらしめこれと共に生命の途を
 進行するとのいかよしても能はざるべきは思ふは何人の爲にも自から明
 白ならん。けだし徳行の賜與者たる者は就かず又これに俯伏せずして誰か
 よく徳行は於て戦はんとするか。又貞潔者となるを、義人となるを及びこれ
 よりも更に大なるを我等より要求する所の者と充分談話するあらずし
 て此の如き者とならんと望むをだに恒に存せんとは誰かこれを能くせん

やされど余は簡短に證言すべしとひ我等はもろくの罪は充たさるゝものとなれるも祈禱は我等より再興し否我等より新に始められつゝ速に我等をこれより潔うすべし。そもかゝる場合は於て祈禱は靈魂の病む者の爲めよいやすべき療方としてあらはるゝならんは祈禱よりも大にして且神妙なる如何なるものやある。視よ初代のニチビヤ人は祈禱より己が神前よ於ける多くの罪より潔うせられたりしよ。あらずや祈禱の彼等を執ふる(彼等を慮る)や直ちに彼等を義なる者とならしめたりき。即ち淫蕩惡事及びもろくの無法に生活するに慣れたる邑を速に改良して其の舊染の汚俗を克ち天上の法を定住せしめこれと共に貞潔と仁慈と溫柔及び貧者を眷みるを導き來らしめたりき。かゝる徳行のあるなくんば祈禱は心靈に定住せざるべし。されど祈禱は通常何の靈にか住る(ま)わらんよはその靈をして諸の義に満たさるゝものと爲らしめこれを諸の徳行の上よ建立せしめてもろくの惡を靈より逐はんとす。もし當時誰かニチビヤを善く識れ

る者の中先づニチビヤに入りし者のありしならんよは此の邑のかくも速に淫蕩の生活より敬虔に移りしを認定せざりしならん。

三十六 けたし怠惰なる者と憤發勉勵して祈禱するを欲せざる者等の中誰れなりとも主の左の言をもて己を辨解するに思付くものあらん。曰く「凡そ我を稱して主よ主よといふ者天國に入らずたい。我が天父の旨を行ふもの入らん」馬太七の廿一。そも我が此をいふはもし我れ救の爲よ一の祈禱にて足れりとなしたらんよは他の我に反對して此等の言を正當に利用し得るものあるべきよよりてなり。されど我がいふ所は祈禱は眞の徳行の首綱なり救の生活の根本なり基礎なりといふよあれば誰もかくの如き言をもて自己の祈禱に於る懈怠を掩はざるべし。一の貞潔のみよて他の徳行なくんば貧者を眷みることも仁慈も其他賞讃すべきいかなる事功もあるなくんば決して救はるゝと能はざるべし。されども要する所は諸の徳行が我等の心よ融會して祈禱は基礎根本の如くその下底よあらんと是なり。下底の諸

部は舟と家とを堅牢ならしめ緻密ならしむるが如く祈禱は我等が生命を堅むべし、祈禱なくんば善なるものと救を得べきものとは一も我等よあらざるべし、故に聖パウエルは祈禱に勉勵すべきを切に我等よ命じていへらく「常に祈禱を爲し怠らずして感謝と共にこれを爲すべし」コロサ四の二、彼は又他の處に於てもいへらく「斷えず祈るべし凡の事感謝すべしこれ神の旨なり」ソルン五の十七、十八而して彼れ又更に他の處に於ていへらく「何の時にも各様の禱告と祈求とをもて盡しよりて求め且慎みて此事をなして凡て倦まざるべし」エフェス六の十八、此の如く使徒の此首長たる者は神の言をもて多く我等を祈禱に勸誘す、故に彼の門徒たる我等は祈禱と共に我が生命の途を進行し祈禱をもて其の靈魂をまばく潤し且これに飲ましめむとを要す、蓋すべて我等が祈禱に必要を有するは樹の水に於るより劣れりとせず、樹は其の根にて水を吸入せずんば果を結ぶと能はざるべし、我等も祈禱にて滋潤せられずんば敬虔の貴き果實を出たすと能はざるべし。

べし。

三十七、我等は臥床より起き常に日の昇るに先立ちて神に事へんを要す、而して食を就くは祈禱すべく退て寝を就くも亦同じかるべし、されど日時の間を平等に経過して毎時また或る祈禱を神にさしぐべし、冬は夜の太半を祈禱に於て送るべし、而して大なる畏れをもて膝を屈め獨一の眞神に事ふるをもて己を福なるものとなして熱心は祈禱に注意すべし、我よ告げよ汝は此の汝の目の爲めは最快暢なる光線を遣はし、者を先づ拜さずしていかんぞ日を見るか、此の善物の賜與者を拜さずしていかんぞ食を嘗むるか、いかなる望みをもて汝は夜の暗中に没るか、祈禱にて己を護らるゝなく又防守せらるゝなきの睡眠に耽りていかなる夢を見んとするか、汝は極悪の魔鬼の爲めは輕蔑せられ「祈禱なきが爲め」易く執はれん、彼等は吾人を捉へて不意に奪ひ去らんが爲に誰か祈禱の被覆を脱し裸体となるゐるの時を待ち常に吾人の周圍に廻轉するなり、ゆゑに彼等は吾人の祈禱に護ら

るゝを見る時は恰も盜賊又は惡者が武夫の其劔を頭上かきに翳すを見る時の如く直ち跳び去らんとすされど若し誰か祈禱の被覆を脱して裸体となるあらばかくの如き者を魔鬼は奪ふて罪と惡行とを引入るゝなり此を畏れて常々祈禱と歌頌とをもて己を防ぎ守らん。

三十八、預言者の見る所よりて諸天使は大なる畏れをもてその讚美の歌を萬物の主宰に捧ぐるをもて像らるるなり彼等は大なる崇敬より己の面と足とを掩ひ而して飛ばざるを得ざらん時は大に戰慄してこれを爲す我等も此の模範と教訓とを循ひて自己の祈禱を行はんとを要す。

三十九、祈禱の時於て我等は自ら己の人性を忘れ神に向ふ奮熱の情を抱かれつゝこれを最敬の畏れと結合して下地ある所の者を一も見るなく天使の中より立ちて彼等と同じく至上なる神に奉事を行ふと思ふべし。

四十、凡そ他の我等に属する者と天使に属する者は天性の如き生在の有様の如き智慧と曉知との如き及び凡て汝が關係すべきものの何たるを論

なく同じからざるありされども祈禱は天使にも又人にも属するの公事たりゆゑ此の關係に於ては彼我の間は何も異なるなきなり一詠隊なりとさりながら祈禱と心を神に向はしむると全く熱心して勉勵する者は曉知に於ても智慧に於ても尊貴に於ても生活の有様に於ても速に彼等と似るあるべし。

四十一、夫れ智者と談ずるの機會を有する者は彼れとまばく會話するよりて彼れの智慧をとりて己の有となし彼れに似たるものとなるを得んならば自己の熱心の祈禱に於て神とまばく談話する者の事はこれを何とかいはんや彼の祈禱と彼の神と不斷に交るとはいかなる智慧いかなる徳行いかなる曉知尊貴貞潔及び善行に充たされざらんやけだし祈禱はもろくの徳行と正義の泉なりといひ祈禱と懇求のあらざる虚しき心靈は敬虔に助くべき者一も入る能はずと言ふ者は罪を犯さるべければなり。

四十二、城壁をもて繞らされざる都府はこれに據有すべきすべての防禦を欠くは依りたやすく敵の權下に落つるが如く祈禱にて防ぎ守られざる心靈をも魔鬼は易しく己が權中を執へてこれをもろくの罪惡を充たされされと祈禱を勉勵する者の周圍に於ては彼れ何の功をも奏せざらん彼れ其の祈禱をもて防ぎ守らるゝ心靈を見て祈禱の心靈を養ふと麵包の身體を養ふも勝りてこれに與ふるの力を畏れ敢てこれに近寄らざるなり然のみならず熱心な祈禱する者は祈禱に相應はしからざるの事を一も己れに入らざるをゆるさざるなりとは彼れ神の前は虔恭しつゝこれをもて神と會話するや直ち悪者の悉くの姦計を防禦すべくもし誰か祈禱に於て神は貞潔と克肖とを今僅に願ふや直ち敵の方を轉じて心は耻つべき欲望を起し以て魔鬼をして神の今僅に眷み給へる心に入らしむるを許したらんよはいかゝ顛倒にしていかゝ惡なるを自から己れに思惟せしむればなり。

四十三、人は聖神の助け無くは當然に神と會話を爲す能はず故に聖堂に入り又は家に入り於て密室に入り膝を屈めて我等の祈禱と懇求とを神に獻ぐる時はまづ第一に聖神の恩寵の我等に存在して我等が祈禱の勞と勢力を注し給はんとを祈禱すべしさて汝は祈禱を行ひて神と談話し聖神の助をうくると確信する時は其の聖神にて聖にせられたる心は魔鬼を近づかしめんとは既にかんしてもゆるさざるべし。

四十四、誰か祈禱は靈魂の神經なりといふか彼は眞實の義を言ふなりけだし神經の完全するよよりて身体は整然を保ちて活くべく立ち且行くべけれども神經の絶たると共し身体は壞るゝなり靈魂もかくの如し祈禱の働きよよりて整然たるべく堅固なるべくして敬虔の途を易く進行すべしされども汝は自から祈禱を奪ふならば靈魂も身体に於て神經の絶たると同様の結果あるべし即ち靈魂は死せん或は又他の比較を取らんよこれ魚の水より取出さると同しかるべしけだし魚の爲めは生命は

水なるが如く汝の靈魂の爲め、生命は祈禱なればなり。

四十五、人々を祈禱し誘導し祈禱の幾ばくか大なる善なるを我等の心よ想像せしめんと欲してハリストス主は或る惡なる殘忍なる士師の人前よは悉くの耻を失ひ神を畏るゝの畏れを心より驅逐したる者を引用す。そもく義として且憐憫なる人物を假設し其者の義なるを神の仁慈と並べ置き以て祈禱の力を示したらんよはそれで充分なりしならん。けだし良善溫柔なる人が來りて嘆願するものを憐んで接くるならば況して其の仁慈の大なるや。たゞ我等の智力よ超越するのみならず天使の爲めよも思ふ能はざるの神よ於てをや。ゆゑよ我れ言ふ義なる士師の人物を假設して足れりとされど主は殘忍不義不仁なる士師を引用し彼れすべての場合よ於て制す可らざる暴惡をあらはすものなるも熱切よして倦まざる願よ對し此の性質を持堪へずしてこゝよ善なる且溫柔なる者とあらはれしを言ふ。さて何故主はかくの如く爲し、や。これ請願と懇求とは惡しき性質をもたや

すく變じて良善憐憫なるものとならしむるを汝よ了解せしめんが爲めなり。且かくの如くよして祈禱の力の誰れよも知られざるものとなるなからんが爲めなり。これが爲よ主は娼婦をすべての人より惡なる士師の前よ立て其の仁心なるは天然の性質よよるよあらざるを示し以て彼れ惡者より言を轉じて其の天の父よ向はしむるなり。即ち慈善溫柔仁愛よして無法よ卓越し多くの罪を赦し誇られて誇りを忍耐し夫の惡魔を尊敬して己れと其子とよ凌辱を加ふるを見て報ひざる所の父よ向はしむるなり。もし今彼は誇らるるも其の凌辱する所の者をかゝ溫柔よして忍耐するならば我等適當の畏れをもて彼よ伏拜する時は彼れ豈速よ鴻恩をもて我等を憐まざらんや。主いへらく「不義なる士師の言よところを聽きしや我れ神をも畏れず人よも作らずといへども此の義我れを休せしめざるよより彼れを救はん」路加十八の四十六。夫れ娼は俯伏して殘忍なるものをかゝ溫柔なる者となし、ならば我等仁慈の神よ俯伏して彼れより何をか期する能はざらん

や。
 四十六、『其僕俯伏し彼を拜していひけるは主よ我を寛うし給へ。さらば皆
 汝は償はんと。是に於て其僕の主憐みてこれを釋きその負債を免せり』馬太
 十八の廿六、廿七。祈禱を怠る者よ。今汝は懇求のいかなる勢力を有するを聽
 く。此の僕は特別の禁食をあらはしたりし。あらず。其他禁食と同様の事一
 もあるなうして。もろくの徳行。空虛裸体たりし。もた。其の主人よ懇求
 したる。よより彼をして憐みを垂れしめたりき。されば憂悶して。祈願を望を
 絶つべからず。誰か此のたゞ負債のみを重ねて善なるものは大よも小よも
 絶て己れよ有せざりし。僕より無なるものあるか。さりながら。彼は自から己
 れに告げて。我れ勇無きなり。耻は我面を掩ふ。いかよして。我れ就くを得べき
 や。とはいはざりき。いかよして。懇求よ口を啓くべきや。とはいはざりき。そも
 是れ魔鬼の恭謹を感染せる。許多の罪人のいふ所なり。汝ち勇なき者なるか。
 勇を求め獲んが爲め。前進すべし。汝が彼を耻ちて赤面するが爲め。和が

んを求むる所の者は。豈人なるか。彼れは神なり。汝が彼を對するの負債より
 汝を潔うせんを望む。汝よりまされり。彼が汝の救を欲する程。汝は己を萬
 危険なきの位置に立てんと欲せず。而して。彼はこれを實事をもて示した
 りき。汝ち勇氣を有せざらんか。されど。汝は己れをかくの如きものと識認す
 る。よより自から勇氣を生せしむべし。けだし。最大なる勇氣は己れを勇氣無
 きものとする。よあると猶最大なる耻辱は主の前。己を稱して義とする。よ
 あるが如し。かくの如き者は。たとひ己を證はして。もろくの人より最聖な
 るもの。と爲すといへども。不潔者なり。これ又反して。己れを衆人より最悪な
 る者と思ふ者は。義人たるなり。これが證者は。フリセイ人と税吏なり。されば
 罪の故に。絶望失神せず。神を前進して。俯伏懇求する。と眞に善良なる心地を
 此の時。至るまで守りたる。此僕の爲し。が如くすべし。けだし。失神せず。絶
 望せず。罪を承認して。輕減と寛宥を願ふ。は皆是れ宜うして。己は傷める心
 と謙遜なる靈の徴候なり。されど。是より後。彼が爲し。所は最初。よ爲し。所

のものとは全く相似ざりき。彼れは懇求をもて集めたりし所の者を其の同僕に對しての無慈悲より皆失ひたりき。さりながら轉じて憐憫の様子を一見せば汝は主人の彼れを免し、所以と其の此に至れる所以とを見ん。彼は寛容を願ひし。此は負債を皆彼れを免せりよりて彼は願ひしよりも多く受けたりき。故にパウエルもいへらく『願くば我等の中を行ふ能力は循ひて我等の思ふ所求むる所より甚く過れるとを行得る者云々』(エフェス三の廿)。彼れが汝と與ふるを預備したるの幾何なるは汝ち想像するだ。能はざるべし。されば耻づるなかれ、赤面する勿れ。眞實に罪を耻ぢよ。さりながら失望する勿れ、祈禱を輟むるなかれ、罪人たりつゝも前進して主を憐を垂れしめ。彼れ汝の罪を赦して其の仁慈を汝に現はすの機會を與ふるを爲すべし。されどもし前進するを畏るゝあらばこれ汝は彼の仁慈に障礙を置きて其の鴻恩を汝に注ぐを妨ぐるなり。

四十七、〔我れ汝に終日教會とあれと言はず。されども我れに二時間をあた

へよ。而して其の他を自己に留むべし。さりながら此の二時間も汝は我れと與ふるをわらずして自己と與ふるなり。そは諸神父の祈禱をもて慰を得んが爲め、諸神父の祝福も充たされんが爲め、又此處より萬危険なきをもて出てんが爲め及び此處に靈神上の武装を全く備へて魔鬼の爲めを捉へられざる者となり勝たれざるものとならんが爲めなるよ。我れに告げよ。此處にあるより尙何の樂しき事やある。たゞひ終日を此處に送る可らんもこれより何の尊貴なる事やある。何の處か此處より安全なる。何の處かかくの如きの兄弟ある。何の處に聖神ある。何の處にイエス。其中間に在ましてイエスの父も在ますある。汝は他のこれと同様なるいかなる集會をや尋ねんとする。いかなる會議所やある。いかなる教院やある。此處には晩餐(主の)と聽聞(神の言と教訓との)と祝福と祈禱と及び相互の交際と於てかゝる善のあるあり。然るを汝は其目を他の集會所に向けんとするか。汝は此事に於て何の辯解をか有する。そも我がこれを言ふは汝等(こゝに在る所の)の爲にあ

らず、何となれば汝等は己の健全と従順と教會に留まらんとする熱心の愛とを實際にあらはしてかゝる療法に須つあらざればなり。されども我が此を汝等よつぐるは汝等よよりて此處に在らざる者等のこれを聴かんが爲なり。さりながら彼等よつげて我は此處に在らざる者を罪するのみなりといふなかれ、我がすべていひし所のものを始より彼等よ傳へよ。彼等よつげよ。此處の集會は他のすべての集會よ幾ばく勝るありて此處に集まる者はいかなる大賞をうくるをよつげよ。けだし若し余れ彼等を罪せりとのみつげなばたゞよ彼等を激せしめんのみ、即ち疵を蒙らしめんのみよして疵よ對して治療を加ふるよはあらざればなり。されどもし彼等をして余が彼等を責むると敵の如くせずして彼等を病むと友の如くするを了解せしめ又『敵の偽なる接吻よりも友の傷つくるは眞實なる』箴言廿七の六を確信せしめば彼等欣然として責めをうけん。蓋此の場合よ於ては彼等言ふ者の辭よ注意せずして其の意よ注意すべければなり。かくの如くよして汝等の兄

弟を愈すべし。我等はこゝに在る汝等の救の爲よ責ありて汝等は在らざる者等の救の爲よ責あり。彼等と面り相對して談話を爲すとは我れよ能はざれば汝等よ由りてこれを爲し汝等よ由りて彼等を教ふべし。願くは汝等の愛は我が爲めよ彼等よ就くの橋とならんを、我等が言は汝等の舌よよりて彼等の耳よ移らんを。

四十八、汝等の小數なると我等の集まりのいよゝ減ずるを見て余は一は哀み一は喜ぶ、其の喜ぶは汝等こゝに在る者の爲よして哀むは他の在らざる者等の爲なり。汝等は賞賛すべきものたり何ぞや來者の小數は以て汝等の熱心を減損ならしめず不注意なる者とならしめざるよよる。されど汝等の熱心を以てするだも大よ勉勵なる者とならざりし彼等は殊よ罪ありとす。故よ余はこゝに來る者等の減少が汝等を毫も傷はざりしよより汝等を讚美し汝等を熱心なる者と名つけ却りて汝等の熱心が彼等よ何の益も與へざりしよより彼等を不幸なる者となして彼等の爲よ哀むなり。彼等

は預言者の言ふ所をきかざりしなり、曰く「我れ悪者の慕ふ住まんよりは寧ろ我が神の家の闕の側に居らん」聖詠八十三の十一。予も預言者は我が神の家に居るといはす彼れも止まるとも又内に入るとさへもいはすして側に居らん。近き或は周圍に居らん」といへり。末者の數もなりともかぞへ入れられんとは我れも望ましと其意いへらく我れもし戸の前になりとも入るを賜らば足れりもし誰か我を吾が神の家に於て至微者の列になりとも數へ入れなば我れ大なる賜と爲すとなり。愛は衆人公同の主宰を我が自己の主宰たらしむ。蓋し愛はかくの如きものたり。愛する者はたゞ其の愛する所の者を見るを愛するのみにあらず又たゞ彼の家を見るを愛するのみにあらず。又家の玄關のみならず階段も戸庭も見るを愛するなり。彼れは愛する所の者の衣服なりとも履靴なりとも見て其の愛する所の者が自ら己の前にありと思ふなり。預言者等はかくの如くなりき。蓋し彼等は無形の神を見ざりしより其が家を見而して家に由りて其の臨在を想像したりき。

「我れ悪者の慕ふ住まんよりは寧ろ我が神の家の闕の側に居らん」と神の家に比すれば何れの處か罪者の居ならざる。汝は法院をいふべし。議院をいふべし。將た各自の家をいふべし。彼處も祈禱と懇求のありありといへども世俗の事もつきての紛争も口論も抵抗も講和もあるあり。されど此の家に教會は此のすべてより潔きを得るなり。故に彼は罪者の居なれど此は神の家なり。嵐と波浪とより衛らるる港は其の入る所の舟をして大に安全を得しむるが如く神の家も其の入る所の者等を世俗の事の擾乱より取り去るを颶風より取り去るが如く彼等も大なる安靜と平穩とを守りて神の言を聽くを得しむるなり。此の處は道德を建て知識を研ぐの教場なりさればたゞ集會も當りて聖書のさかるゝあり靈諭ののべらるゝあり尊貴なる神父等の其前に立つる時のみならず他のいづれの時も其の戸内に玄關に入るべし。直ち世の煩慮を脱せん。内部に入るべし。直ち無形の靈嘘ありて爾の心を圍まん。彼れも主たる所の安靜は清醒戰慄を生せしめ智を研き心を

起し凡て此世の事の記憶を打碎して汝を地より天に移さんとす。さればたどひ集會〔奉神禮〕なくも此處山臨よりてかゝる裨益のあらんはまじて預言者等の聲を聴く時、使徒等を崇敬する時、ハリストスが其の中間に在ます時、天の父がここにある者〔献祭〕をうくる時、聖神が心神の樂を充たしむる時、於てはこゝに在る者等諸善も飽き足りて此處より出てんとす。さらばこゝに在らざる者等はいかなる損失をうけんとするか。

四十九、我が知らんと欲するは我等の集會を輕蔑する者等が人人を遮りて此の談話を爲しある所の聖なる食堂、即ち説教の聽聞より誘ひ去りて何の處も時を送らんとするか其事なり。然れども余は今既に彼等が或は不適當なる笑ふべきの事を放言し或は世の權カフに縛らるゝの確なるを知る。彼も此も恕するも足らず極めて責むべきの價ツケあり。前者もつきては何も言はざるべし。けだし彼はかく自ら己を證するものなればなり。然れども一家の諸事を我等のべ彼處に猶預すべからざる必要あるを言ふ所の者等も一

週間も一度此處と呼ばれこゝに在て靈神上の事を地も屬するものよりなほ貴ぶを欲せざらん時は寛宥を望む能はざるを福音經よりて明白なり。そもかの譬も婚筵と呼ばれたる者等も亦同じくかゝる遁辭をあらはして一は牛を買へりといひ次は田を獲たりといひ三は妻を娶れりといふといへども王の怒を免れざり路加十四の十八—二十。彼等が理由は實も尊敬すべきものたり。されども神の召す時は價を有せざるなり。諸の要急は敬神の事、對して棄てざるべからず。神を敬ふべし其後他もも注意すべし。我も告げよ何の僕か主人も事ふる當然の職務を行ふも先だちまづ己の住所を飾るあるか。されば主人即ち彼處も主人たるは一の空名も過ぎざる人々もかゝる畏れと從順とを表はすも夫の眞も我等が主宰たるのみならず天上の力の爲もも主宰たる者もは其の同僕も現はす所の勤めと尊敬だも與へざらんといかんぞ愚もあらざるか。けだし汝等かくの如き者等の良心を看破し得るならば彼等も幾多の荆棘あると彼等のいかも満キリ疵だらもせられしと

を善く發見せん。農夫の手のとゞかざらん地は荒廢て、藪の莠草を生長せしむるが如く靈神上の教まで拓開せられざる心霊も荆棘と雜草とを茂生せしむるなり。けだし我等日を預言者と使徒等と聽く者として辛うじて怒を抑へ辛うじて烈怒を制し辛うじて嫉妬の棘を奪ひ神の書より毎毎歌ふ所の唱曲をもて我等の情欲を歌ひ辛うじて此等無耻の獸を眠らしむるを得るならば彼の未だ會てかゝる療法をうけざる未だ會て神の智慧の教訓を聽かざる者等は救のいかなる希望をや有し得る、我は告げよ。余は汝等の目よ彼等の心を見せんを欲す、さらば汝等は彼等がもろくの汚穢、懶惰、乱髪又は大に卑陋として人前を敢てあらはる能はざるものと云はるを見んとす。それ身体は洗はざる時は汚泥不潔を掩はるゝが如く靈神上の教を浴せざる心霊も罪の多きと圍まれん。そもこゝに聖堂に在る所の者はすべて聖神の温暖にて諸の不潔を蒸發せしむる靈神上の浴館にあるなり。聖神の火はもろくの^くの不潔を蒸發せしむるのみならず其色不潔にて塗抹

せらるゝをも蒸發せしめん。蓋し主はいへらく「汝等の罪は緋の如くならんも雪の如く白くならん」イサイヤ一の十八。其意いへらくたとひ罪の不潔の如く深く靈性も蝕入り彼に於て物の天然の色^の如く變すべからざるものとされるあらんも其時^に於ても余はこれを反對の性質も變せしむるを得ん。一點頭^をて足れりもろくの罪は盡きん。

五十、〔聖堂に行くを怠る者等は何を以てか言通れざらん〕或者は暑時を纏陳す。彼等いへらく今や息苦しき空氣と堪へがたき炎熱の時^に當りてかくの如く汗も^か溢せられ熱氣と臭氣との間^に於て民衆雜沓^の壓合の中^にあるも堪ふる能はずと。余は彼等の爲めを耻づ、信せよ。けだしこれ婦人の託言なり。されどたとひ彼等の体は婦人より脆く性は弱からんも此をもて彼等は充分の辨解を爲しわたはざるべし。かゝる顛倒を證實せんと耻かし、されど己むを得ざるなり。けだし彼等がかゝる託言を纏陳して赤面するあらずんばまして我等がこれに向つて言説するは耻づべきにあらず。さらばこれを纏

陳する者等も何をかいふべき。余は彼等も三人の童子が火爐の焰中もありしとを記憶せしめんと欲す。火は彼等を四方より潑浴せ兩眼を爛焦し口も注入し呼吸を絶塞せしむ。されど彼等は衆人の面前に於て其の聖なる讚美の歌を神も歌ふをやめざりき。火焰の中より立つと草場を逍遙するが如くし全くの熱心をもて衆人一般の主宰も讚美をさしげたりき。此の三人の童子も次で彼等も獅穴と但以理の其中にありしとを憶はしめんと欲す。イエレミヤが頸まで沈められたる泥坑の事はなり。余は此等の坑よりあがりて此の雜沓と炎熱とを託言する者等を獄舎にみちびき入れてこれにパウエルとシラとを示さんと欲す。彼等は丸太に縛られ痕痕創傷に掩はれ其傷の夥しきもより全身朱に染みたりき。されどこれも拘はらず夜半も讚美の歌を神も歌ふて其の聖なる徹夜の徹醒を行ひき。されば今彼等は何れとも比されざる。よわらずや。彼の諸聖人は爐も火も穴も猛獸の間も泥中も獄舎もあり

て傷をかうむり夥しき痛苦も際してもかゝる託言を毫ものべず。もゆるが如き熱心をもて祈禱と聖なる歌を歌ふをもて時を送りしなるも我等はこれに反して小も大もかくの如きとを毫もうけずして僅々たる暑熱と滴汗との爲めも敢て己の救の事を顧みず聖なる集會を棄て何等の正明なるものをも有せざる腐敗の會合も關係して外も漂蕩するなり。

五十一、彼れ聖堂も行かざる所の^二も告げよ。汝は猶太人^一も對して耻ぢざるか。汝は赧然たるべきもあらざるか。彼等は己が「スポタ」を此の如く確く守りてまだ其の前夕よりすべての操作をやむるなり。彼等は金曜日も於て日没も垂んとするを認むるや直ちもすべての約定を斷り賣買を中止す。さればもし誰か彼等より日暮の前も何物をか買ひて暮れて後その買ひし所の物の價を携へて彼等も與ふれば彼等はこれをうけず銀を手も取らんを承諾せざるなり。我れ豈買物の價のとをいはんや。たとひ財寶の獲べきものありとも彼等は律法を破らんよりはかゝる寶物を失はんとす。速も甘心す

べし。ゆゑ猶太人はかくの如きの嚴をもて自己の律法を守るなり。然のみならず時は合はずしてこの嚴守の彼等は何の利益も與へざるのみならず却て害する所あらんとするも猶かくの如し。然るも汝ち律法の影より上より高く立ちて義の太陽を見るを賜はり最早天國に属する者としてかの猶太人が己れは福ならざる不時の事と對して表はす所の熱心を救の事と對してあらはすを欲せず。暫時の間こゝに叱ばれてこれをだも神の言を聴くよ用ふるの忍耐を有せざるか。汝は何なる赦免を捉ふべきか。我れは告げよ。頌讚すべく且貴重すべきいかなる稱義を想像し得るか。否な能はざるなり。たとひ彼は數ふ可らざる生活の窮乏を繼陳すともかゝる怠慢なる且不注意なる者はいかなる赦免も求め得ると決して能はざるべし。且や汝此處より來りて神と叩拜しこゝにすべての奉事を終らば汝が手中にある所の事は更な駿々として進歩せんとするを知らざるか。汝は生活上の配慮あるか。されど汝はこゝに祈禱して止まりしよより神の恵みを獲て進歩の善望を得て

此處より出てんが爲め又患難と戦ふよ。於て神を己の補助者となし得んが爲め及び在上なる右の手をもて助けらるよ。よより魔鬼の爲めは勝つ可らざるものとならんが爲め亦此處に急ぐべきなり。もし汝は此處に於て諸神父の祈禱を賜はるならば、もし公なる〔兄弟の〕祈禱の力を領するならば、もし神の言を聴くならば、もし神の助を引寄するならば、もしかゝる武器にて防ぎ守られて此處より出づるならば、魔鬼だも汝を窺ふ能はざらん。たゞ彼の人を誘惑誣罔するとのみを慮る所の悪人のみよ。あらざるなり。されどもし汝ち家より直ち市場に至り去らばかくの如きの武器をすべて棄はれ汝は對するすべての誘惑の爲めは掩護なきものとならん。

五十二、〔再婚は許さる〕たゞ放蕩と姦淫は禁せらるゝなり。妻あるものも無きものもこれより急ぎ逃るべし。己の生命を辱かしむべからず。笑ふも堪へたる行をもて生活すべからず。己の靈中よ悪なる良心を入れるべからず。いかんして汝は淫婦と交りし後聖堂に來るか。いかんして汝は淫婦を抱きし手

をもて天は向はしめむとするかいかんして淫婦は接吻したる舌と口をもて神の名を呼ぶと動かさんとするか汝は何の目をもて汝の友朋中最尊貴なる者を見んとするかけだし誰も汝の罪を知らざりしなるべしされど汝は自ら他の衆人先だち己れを耻ちて赤面し衆人よりも尙多く己の体を嫌はんとすもし然らずんば何の爲に汝はかゝる罪を犯しし後浴場を走るかこれ汝は己れを諸の不潔より尙最不潔なる者と思ふよよるよあらずや汝が不潔を行ひし所幾許なる汝ち他のいかなる證を尋ねんとするか將た汝自から罪に陥りて出来事と對しかゝる存意を有する時神よりいかなる判決を待たんとするかそれかゝる者等の己を不潔と思ふとは我れ賞讃し且獎勵すされど彼等は己を潔うするが爲に適當の場處に行かざるよより我れ之が爲に罪し且責むるなりもしこゝまたい身体に属する者のみ汚されたらんよは汝ち浴場の水までこれらの不潔の洗はるゝを待たんと理ありされど心靈を汚穢不潔ならしめたらんよはこれが汚穢を痛く洗滌す

る所の潔淨法を尋ねべしさればかゝる罪を洗ふが爲めいかなる浴場あるか熱涙の泉心の深きより出づる嘆息絶間なき痛心熱切なる祈禱施濟即ち宏量なる施濟遂げし所の事の痛悔及ひかゝる罪に復た誘はれずとの約束是なりかくの如くよして罪は洗はるべくかくの如くよして心靈の汚穢は潔めらるべしけだし若しこれを爲さずんば我等あらゆる泉を巡るとも此罪の一小部分も清めざらん此の耻づべき罪に全く誘はれざるとの更よ善なるは論なしされども誰か輕忽よして既にこれに滑落したらんよは同汚穢に復び落ちざるべしとの約束をまづ第一よ立て其の受けたる疵に對して上文よ示しし療法を施すを急よせざるべからずもし罪を犯して自ら悔い其後更に同罪を嘗むるならば其の既に經たる潔淨法よより何の益もあらざらん洗はれて再び糞土よ落つる者と建てし所のものを毀ちて更よこれ而建て其の再建したるを更に毀たん者は何の益もうけざらん徒らよ勞して己を困しめんのみ。

五十三、我が一己の盡力にて改善する能はざる所の事は祈禱即ち絶間なき祈禱にて成就するを得べし。げだしすべて憂ある者も喜びある者も災難ある者も安全あるものも断えず祈禱すべし。喜びと安全とある者はかゝる境遇の動かざる且變らざるものとなりて永く絶滅せられざらんが爲め祈るべく憂と災難とある者は其の位置の終り己れの爲め安然なる變革を見んが爲め災難を免れて極めて愉快なる休安を嘗めんが爲め祈るべし。汝ち平安な生活するか此の平安の壞れがたきものとなりて存せんを神に祈るべし。汝ち雷風の起るを見るか暴風を安全に送り破壊せられたる平安の恢復せんを神に熱心に祈るべし。汝聽かれしか聽かれたるが爲め感謝すべし。聽かれざりしか聽かれんが爲め祈禱を續くべし。神は祈禱の後まばく賜ふを猶預するありこれ怒り又は嫌ふが爲めあらず子を愛する父の爲す所の如くこれを賜ふを延引して汝をいよく永く己れに引留めむが爲なり。汝ち當らざる者なるか切なる祈禱をもて己

を當る者と爲すべし。ハナアンの婦は主を就きて大に呼んで曰く「主よ我を矜めよ我が女惡鬼に憑れたり」馬太十五の廿二。彼は何者なりしか。犬よ比されたる他の野蠻婦なりき。されど其の願の切なるより聽かるゝ。當るものとなりぬ。且や彼は聽かれしのみならず更賞讃せられたりき。曰く「婦よ汝の信仰は大なり」廿八節。願の始め。主は何も彼れに答へざりき。されど婦の一次二次三次就きて祈禱せし時僅に其の矜恤を彼れにあらはして「欲する如く汝なるべし」との給へり。此の終りの一言は我等をして彼れの始めに賜ふを猶預せしは其の願ふ所を全く拒まむとの意有りしとあらすして婦の忍耐をあらはさしめ併て我等も祈禱し於て忍耐するとの「コロス四の二」教訓を與へんと欲したるが爲めなるを確信せしむるなり。何物も奮熱勵精の祈禱より有力なるはあらじ。

五十四、祈禱する時は我等に對して惡意を懷く所の魔鬼の殊に我等を襲ふあらんとす。彼は祈禱により我等に至大の益あるを見る。故に我等を此の

聖堂より徒手よして家よ歸らしめんとを百方圖謀するなり。もし聖堂よ來りし者等清肅の祈禱をもて神よ就き己の罪を言わらはしてこれが爲め奮熱の心をもて痛悔するあらば神は仁慈なるより充分の赦免をうけて此處より出てんとを彼は知り實よ善く知るなり。故よ先んじて彼等を何を以てか祈禱より離して彼等よ何の受くる所もなからしめんとするなり。而して彼は此を爲すよ強てせず愉快なる妄想をもて智識を誘ひこれよ由りて祈禱よ怠りを生せしむるなり。我等は自ら甘んじて彼の網よかゝるよより我等自ら罪あり故よ我等は祈禱の諸善を自から奪ふなり。されば我等は此事よ於て何の辯解も有せざるべし。奮熱の祈禱は智と心の光なり消滅す可らざる且間斷あらざる光なり。故よ敵は無數の思念を烟塵の如く我等の智識よ吹入れ我等の未だ曾て思はざりし所の者をも聚めて祈禱の時よ我等の靈中よ注込ツマまんとするなり。時として風の發作は點する所の燈光を襲ふてこれを消すが如く魔鬼も心靈よ點する所の祈禱の焰を見て彼處此處よ

り無數の紛紜たる掛念を吹起すを急よし燃始めたる光を打消すの効を見ざらん間はまづ此より離るよをせざるなり。此る場合よ於ては燈を燃す者等の爲す如くよ爲すべし。彼等いかよこれを爲すか。彼等は風の強く吹き近づくを認め指よて燈台の孔を蔽ひ以て風をして裏面よ入らしめざるなり。何となれば裏面よ突入して風は直ちよ火を吹消せばなり。我等よ於てもこれと同じ。思念が外より攻撃する間は我等猶これよ抵抗するを得ん。されど心の門を啓きて敵を内ようくる時よは既よ少しもこれよ對抗する能はざるべし。敵は我等よ於てもろくの良善なる記憶と聖なる思念とを打消して我等よより燻黒スりたる燈を作るべし。其時は祈禱よ於てたゞ口よ空言を發するのみならん。故よ燈を燃す者等が指を燈の孔よ加ふる如く我等も傲醒の思をもて心の門を杜ふさぎて惡鬼の侵入する通路を絶ち彼をして入りて彼處よ祈禱の光を打消さしめざるを致さん。

五十五 イサーク其妻レベカの子の無きを除かんを祈りしよ神はこれよ

聞き給ひき(創世記廿五の廿二)彼れ僅く神を呼ぶや直ちも聽かれたりと思ふなかれ。否彼は此事を神に祈禱して多年を経過したりき。彼は此事を二十年神に祈りき。彼れのレベカを己れも娶りし時は四十歳なりき(廿節)而して其子の生れし時彼れは六十歳なり(廿六節)レベカは二十年十無かりし。此の全時の間イサク神に禱りぬ。我等義人の二十年祈禱も忍耐して倦まざりしを見ば我等一再祈禱の後屢退屈し其の聽かれざるも對して不満の心を懷くを敢てすると我等豈耻づべきや。あらずや。豈己の面を掩ふべきや。あらずや。且彼は神に對して大なる勇氣を有せり。さりながら賜ふとの遅延も對して不平を懷くをなく忍耐して待てり。然るを我等罪の無數の多きも埋められたる者として詐の良心をもて生活し何も主の意も適すべきものをあらはさずしてもし己の願をのぶるより先きも聽かれずんば忍耐を失ひ落膽して祈禱を棄るなり。故に此處より常に徒手にして退くなり。我等の中誰か或る一事を二十年將た二十ヶ月なりとも神に祈りし者あるか。

五十六、我等の救の爲めも祈禱せん。もしこれと共にハリストスのこれが爲め定められたる法も循ひて祈禱するあらずんば不充分とす。さて彼はいかなる法を定めたるか。縦ひ敵が我等を大に哀ましめたりとも敵の爲も祈禱するを是れなり。そも此事を實行するあらずんば我等亡びんと。フリセイ人にありし所の事よりて見るが如し。けだし「フリセイ人は敵に反對して祈禱せしむ非ずたゞ虚誇したるのみ」して彼の如き罰を被むりしならば敵に反對して多く且永き祈禱を行ふ者は何の罰をか待つべき。人よ汝は何を爲さんとするか。罪の赦を願ひ怒をもて己の靈も充たさんとするか。我等全慈の主も談話し自己の罪の爲も彼れも祈禱し己れも憫みと仁慈と赦免を願ふもより衆人よりも極めて謙遜なる者となる可らん時。も暴怒を發し猛惡も任かして其口は苦味を充たさんと豈適當なるか。そも「我も告げよ。貌は請願者の如きを有するも言は驕傲を發して自己の主宰を大に苦ましめて我等汝といかんして救を捉へ得べきか。汝は自己の疵を愈さん

が爲め入りぬ。これ霽怒の時なり。祈禱と嘆息の時なり。而して怒の時よわらず。涙の時よして憤激の時よわらず。傷悲の時よして憤懣の時よわらず。汝何故物の順序を顛倒するか。何故自ら己よ向つて戦ふか。何故自ら己の構造を毀つか。祈禱する者はまづ第一心よ和平あると謙遜をもて建設せられたる智と傷める心とを有せんを要す。されど敵よ向つて怒號する者は如何してもかくの如きを一も成すと能はず。何となれば彼は怒よ充たされて温和の感情を有するよ堪へざればなり。

五十七。汝等或は夫婦の生活よ於て或は其他世事の有様よ於て何か困難の起りしを見る時は神を助けよ呼ぶべし。是れ其の遭ふ所の困難を脱すべき最良なる方法なり。祈禱の武器は最つよき武器なり。この事は我れ屢言ひき。今も亦言ひ後も言ふとを絶ざらん。汝は罪人なりとも夫の拒絶をうけずしてわれ程よ己が罪を潔うしたりし。税吏を見よ。汝は祈禱の力のいかなるを知らんと欲するか。友誼は祈禱程神よ力あるものよあらざるなり。而して

こは余が言よわらず。余は己の智識よよりてかゝる言をのぶるを敢てせざるべし。祈禱が仕遂げたる所のものを友誼は仕遂げざりしと聖書よよりて見るべし。主曰く「汝曹の中もし誰か夜半よ其友よ往きて友よ我か朋輩旅より來りしよ供ふべきものなき故三の餅を借せよ」と曰はんよ内よ居る者答て我を煩すなかれ既既にや門は閉ち我と共共兒曹も床よあれば起て與ふるを能はずといふわらんや我れ汝曹よ告げん其友なるよよりて起て與へざれどもひたすら請ふが故よ其需よ従ひ起て與ふべし」路加十一の五至八「友誼が仕遂ぐる能はざりし所の者を熱切祈願のはよく仕遂げしを見るか。けだし願者は友たりしが故よ其願効を奏したりと汝をして思はしめざらんが爲よ主はいへらく「其友なるが故よ與へざれどもひたすら請ふが故よ彼よ與ふべし」と其意いへらくもし友誼は此を遂げしめざるも切願は友誼の力の及ばざりし所のものを遂げしめんと。さて實際何の處よかくの如きをわたりしや。税吏よ於てこれありき。税吏は神よ友たらざりき。されども友となれ

り、汝もかくの如くたどひ敵たりしも切願よりて友とならん。又迦南の婦を見て主が彼れ告げし所を聴くべし。曰く「見曹の餅を取りてこれを狗に投與ふるは善からず」馬太十五の廿六。されどもしこれ善からずんばいかんして主はこれを爲したるか。切願よりて婦は此の福を得たりしなり。願くは我等堪へざる所の者も切なる祈願をもて堪ふる者となるべきを汝の了解するあらんとを。

五十八、言ふ勿れ我は罪あるものなり祈禱するの勇氣を有せず又これを敢てせずと勇氣あらずと思ふ者は勇氣有り反りて勇氣有りとと思ふ者は勇氣の力を奪はるゝとフリスエイ人の如し。己を棄てられたる者と思ひ勇なきものと思ふ者は殊と聽かるゝと税吏の如し。見よこれが例證は幾多もこれあり。即ち迦南の婦、税吏、十字架上の盜賊の如き又譬の友が三餅を願ふて得しは友誼に依るゝ非ずして願の切なりしに依るが如き是なり。もし此の人々の中我は罪を犯せしものなり破廉耻なるものなり故に願をもて就く能

はずといひし者のありしならば何も受くるとあらざりしならん。されど彼等はおのゝ己が罪の許多なるを見ずして神の仁慈の豊富なるを見しより更なる勇氣を倍して大膽なるを得たり。されば罪人たりしも己の分位より高き所の者を願ふて欲せし所をうけたりき。すべて此事を記憶して清醒と勇氣をもて善なる望みをもて許多の熱心をもて斷えず祈禱せん。敵の爲も友の爲も祈禱せん。さらばすべて要用なる者を必ずうけん。蓋し施與者は仁慈なり。たゞ彼が與へんとを望む程我等受けんとを望まざるのみ。

五十九、たどひ聖堂の外ありとも呼んで言ふべし「我を矜めよ」と。たゞ口唇のみ動かさずして心より號ぶべし。けだし神は黙して號ぶ所の者をもきけばなり。場所を要するあらず。たゞ善く建設したる心を要するなり。イエレミヤは泥坑ありて神を己れと共にせしめ、ダニエルは獅穴ありて神の寵佑に庇はれ、火爐に投せられたる三人の童子は讚美の歌をもて神を矜恤よ

傾かしめたりき。盜賊は釘うたる。されど十字架は彼を阻まずして樂園は開かれたりき。約百は濃塵の上よ坐して神よ己れを矜恤せしめ。約拿は巨魚の腹中よありつれど神は彼れよ聽き給へり。汝は浴場よありども途中よありども床上よありども祈禱せよ。汝は何處よありども祈禱せよ。汝は自ら神の殿なり。祈禱の爲よ他の場所を尋ねるな。かれたゞ智と心の祈禱的建設を要す。海は前よあり埃及人は後よありてモイセイ其の中間よあり。祈禱の爲めよ極て窘困なりきされども其祈禱は極て廣潤なる祈禱なりき。埃及人は後よ迫まり海は前よ立ち祈禱はそが中間よありき。モイセイ一も言ふあらざりき。されど神はかれよ告ていへらく『何ぞ我れよ顧ぶか』出埃及記十四の十五。口は言ふなかりきされども心は呼べり。愛する所の者よ汝も常よ何處よ於てもかくの如く神よ趨り就くべし。神は人よあらず或る場所よ於て彼よ就くを要するなし。彼は常よ何の處よ於ても近し。汝もし人よ何事をか願はんと欲せば其人の何を爲しつるか何よ従事するか將た休息するかを問

はん。神よ行かんよは一もかくの如きを穿鑿するの要あらず。何處よ於て彼よ就くも彼を呼ぶあらずるも彼は聽かんとす。『我を矜め』いふべし。さらば神は既よ側よあり。主いへらく『汝ち叫ぶとき我れこよありといはん』とイサイヤ五十八の九。吁これ仁慈を充つるの聲なり。祈禱の終るを待たず祈禱を終ふる間もあらずして汝は最早賜をうけん。

六十、我れ人よ告げて祈禱せよ。神よ願へよ。神よ求めよといふ時。或者は答へていはん。我れ一次二次三次十次二十次願へりされどすべて願ふ所をうけざるなりと。兄弟よ汝はうけざらん間は退くなかれ。願ふ所をうくるが祈禱の終りとなるべし。受くる時よ止むべし。否其時よも止めずしてすべて祈禱を續くべし。うけざる間はうけんが爲よ祈禱すべく而してうくる時よはうけしを感謝しつゝ祈禱すべし。

六十一、聖堂よ入りて幾千の詩句を讀過して出つれども讀みし所を了解せざる者多し。口は動けども耳は聽かざりき。汝は自から己の祈禱をきかず

して神が汝の祈禱をきかんと欲するか。汝はいふ我れ膝を屈めりど、然れども汝の智識は外に迷へり。汝の体は堂内よりあり、然れども思は堂外よりあり。口は祈禱をいふ、されども智識は利益を考へ貨物の約條又は交換を思ひ田地及び其他の所有を巡視して同輩と談話を爲せり。悪魔は汝の爲め、祈禱のいくばく有益なるを知り、殊に祈禱の時、於て思念をもて攻撃せんとす。我等閑散に床上に横りて何の思念も有らざらんを屢なり、されど祈禱するや思念は無數に生出す。是れ敵は我等をして祈禱より何もうけずして退かしめんが爲め、盡力するなり。

六十二、愛する所の者より凡て聖書しるされしものは我等が益と人間の救との爲め、記憶を與へらるゝの外、他の何事の爲めともあらざるを見ん。聖書を學びて我等の爲め、其の適當の療法を看出しこれを己が疵に施さん。これが爲め、その療法は近づくべき路は各人の爲に開かるゝなり。ゆゑに凡て欲する所の者は己を苦しむる病の爲に要する所の療法を發見しこれ

を益用して最速に健康を復するをうくるゝ便なり。たゞ其の供へらるゝ所の療法を斥けず甘心従順にしてこれをうくるべきのみ。けだし人性を捉ふる所の病は心靈上となく身体上となく、こゝに於て療法を得られざるもの一としてある無ればなり。見よ誰か哀みよりて疲れ世の境遇の爲に壓せられこれによりて怯懦の爲め、勝たるゝ者來りてこの處に入るあらん、さりながら此の處に入るや直ち、「我が靈や汝何を悶え何を憂るゝや神を待めよ。けだし我れ仍彼れ、我が救主我が神を讚榮せん。」聖詠四十一の六といへる。預言者の言をきいて充分の慰をうけ諸の怯懦を振落して退かん。又他の極貧に苦めらるゝ者は、特は他の人々より富の流れに彼等自から高慢し且彼の如き華麗をもて傲歩するを見て自から哀み且苦まん。されど彼は預言者が「汝の哀みを主は負はしめよ。彼は汝を扶けん。」聖詠五十四の廿三といへる。言を聽き尙又「人富を致し其家倍榮ゆる時汝懼るゝなかれ蓋彼れ死して一切を携へず。」聖詠四十八の十七、十八といへる言を聽かん。さらば己の運命を

剛勇も忍耐するも自から己を勵まさん。或者は又讒言廻罔まがひをかゝりておぼし何の處も人の助を見ずして生も生もあらずとするおぼあらん。されども是れ亦同預言者よりかゝる境遇に於ては人の保護も依頼せずして預言者が己の事をいふ如くは行ふべしとの教訓をうけん。白く「彼等は我が愛も易へて我が敵となれり、我れ即祈る」聖詠百八の四。汝は預言者が救援と助力とを何處も尋ねるを見るか。彼れの意いへらく他の人々は奸計、讒言及び廻罔を構ふれど我は勝つ可らざる城壁と聊頼すべき錨と波たゞざる淺、即我が爲も悉くの困難をして容易なるものとならしめ勝ち易きものとならしむべき祈禱も依頼せんとなり。又或者は先きよ己れを助けし者も斥けられ輕んせられ朋友も棄てられて驚惶し思ひ乱るゝあらん。されども彼亦此處も來らんを欲するか。さらば己の爲めも要用なる福たる預言者の言を聽かん。曰く「我が友と親き者とは我が傷を見て離れ我が親戚は遠りて立つ我が生命を覓むる者は網を設け我を傷はんと欲する者は我が亡のを言ふて毎

日惡き謀を圖たくむ」聖詠卅七の十二、十三。汝は彼等の死に至る迄廻罔を構へて絶間なく戦を挑むを見るか。けだし毎日とは生涯を意味するなり。彼等がかくの如く預言者を讒毀して彼れの爲めもかゝる惡計をまうくる時彼れ何を爲し、やいへらく「然れども我は聾の如く聽かず、啞の如く己の口を啓かず。是も於て我は聞けなく其口答ふる所なき人の如くなれり」十四、十五節。汝は彼れの智慧の大も餘りあるや、抗敵者の途を牽制して勝を占めたるを見るか。彼等惡計を構ふれども彼れ其事をさくたよせざらんが爲めも耳を掩へり。彼等は何れの時も舌を鋭くして無益なると奸計とを講ずれども彼は沈黙をもて彼等が手號しるし、惡謀を奪へり。さて何故彼はかくの如くは行爲したるか。何故彼も向つて惡計を立つる時彼は耳をも舌をもたざる聾者おぼと啞者との如く己を操持したるか。かゝる明哲の原因もつきて彼れの自らいひし所をさくべし。曰く「蓋し主よ我れ汝を恃む」十六節。其意いへらく蓋し我は吾がすべての依頼を汝も托ねたるもより彼等が爲す所の事もつきて

既よ我れよ何の虞もあらず無しけだし汝の獨一なる手號は彼等が悉くの讒
 誣と奸計とを散して無結果たらしめ彼等が用意せる事をして一も實地の
 運びよ至らしめざるよ充分なればなりと汝は諸の缺乏貧窮又は患難よ於
 てこよ有益なる療法をうけ此世のもろくの哀みを振落して此處より
 退出するを得べき所以のものを見るべし故よ我れ又汝等よ願ふ汝等しば
 此の處よ來りこよ神の書よよりて讀む所のものよ詳細注意せんを
 を且この處よ於て聖書よ注意するのみならず家よありても聖書を手よ執
 り其の讀む所のものを勉めて己が有となさん^もとをけだし大なる益は此よ
 り生ずればなり。

六十三、よろしく祈禱を禁食と合せしむべし。さてかく合するとの實よ當
 然なるはハリストスの言ふ所をきいて知るべし。曰く「祈禱と禁食よあらず
 れば此族出てず」馬太十七の二十、さて使徒の事を録するを見るよ彼等はデ
 ルワーリストラ及びリカヲニヤよ於て門徒等の心を信仰よ固めたる後「禁

食と共よ祈禱をなしてこれを主よ託ねたり」行傳十四の廿三、又使徒もいへ
 らく「相互よ奪ふなかれされど互よ意を合せて暫時なれば則禁食と祈禱と
 を務むべし」コリント前七の五、汝は祈禱を助くるが爲めよ禁食の必要なる
 所以を見るか。さらば其時汝はいよく醒覺して祈禱せん、けだし其時智識
 は我等が悪欲よ困められずして更よ敏捷よ活動すればなり。

六十四、祈禱は大なる武器なり、大なる防守なり、大なる實なり、大なる凄な
 り、安然の避所なり、たゞ清醒して主宰よ就き己の心を所々方々より収束し
 而して此の如き心地をもて主宰の前よ入るを成して我等が救の敵よ我等
 よ潜入するを許さずんば可なり、けだし敵は我等此時自己の諸罪を認め自
 己の創傷を醫よ示して完全の治療をうけ得べきことを知りていよく猛烈
 よ我等を攻撃し我等を祈禱より引離して怠解と放心とよ陥らしめんが爲
 よすべての狡計を用ふればなり、故よ余は汝等よ願ふ汝等清醒なるべし而
 して汝等は敵の奸計を知り特よ此の時よ於て力めて敵を拒ぐと宛も敵の

現然として我が目前より立つを見る如くすべし而してすべて我等が心を援す所の思念を却け我等の祈りをしてたゞ舌のみ祈禱の言を發せしめず智識も其言ふ所より隨伴する真正の祈禱たらしめ全く天上より向ひ去らしむべしされども舌は言を發するも智識は或は一家の事を通觀し或は貿易の事を想像して外より搖動するあらば我等より何の益もあらずして寧ろ定罪をうけん。聖パウエルは常より神より祈らんを我等より訓ふ(エフェス六の十八)これたゞ舌のみを以てせずして心より於てすべく神を以てすべしとなり。願くは我等の祈りは靈神的ならんを願くは此の時意念は清醒なるべく智識は言と共に向ひ去らんを。

六十五、大なる善は祈禱なり。もし有徳の人と談論するは少なからざる益をうけんならば神と談話するを賜はりし者は何の善をかうけざらん。けだし祈禱は神と談話するなればなり。それ此の如き所以は預言者のいふ所を聽て知るべし。曰く『願くは我が談は彼れより樂まれん』(聖詠百三の三十四)言

意は我が神と話するは神より樂しきものとなりんとを願ふとなり。

六十六、神は我等の願ひより先だちて我等より要用なるものを賜ふとあたはざらんや。されども彼が我等の祈り求むるを待つはこれよりてその特殊の照管を我等より至當より賜ふの端緒を得んが爲なり。

六十七、我等は願ふ所のものをうくるも又受けざるも祈禱より止まらん。さればたゞうくる時も感謝するのみならず受けざる時も感謝せん。けだし神が受けざらんを欲する時も受けざるは善たるをうくるより劣るゝあらざればなり。蓋し我等より有益なる所のものを我等は知らず何となれば神は此を知ればなり。故より受くるも受けざるもひとしく善なりと思惟して彼れど此れどの爲めより我等は神より感謝すべし。そも我等より有益なる所のものを我等の知らざるを怪むなかれ。此の奇異なる奧義の洞察者たるパウエルといへども彼れの爲め如何なるは更より有益なるを知らざりき。されば知らざりしよりて有益ならざる事を祈りき。彼を苦ましむる事のありしより彼は己

をこれより救ひ給はんとを祈れり。而してこは一たび祈りしよあらずいへらく『我は此事を三たび主よ祈れり』『コリント後書十二の八』されども彼は願ふ所のものをうけざりき。何ぞや。これ彼れの爲めよ苦しかりしか哀しかりしか不愉快なりしか。否決して然らざりき。主は彼よいへらく『我が恩は汝よ足れり。そは我の能は弱きよ於て全くなればなり』と。そもく『聖パウエルは何をもてこれよ答へしか。曰く』是故よ寧ろ欣んで我の弱きよ誇らん』『九節』其意いへらく我れはたゞ吾を苦しむるものより救はれんとを尋ねざるのみならず且甘んじてこれをもて誇るだよなさんと。汝は此の心の幾ばく感謝したりしを見るか。此の神よ對する心の愛の如何なりしを見るか。汝又他の處よ於ても同使徒が言ひし所のものを聞くべし。曰く『我等は祈るべき所を知らず』『ローマ八の廿六』言意は我等人類よはすべてを精密よ至る迄知るを能はず。故よ我等が爲めよ有益なる所のものを確定するとは我等の性をつくれる造物主よ一任すべくして其生ずる所の事の顯然たるよ拘はらず

主の意よ適するの如何を視て主の善みんずる所を喜びと充分の満足とをもてうくべしとなり。

六十八、祈禱よ勉勵すると又聽かるゝの遅々たる時よ失心せず猶且忍耐と剛毅とをわらはすは我等不斷の行事たるべし。祈禱よ貼着するよ己を習はさん。即ち晝も夜も祈禱し、殊よ夜間何人も用事をもて煩はさん。時、思念の寝ぬる時、四邊みな寂として靈魂の醫よ昇るよ智識が全く自由を有する時己を祈禱するよ習はさん。もし夫の福なる大關は多端の行事の爲よ費心し且疲倦する所の王たり且預言者たりしも其の自からいふ如く夜半を祈禱の爲めよさへげて『我れ夜半よ起きて汝が義なる定めのためよ汝を讚榮せり』『聖詠百十八の六十二』といひしならば我等一個人たるものは多事ならざる生活を送りて彼の如くよ行爲せずんば何の辞をもて己を辯解するを得んや。されば我等も彼れよ效はん。尋常の人は王よ效はん。多事ならざる安靜の生活を送る者は冕旒と紫衣とを被りて修道士の生活よも優れる生活

を爲す者も效はんげだし彼れが更も他篇に於ていへる所を聞くべし。曰く『涙は晝夜我の食となれり』聖詠四十一の四。汝は間斷なく傷悲する所の靈を見るか。彼は謂へらく我が食たり我が麵包たり我が膳部たるものは他もあらずして晝も夜も漣々として流るゝ我が涙なりと。彼れ又曰へらく『我れ嘆きて憊れたり毎夜我が榻を滌ふ』と。聖詠六の七。何物か此くの如く豊なる涙の雨もて飾らるゝと眞珠をもて飾られし如くなる目よりも美なるや。汝は既も晝も夜も涙と祈禱と己を委ぬる所の王を見たり。今や汝は夫のシラと共も獄も投せられ全夜を祈禱も送り鍵鎖と打撃の苦みありと雖もそは祈禱も妨げざるのみならず却て之をもて主も對するの愛もよりいよゝゝ奮熱して灼くが如くなる祈禱とならしめたる全世界の教師を見るべし。行傳も言へり『夜半もパウエルとシラは祈禱して神を讚美す』と。行傳十六の廿五。それ太閤は王位も在まし冕旒を被り涙と祈禱とよて一生を送れり。又第三天も取り去られて默示の言も可らざる奥義を賜りし使徒は獄中もあり

て夜半も祈禱と讚美の歌とを主も獻げたり。王も夜半も起きて主を讚榮し使徒等も夜半も唱詩と熱心の祈禱とを行ひき。我等も祈禱の間斷なきをもて己が生命をすべての敵と災難より防ぎ守りて彼等も倣はん。いかなる處もいかなる時もすべてかゝる行事の爲めも便利ならざるなし。もし汝は不潔の情欲より淨められたる智識を有するを得ば市場もあらんも家もあらんも途もあらんも法庭もあらんも海上もあらんも工場もあらんも即ち汝は何處もあらんも到る處も神を呼んで願ふ所の者を捉ふるを得ん。六十九。神を愛する愛の圍む所となれるサムイルの母アンナは己の智識を天上に高く升せて恰も神を直ちも見しものゝ如く全くの熱心をもて神も祈れり。さらば彼れ何をいひじや。彼れ初めも何もいはざりき。されども祈禱を始むるの前彼は深き嘆息と裂かるゝ如き慨嘆とをなして熱涙の流を注ぎたりき。乾燥酷烈の地は其のこれも降れる雨もて濕し且軟げられて果實を生ずるも堪ふるものとなるが如く此婦もその如くなりき。悲みも軟げ

られたる心霊は強き祈禱を生じ、曰く「心よ苦み主よ祈りていふ萬軍の主
 イエゴワ」とサムイル前書一の十、十一。彼は一言よて神を呼びしよあらずこれ
 よ添ふるよ多くの言を以てし己が主よ對するの愛と奮熱の情とを現はし
 て呼べり。されば心の傷める憂愁はかゝる祈禱を教へたりき。彼は速よ聽か
 れたりき。何となれば彼の願は極めて聰明よしるされたればなり。憂愁よて
 裂かるる心霊より出づる所の祈禱は毎々かくの如くなりき。彼は智を皮紙
 よ代へ舌を筆よ代へ涙を墨汁よ代へたりき。故よ今よ至るまで彼の願は讀
 まるよなり。蓋しかゝる墨汁よてしるされたる文書は磨す可らざるものと
 なりて存すればなり。

七十、何物も祈禱よ比すべきはなく又何物も信仰より力あるはあらず。彼
 れと此れとはアンナが我等よ證示したりき。けだし彼はこれ等の賜をもて
 神よ就きて願ひし所のものを垂くうけたればなり。彼が己の無結果なる天
 性を改良し子無きの耻を雪ぎ情氣深き夫婦の間の誹りを絶ち無結果な

りし石より穰々の穂を穫り得しや直ちよ大なる勇氣を發しぬ。彼れはいか
 よ祈り且願ひしか、いかよ懇願して受けしか、いかよサムイルを生み且養ひ
 てこれを神よ獻せしか。こは汝等の既よ聞き且知る所なりよりて誰か此の
 婦を名つけて兒の母といひ併て又其の父といはんも過言よあらざるべし。
 彼の祈禱と涕涙と信仰とはたとひ彼れ種なくして生みしよあらざるもそ
 の生むの始源なりき。男は彼れよ効はん女も彼れよ効ふべし。此の婦は男と女
 どの師たり。汝等の中いかなる不生産の者ありとも失望するなかれ、いかな
 る母ありとも兒を教育するを彼の如くすべし。人みな生むの先きよは此婦
 の智よ効ひ生むよ於ては彼の信仰よ効ひ生むの後よは彼の養育よ効はん。
 七十一、『主の前よ長く祈る』サムイル前一の十二。此言はアンナの二の徳
 行を示す。即ち忍耐して祈禱よ止まると心の儼醒となり、甲は長くといふ言
 よて示し乙は主の前よてふ言よて示す。けだし体は地よ平伏して口よは祈
 禱の聲のさわくと流るよあるも其の心は或は家よ或は市よさまよふあ

らんよはかくの如き者はいかんして主の前よ祈るといふを得べきか己の心の所々方々よ散乱したるを取め地より離れ全く天よ移住して人間のよろ／＼の思念を心より抜くと此婦の當時爲し／＼が如くするものは主の前よ祈るなりけだし此婦は己の心を全く収存し智識を神よ向はしめて傷める心よりかく神を呼びたりきされども彼の祈禱は多言ならざりしよいかんして長くといふか長くとはこれ即ち同じき事をしば／＼いひ同一の言を長く反復して倦まず退かざりしをいふなり主ハリストスも福音經よ於てかくの如く祈禱すべきを命じ給へりけだし祈禱よ於て多言し異邦人の如くよ祈禱せざらんを門徒よつげて彼は祈禱の言の節度を示し馬太六の七併てこれをもて祈禱の聽かるゝは言の多きよあるよ非ずして祈る者の心の清醒と不眠とよあるを示したりき然れども誰か言はんもし多言よて祈禱すべからずとせば彼れ譬をもて常よ祈禱して倦まざるべきを教へしは何故なるか又聖パウエルも祈禱よ恒なるべきととローマ十二の十二間

断なく祈禱すべきとソルン前五の十七を誠命するは何故なるかけだし祈禱よ於て多言せざるとと間断なく祈禱するとは互よ反對すればなりと否これ毫も互よ反對せず却りて互よ全く融合す主ハリストスも聖パウエルもしば／＼すれど簡短なる祈禱を僅少の時間よ行はんとを命するなり七十二、聖アンナの事を録していへらく祈禱の時よ當りて彼の口は動きたりしも言は聞えざりきと是れ即ち呼願の内部よ發する時或は其の祈禱の聲音よあらはれずして心の向往よてあらはるゝ時よある真正の祈禱なりモイセイもかくの如く祈りぬ彼れ口よ何も言ふなかりける時神はいへり何ぞ我れよ願ふべしと出埃及記十四の十五と人はたゞ此の響く所の聲を聞くのみなれども神は是よ先だちて内部よ願ふ所のものをきかんとす故よ願ふなくしても聽かるゝを得べしたとひ市場よありといへども智識と悉くの熱心とをもて祈るを得べく又朋友と共よ坐し或は他の何をか爲しつるもつよき呼願よて神よよぶを得べし内部の呼願とは在者中誰よも判然

とあらはして爲すよあらざるをいふなり。當時聖アンナもかくの如く爲しき。『彼の聲はきこえず』〔サムイル前一の十三〕されど主はこれを聴き給へり。彼が内部の呼籲はかくの如くなりき。

七十三、『その衆シロよ於て食飲せし後アンナは主の前よ起きあがれり』〔サムイル前一の九〕汝等見るか。他人が甜然休息の時とするの時をもて彼は祈禱の時となし食飲の後祈禱の所よ急ぎ神よ潔淨なる且清肅なる心をあらはして涙の流れを注ぎぬ。彼は食飲の後よ天然而上の賜をうけし程勉勵熱切よ祈りぬ。かくの如く此の婦は我等よ模範を興ふるなり。さて我等取りて此れに效はし幾ばくの益あるべきか。けだし食飲の後よ祈禱せんと思ふ者は多く飲まず自から酩酊よ至るを許さず又多く食ふをなさずして己をおまり満腹するまでよ至らしめざるべし。食飲の後よ祈禱すべしとを待つは其人の思念の爲めよ勸懲となるべくしてすべて其前よ供ふる所のものよ適度よあづからしむべし。然してこは心霊の爲も身体の爲も大

なる幸福とならん。祈禱よて始め又祈禱よてうくる所の食飲は未だ曾て乏きを告ぐるあらずして我等よもろくの幸福を送らんと泉より多からん。祈禱と感謝のある所よは聖神の恩寵降りて魔鬼は彼處より逃亡すべく凡て反抗の力は退かんとす。食飲の後よ祈禱せんと思ふものは食飲する時よ於て或る不適宜なるを語言するを敢てせず。もし語言するをあらんも直ちよこれよ心付きて悔改せん。故よ食飲よ就くよも又これを終へし後も神よ祈り且感謝すべきなり。

七十四、我等も聖アンナをとりて己の師となし常よ一切の事よ於て神よ趨り就きて己の爲めよすべて要用なるものを神よ願はん。蓋し何物も祈禱と比すべきはあらずして祈禱は能はざる者を能ふべきものと爲し難きものを易き者となし屈曲なるものを平坦なるものと爲せばなり。福なる太閤も常よ祈禱を操持したりき。故よ彼れ言へらく『我れ汝が義の定めのため爲よ日よ七度汝を讃榮す』聖詠百十八の百六十四もし夫の王は無數の配慮の中よ埋

められ八方より牽引せらるゝ人よしてかくの如く日は七度神を呼びしならば我等祈禱よりてかくの如き大なる果實をうくべきものよしてかくしばし祈禱するをせず閑散なる生活を送るあらばいかなる口實又は辨解をなし得べきや。けだし緊要なる熱心をもて祈禱し神を屢呼ぶ所の人は何の時も罪を行ふを得べきか決して能はざるなり。かくの如きは抑も以あり己の心を煖め靈を醒まして全く天上に移り而して己の罪を認め且これが赦を願ふて己の主宰を呼ぶ所の者はかくの如き心情よりかづから此世のもろくの費心を除き羽翼を張りて人欲の上より高く立つあらんとするなり。故に彼れ祈禱の後には或は敵を見るあらんか既にこれを敵とし視ざるべく美麗なる婦を見るあらんか其の容色は誘はれざるべし何となれば祈禱よりて内は燃ゆる所の火は更に彼れに止まりてもろく不順なる思を拒反せばなり。然れども我等人々も存する所のものは常より冷やなり易きものなるより祈禱の後二三時を過ぎ汝も生せし所の温暖の漸々

散じて弱くならんとするを認むる時は更速に復た祈禱を趨り就きて其の冷やなれる爾の心を煖むべし。もし便利の時に乗じまば行ふの祈禱もて煖めつゝ全日の間かくの如く行爲するあらば汝は魔鬼をして己の思念に近づかしむるの端緒を興へざらん。もしかくの如く行爲するある時は汝も向ていかなる風の吹起るありとも誘惑、患難、不快なる思念の起りていかよ苦しかるべしといへども、かくの如くまば行ふの祈禱をもて堅固に構成する所の汝の家を倒し且つ毀つと能はざるべし。汝はいはん、されど此世の人將た裁判事件の審問に係はる所の人よして日は三時間祈禱も立ち向又聖堂へ行かんといはんして能くし得べきかと。こは能くし得べく且最も便利なり。聖堂へ行くの事はいづれの人にも便利なるはあらず、されど祈禱するとは人おのゝ何の處に於ても能くし得べし。けだし祈禱は於て要するは祈禱の聲もあるよ非ずして神に向ふの意思もあり、手を舉ぐるよあらずして心を上へ向はしむるよあり、祈禱する者の態度もあるよ

非ずして祈禱の心情よあればなり。痛く嘆息し己の罪を記憶すべし。天を望み見て己の心よ於ていふべし。神や我を矜めよと。さらば汝は祈禱を成せるなり。

七十五、近きよ祈禱の室なしといひ口實をもて己を蔽ふべからず。もし清隄するあらば聖神の恩寵は我等自己をもて神の殿となし給はん。けだし我等は到る處祈禱するよ充分の便宜あればなり。我等の神よ奉事するは先きよ猶太人よありしが如く多く物体よ属するものを有して見るべき物質と行爲とを要するあるよわらず。彼よありて何か祈る所あらん者は必ず殿よ至りて献祭の爲よ物をさしげざるべからずしてこれを行はんが爲よ復た更よ庖丁、火薪及び其他の物もなかるべからざりき。されども此よありては何もかくの如きを要せざるなり。汝は何の處よありといへども自分よて祭壇も庖丁も聖所も有するを得ん。即ち汝は自から司祭たり祭壇たり聖書たるを得つるなり。汝は何の處よありともたゞ清醒の心情を表はしよのみよ

て祭台を建つるを得べし。場所はこれよ妨げず時も妨ぐるなし。たとひ汝は膝を屈めずといへども胸を拵たすといへども手を天よひろぐるとわらずといへどもたゞ神よ熱切の情をあらはすべし。さらば汝は祈禱の事を當然よ成せるなり。紡竿或は織機の側よ坐する婦も心よて天を望み見て熱心よ神を呼ぶを得ん。市場よ入る者將た同列をなして行く所の男子も熱切の祈禱を行ふを得ん。舗よ坐し皮を縫ふ者も己の心靈を神よさしぐるを得ん。又僕も何か買ふ所あり又は家主よつとむる用事の爲めよ走り登り走り降り或は庖厨の間よありて爐前よ立つある時はたとひ聖堂よ行くの暇あらずといへども心よ於て奮熱の祈禱を行ふを得べし。神は所を耻ち給はずたゞ一を尋ぬ。即ち奮熱の心と貞潔の靈とを尋ぬるなり。故よ汝等よ勸む聖堂よもまばく行くべし。家よ休息し居りても祈禱すべし。便利ある時は膝をかかめよ。手も擧ぐべし。さりながら他の衆人の中よ居る時もこれが爲よ祈禱を輟むるなかれ。尙今我が爾等の愛よ指示したる方法よより願ふ所をうけ

んを確信して神を呼ぶべし。

七十六、神を懇求するは言の富みよあるよあらずして善を爲すよ熱中する潔き靈よありよこしまよ生活しつゝ言の富みをもて神を懇願せんと希ふ所の人々よ對て神のいかよ言ひ給ひしを見るべし、曰く『我れ汝等が手ののぶる時目を掩ひ、多くの祈禱を爲す時よも汝等よさかす』イサイヤ一の十五、聖なる預言者太關はいへらく『我が義の神や我が願ふとき我れよさかす』給へ『聖詠四の二』我が義の神とは我が義を見るの神といふとなり、此をいひて彼れ自ら高慢すとは何人も思ふ無るべし、彼れが此く言ふは自から己を頌讚せんとよあらずして衆人の爲めよ最有益なる或る教訓と勸戒とを述べんが爲めなり、人あり説をなして彼れは太關なるよよりさかれたれども我は微小なるもの且は不要なるものなるよより聽かれざるべしと言ふあらずらんが爲めよ彼は訓へて神が己れよさかすの以ゆゑなきよあざると汝よさかざるの徒然なるよあらず又偶然なるよあらずして神は常よ實行よ監視し給

ふを示すなり、もし汝の爲めよ代保すべきの實行を汝が有するある時はさかると固よりなるべし、これよ反してもし汝はこれを有せざらんか、たとひ汝は太關たりとも神を懇求する能はざるべし、義を愛するの神を義をもて就く者は何もうくるなうして神より退くとあらず却りて義なくして神を就く者將たこれと反對の邪惡をもて己を汚して就く者はたとひ千次願ふといへども效あらざるべし、何となれば神を懇求すべき所の者を己れよ有せざればなり。

七十七、もし或る奇異なる人と交際する所の者はその交際よよりて大なる益を受くるならばまして神と不斷よ談話する者をや、されど祈禱よより幾ばくの益あるは我等當然よこれを知らず、何となれば我等は輕忽よ祈禱し又神の誠命せし如く祈禱を行ふよあざればなり、我等は在上の人と言ふあざると欲する時は己の外形や身の態度や衣服及ひ其他一切を預め整頓して然る後最早談話よ入るなるべし、されども神を就く時は忽ふ々として

一處より他處に轉じ後を顧み退屈したとひ時として膝を屈むるをありとも思念は市よさまよふなり、我等祈禱に於て神と談話するを得るを記憶し當然の恭敬をもて祈禱に就く時は未だ願ふ所をうけざる先きよ最早我等は其の祈禱によりて幾許の大なる益をうくるを覺知せんとす。神と談話するを習ひ神と談話する者の爲すべき如く當然に談話するを習ひし人は終に神使の如くなるべくして彼の靈は此の時身体の束縛より解かれん、かくて彼の思は愈、高く昇るべく、かくて天上に移さるべく、かくて此世の事は一も注意せざるべく、かくて王の寶坐の前よ立たん、たとひ貧者たりともたとひ僕たりともたとひ凡人たり無學者たりとも。

七十八、神は祈禱するものより辨舌の好きと言語の熟練なる組織を促さずして心の温暖と熱切とを要するなり。もし彼はかくの如き心情をもて神の意に適する所のものを神の前よいふある時は一切をうけて神より退かん、汝はいかなる便利を見るか。人々よ於ては誰よなりと請願をもて就か

んとする時は一種特別の言語をさへ擇ぶの必要あるよあらずや、されどもこゝよは何もかくの如きを要するあるなし、たゞ汝は清醒の心を有すべし、さらば何物も汝の神に近づくは妨ぐるあらざるべし。』主はいひ給ふ我はたゞ近きよ於てのみ神たらんや遠きよ於ても神たるよあらずや。』(イイレミヤ廿三の廿三)故よもし我等神より遠ざかるあらばこれが因たるは我等自己よして神は常に近きよあるなり、さりながら我れ何ぞこゝよ言ふ於て熟練を慮るの要なしといはんや、聲だよも要するあらざるを屢なり、けだしもしただ自己の心中よ於てなりとも神よ己の必要をいひて當然に神を呼ぶあらんよはかくの場合よ於ても神は汝よきかん、かくの如く神はモイセイよきよ、又かくの如く神はアンナよきよ給ひき。

七十九、是れぞ祈禱の神に悦ばるゝの方法なる、清醒の心と罪を悔ゆるの靈と涙の泉とをもて神に就きて此世の事を何も願ふなかれ、未來を尋ね、靈神上の事を懇求せよ、敵よ對して祈るなかれ、誰よ對しても怨を懷くなかれ、

諸の欲を心より斥け罪を悔い己の内部を整然と保つべし。すべての退讓と己の舌は唯他を善く言ふと向はしむるといふ意を用ふべし。如何なる事とも或は同意をもて或は助力を以て捲込まるゝなかれ。全世界の公敵なる魔鬼と交通する所のものを一も有するなかれ。けだしかくの如くなれば汝は義者とならん。然して既と義者となり義をもて己が代保者となして聽かれん。八十、『我を憐み我が祈りをさし給へ』聖詠四の二。汝何をいはんとするか。上文は既と義の事を記憶せしめられたれば此處は憐みと恩恵との事と轉するか。そもこゝよいかなる連絡あるべきやと。これ前者と大と最適合したる連絡のあるあり。けだし我等善行をかぎりなく多くなしたるよせよ其の聽かるゝは憐みと仁慈とよる又我等徳行の最巔と登りたりしよせよ其の救はるるはすべて恩恵よればなり。痛悔の心を有すべきとを義よよりて要求せらるゝは此よよりて學び知らるべし。もし誰か罪人たらんも謙遜をもて祈禱するあらばこれ最早徳行の部分なり。則ち多くのものをうくるを得

べし。却りてもし誰か義人たるも祈禱と於て驕傲をもて神と就くあらば悉くの善を奪はるべし。税吏とフリッセイ人とは其の鑑をもて我等を彼れと此れと學ばしめたりき。税吏と學ぶべし。かくも美しく祈禱の事を行ひ一言をもてすべてを得たる所の者を取りて己が師となすを耻づるなかれ。けだし彼れの靈は好く準備せられしよより其の一言は彼れの爲と天の開かるゝ程力ありき。彼の靈はいかゝ準備せられしか。彼は自から己を誣ひ腐を拊ちて敢て目を天と擧ぐるだよなさいりき。もし汝もかくの如くは祈禱せば其の祈禱をして毛よりも輕からしめん。八十一、祈禱は單に如何なるものよても聽かるゝよあらずして神の法よ循ひて行はるゝものは聽かれん。さればそはいかなる祈禱なるか。神の宜く賜ふべき所のものを請願して神の法よ戻る所のものを願はざる是なり。されど汝はいはん神の法よ戻る所のものを遂げんとを神と求むる程誰か妄なるやと。己の敵と逆ふて祈る者は是れなり。けだし是れ神より立てられたる

法と合はざるなり。神はいへらく己の負債者を赦せ。と馬太六の十四。されど汝は敵を赦さん。とを汝も命ずる所の者を敵も逆ふて呼ばんとす。何物かかゝる無智より甚しかるべきや。祈禱する者は請願者の風情と意思と感覺とを有せざるべからず。然るを何故汝は他の形狀を有し原告者の形狀を有するか。汝ら他が爲し、所の罪の懲罰者たらんを神も祈る時はいかよして己の罪の赦をうくるを得んや。故も願くは汝の祈禱は簡短も温和も懇懇も且仁善なる形狀を以てせん。とをたゞかくの如きの祈禱は天の王の耳も適すべく天も適すべし。たゞかくの如きの祈禱は天使の舌なり。祈禱が辱者と侮者との爲も代り願ふて前進する時は天使等も其前も立ち大も静黙してきかん。さりながら彼等は静黙する時もこれも拍手しこれを頌讚し且これを嘆美して止まざるなり。祈禱も於て神も前進する時はこれを通常の觀場「テートル」と思ふべからず。否この觀場たるや其の看官は全世界なり。特も天上の諸軍の集會するありて我等が祈禱をきかんと欲する天の王の其中も

在ますあるなり。さてこの觀場も應ずるものとならん様も祈禱を行ふべし。一の彈琴者も一の樂人も我等天使の觀場も入らんと欲していかなる不愉快の音聲も入らしめじと戦々兢兢として舞臺も出づるも準備する如くも念を入るゝあらざるべし。絃撥絃を打つ所の物をもて我等も何も不愉快なる音を發せしめず心の適宜なる調和と共に一の整然たる美音を發するの舌あらしめよ。神も就き神も願ひ且懇求して己の敵も神の恩恵を垂れしめむ。其時は我等自己の事をも祈禱してきかれんとす。

八十二。『人の子や硬心なるを何れの時も至るや』聖詠四の三。預言者が人の子と稱するはたゞ此世の慮も己を委して悪も傾く所の人々をいふ。さらば硬心とはいかなる意義か。地も縛られ悪も傾き邪も狗も淫慾も蕩かされたる肉情をいふなり。さて何物か心靈を輕きものとならしむべきか。奇異なる生活なり。即ち此世の何物も誘はれず下も引く所のものは一も其の足もだも吊下げざる所のもの。是れなり。夫れ物質も属するものは一は常も下

よ向はんとす例へば木石又はすべて此も類するもの是なり然して又一は上よ向はんとす例へば火空氣毛の如き天然も輕きものは是れなりもし輕き物よ何か下よ引かんとする所の重き物を結着る時は其の生得の輕きは幾くもこれよ助けざらん心も此の如し其の天性よ依るは彼は輕くして上よ向ふべきよ造られたりきされど我等は其の天性よ反してこれを地よ結着けて重きものと爲さんとすされは過多の荷積せる舟の如く沈没するを免れんが爲よこれを重きものと爲すべからず。

八十三、何故きかれざる者多かるや時として無益なるものを願ふよ依るなりかくの如き場合よ於てきかれざらんとは寧ろさかるより勝されり又時としては等閑も願ふよ依るなりかゝる場合よ於ては神は與ふるを遷延して我等よ祈禱よ於けるの熱心を教ふるなり神は與ふるを能くし又何の時よ與へいかよ與ふべきを知る馬太七の十二さればパウエルも願ふてうけざりき何となれば無益なるものを願ひたればなりコリント後書十二

の八モイセイも願へりされども神は彼をもきかざりき出埃及記卅二の卅二故よきかれざらん時よも退くべからず憂ひ又は弱むるをなく熱心をもて願ひ續くべし何となれば神はすべてを有益よ向はしむればなり。

八十四、『楊よ在る時汝等が心の中よ謀りて己を鎮めよ』聖詠四の五此の言は何を示すか蓋しいへらく晚餐の終りし後汝の退て寝ねんとする時楊上よ横臥せんとする時人皆在らずして大なる安然の至らんとする時誰れも擾さずして深く靜ならんとする時よ於て汝は良心の裁判を始めこれより答責を促すべし而して或は近者を欺騙し或は姦計を構へ或は放蕩の望みをゆるして日中よいかなる惡念を有したりしもこれを皆此の如き安然の時よあらはし良心を立てよ此等惡念の裁判者となしこれを訊問しこれを裁判して罪なる心靈を罰せよとなりこは毎日此の如くなるべしされば汝人よ日中汝がなせる所の罪事を熟思せざらん間はこれよ先だちて寢よ就くなかれ其時は次日汝は同様の事をかく速よ試みざらんと必せり。

八十五、『日』先だちて汝は感謝すると當然なり『智慧書十六の廿八』汝王の側はあらば誰なりと汝より卑下なる者の汝は先だちて王は拜するをゆるさざるべし、されど此處に在て最早萬物が神は拜するの時、於て汝は猶寝ね萬物の長子權を彼れは譲り汝の爲に造られたる悉くの造物は先んぜずして神は感謝を報いず起きて面と手とを洗ふも其の心靈を不潔に委棄するなり。豈汝は身体の水にて潔めらるゝ如く心靈も祈禱にて潔めらるゝを知らざるか。されば身体より先き其の心靈を洗ふべし。惡の汚點は多くこれに附着しぬ。祈禱をもてこれを洗はん。もし我等かくの如く目の醒めたる後まづ第一の時間より己を防守るあらば、これ日中の業務は良善の基を居らるなり。

八十六、もし火を下に置かずんば煖爐は熱くならざらん。情慾も亦然り、これ又食を興へずんば熱くならざるべし。美顏を覗くべからず。戯場は往くべからず。飽食して肉体を肥すべからず。酒もよりて智識を濁らすべからず。そも汝はいはん是にて十分なるかと。否、此れのみにては不十分なり。これ又左の數件を合せんを要す。即ち間斷なき祈禱、諸聖徒との親與、適當なる禁食、恒久にして易らざる節制、有用の忙しき是れなり。而して其の最先きなるものは神を畏るゝの畏れと、未來の審判の事及び堪ふ可らざる痛苦の事と許約せられたる幸福の事を忘れざるの記憶なり。すべて此を守りて汝は狂惡なる肉慾を制するを得ん。

八十七、常に記憶せんを要するは單にたゞ祈禱すべしとの事はあらず。聽かるゝ様は祈禱すべしとの事なり。けだし一の祈禱として我等これを神は悦ばるゝ様はささぐるあらずんば願ふ所をうくるが爲に不十分なり。フリセイ人も祈禱せり、されども益をうけざりき。猶太人も祈禱せり、されども神は彼等の願を斥けたりき。何となれば彼等は祈禱すべきが如くは祈禱せざりしよよる。さらば入用なるものは何をや。入用なるは涕淚、哭泣、嘆息、邪惡の人よ遠ざかり、神の審判を畏れ戦くとは是なり。概してこれをいはんよし

願ふ所をうくるは堪ふるものとなるあらば、もし祈禱は於る神の法に照らして祈禱するあらば、もし間斷なく祈禱するあらば、もし有益なるものを願ふあらば、もし自分の方より當然なるものを充たすあらば、聽かれん。此の如くよしてきかれたる者多かりき。コルニリーの聽かれしは、行の爲めなり、ハナアンの婦のきかれしは、祈禱に倦まざるが爲めなり、ソロモンのきかれしは、請願の事の適當なるが爲めなり、税吏のきかれしは、謙遜の爲めなり、其他枚擧すべからず、無益なる事を願ふ時は、きかれざるべし、又祈禱して己の罪を棄てざる時も、敵に報むんを願ふ時も、きかれざらん。

八十八、諸聖人の祈禱は力を有するか、將た彼は餘計に、且無益なるか、否無益なるよ、あらず、汝も彼等も、共に助くるある時は、大なる力を有するなり。かくの如く、聖彼得の「マタイ」を復活せしめたるは、己の祈禱のみよ、あらずして彼の施濟の力よ、よれり。されは、かくの如く、諸聖人の祈禱は、すべて其の共に助けし所の者も、共に助けたりき。されども、此の如きは、たゞこゝよ、地上よ

於てのみなり、彼處よ、於ては然らず、彼處よ、於て汝を救はんは、一の行よ、よるなり。

八十九、『主や深き處より汝よ呼ぶ』聖詠百廿九の「深き處とは何を謂ふか、單に口のみを以てせず、又單に舌のみを以てせざるなり、けだし言は思なくしても、流出すべければなり、こは心の深處より呼び大なる熱心と切愛とをもて心の根底より呼ぶをいふなり。かかる祈禱は大なる力と堅きとを有して、たとひ魔鬼が大なる狂妄をもて攻撃するありども、散乱せず、又搖動せざらん。地中よ、根を最深く放ちて、地の懷を包圍したる堅牢なる樹はいかなる暴風よも抵抗すれども、地の表面よ、持たる樹は、少しの風よも覆され根と共よ、曳抜かれて、地上よ、倒れん。心靈の懷より發し、心の深きよ、根を托する所の祈禱も、實よ、その如く、たとひ無數の思念と、魔鬼の全軍の近接するありといへども、堅くして弱らず、止まりて、搖動せざるべし、却て、たゞ口より及び舌よりのみ出て、心靈の深きより出來らざる祈禱は、心のこれよ、關係する

なきよより神よ向て昇るとも能はざらん。かくの如くよ祈禱する者は口よ響を發すれども心は空虚よして智は閑散ならん。

九十、心の底より祈禱する者は未だ其の願ふ所をうけざる先きよ最早その祈禱の働きよより大なる善をうけん。かゝる祈禱は諸の欲を鎮め忿怒を抑へ嫉妬を驅り情慾を壓し此世の事物よ對するの嗜好を弱め心よ大なる平和を得せしめて天上よ昇らんとす。雨の硬地よ降りてこれを軟ぐるが如く或は火の鐵を軟化するが如くかゝる祈禱は諸欲よよりて凝固れる心を火よりも強く雨よりも善く軟化し且滋潤するなり。靈魂は本來柔嫩よして感じ易き性のものなり。されど「ドナイ」の水の寒氣よよりまばく氷結して石のやうよ化する如く我等の靈魂も罪と不注意とよより化して石とならんとす。故よ其の硬化したるを柔軟ならしめんが爲よは我等よ多くの熱を要するなり。祈禱は此事を特よ成就すべし。ゆゑよ祈禱よ就く時は其の願ふ所のものをうけんとたゞよそれのみを慮らず其靈魂をも祈禱よよりて更

よ尙善きものとならしめんを心掛くべし。

九十一、『夜中聖所よ於て汝等の手を擧げよ』聖詠百卅三の二。何の爲めよ彼は夜中といひしや。汝等よ全夜を睡眠よ於て費さるべきを教へ而して祈禱は智識の更よ軽く思慮の更よ減する時よますく潔かるべきを示さんと欲してなり。さて夜も聖所よ行くべくんば此の時家よありて祈禱を行はざらん者は何の赦をやうくるを得る思ふべきなり。預言者は夜を送らんとを誡命し汝を榻より起して聖堂よ導かんとす。然るを汝は家よ残りて此を爲さず。

九十二、『諸神使の前よ汝よ歌ふ』聖詠百卅七の二。これ何の意義なるか。諸神使と共に歌ふを力め彼等と共に競ひ天上の軍と偕よ祝したとひ我れ天性よ依れば彼等と異なれりといへども熱心をもて彼等と比肩せんとなり。

九十三、我等が祈禱の神よ悦ばるる時は我等特よ聽かれん。故よ我等のさかるゝは我等よ繋るなり。我等が神の與ふるよ足るべきものを願ふ時、熱心

をもて願ふ時、自から己を願ふ所をうくるは堪ふべきものとならしむる時は、彼は祈願をさして求むる所のものを與へ給はん。

九十四、『汝の聖堂に伏拜す』〔聖詠百卅七の二〕誰か聖堂に入るを得且入りて潔き良心をもて伏拜するを得るあらば、これ小なる徳行にあらざるなり。要はたゞ聖堂に入り膝を屈むるにあり、非ずして熱切の心と謹慎の智をもて入りたゞ身体をもて彼れに止まらずして、心靈をもて止まるにあり。

九十五、『主や汝に籲ふ我れよき』給へ』〔聖詠百四十の二〕これ預言者はさかれんが爲に高く且強き聲を以てよぶべきを言わらはす、よならず、彼はこゝに奮熱の心と傷める神とより發する内部の呼籲、即ちモイセイが發してきかれたる如きものを謂ふなり。高聲にて呼籲する人は、其の全力を張るが如く、心よてよぶ所のものも、其の全智識を張るなり。神はかくの如き呼籲を促すなり、心より發する所の呼籲は、呼ぶ所の者をして牽離されて、左右を觀望せしめざるべし。祈禱に立てども、神に呼ばざる所の人多し、彼等の口は

神を呼んで神の名を誦す、されども心はこれに伴ふて一の言だに注意するをなさず。かゝる人は神に祈禱するが如く見ゆるといへども、神に呼ぶにあらす。又祈るにあらざるなり。

九十六、『我が心を邪なる言に傾けて罪の推諉せしむるなかれ』〔聖詠百四十の四〕罪を犯すは悪なり、されども更なる重大なる悪は罪を成し、後自ら鎖すと是なり。是れ特は魔鬼の武器なり。太初造られし人もかくの如きありき。アダムは罪を認むべかりしを却て罪を妻に被せ、妻は還たこれを魔に被せたりき。我れ罪を犯せり、不法を行へり、といふ可かりける。或者はたゞ告白せざるのみならず、更なる辨解せんとす。けだし魔鬼は罪を痛告するの罪より救はるべきものたるを知りて、心を耻なき頑固に傾かしめんとす。然れども汝愛する所の者よ、罪を犯す時はいふべし、我れ罪を犯せりと。かくの如くならば、神をして憐れしめ己をして罪に最逡巡するものとならしめん。

九十七、『我れ古の日を想ひ、凡て汝が行ひしを考ふ、我が手を汝に擧ぐ』

〔聖詠百四十二の五六〕伸ばすといはずして舉ぐといふはこれ宛も身体より曳抜かれて神に向ひ去るが如く進む所のつよき心情を言ひわらはさんと欲してなり。いふ意は大なる事件の事を想ふて自ら勵まし仁慈の事と不幸より瞭解する所ありし事と不幸より救はれし後得たる所の安静の事とを熟思して我は汝と趨り就けりとなり。『我が靈は涸れたる地の如く汝に向ふ』乾ける地の雨と渴するが如く我れも亦常と汝と與ふせんを願ふ。

九十八、獨り聖人の祈禱はもし我等自ら己をもてきかるゝと足るべきものとなすをなく自から祈禱するとなからん時は助けざるべし。此事を了解せしめて預言者は又言へらく『兄弟を贖はず』と〔聖詠四十八の七〕即ち彼れモイセイとわれサムイルとわれ又イエレミヤとわれ贖はずとなり。けだし神が自から聖イエレミヤとつげし所をさくべし。曰く『此の人々の爲めと祈るなかれ』けだし汝とさかざればなりと〔イエレミヤ十一の十四〕且や汝とさくを欲せざるをわやしむなかれ。たとひモイセイも汝と合しサムイルも合したる

よせよ其時よも此の人々の爲と祈る所の汝等の祈禱をさかざらんと〔イエレミヤ十五の二〕かくの如くモイセイは姉妹の爲と祈りしかどもさかざりき。されば自ら手を垂れて他の祈禱を仰ぎ望むべからず。諸聖人の祈禱は甚だ大なる力を有す。されどもこれ我等が自ら悔改して端正の行をあらはすの時とあり。さればもし自から怠慢に委する時は他の祈禱に由りて何もうけざるべく又救はれざるべし。神は他の祈禱の爲めよりも我等の祈禱の爲めと要用なるものを我等と賜はらんを猶多く準備し給へり。我が此く言ふは我等諸聖人と祈るべからずといふとわらず我等怠慢と自ら沈まざらんが爲め又睡眠と等閑とよ自から委ねてすべてを他と負はしめざらんが爲めなり。

九十九、それ靈火の性質は此世と属する所の物を偏愛するを容れずして他の世界と對するの愛を我等と充たしむるものなり。他の世界を愛する者はたとひこれが爲と一切の所有を失ふべしといへどもたとひあらゆる慰

めと榮と離るべしといへどもたどひ己の生命を犠牲とするだもこれあるべしといへども彼は甘んじて逡巡するをなくすべて此れを爲遂ぐるなりけだし此火の温氣は靈に入りて懶惰の重荷を卸しすべてを羽より輕きものと爲らしむればなりかゝる人は終ますべてを輕んじて斷えず痛心と感動と止まり常と漣々たる涙の泉を流して甘き慰めを此に於て看出さんどす何物も涙の如く神に膠漆せしむるはなく又神と合せしむるはわらずかゝる人は市中に住むも曠野山窟に居るが如く現在のものよ一も心を留むるわらずして其の哀みと涙とに於ては己の爲に注ぐと他人の爲にそととと拘はらず飽くとを知らざらんとす。

百、『汝祈る時は密室に入りて』馬太六の六然れども主は猶汝が密室の戸を閉ざすも先だちて智と心の戸を鎖さんとを欲すそれ祈禱に進むはすべてを捨て獨り汝が願ふ所のものを汝に賜ふの權を有する所の者も就くなりさりながら汝其者を捨て智識を所々方々迷離旋轉せしむるわ

らば徒手として退かんもし汝はかくの如くならばたとひ密室に入り戸を鎖すといへどもそれが爲め汝は何の益もあらざらん己が身の態度をもて祈禱を限るとをせず殊も悉くの安靜と感傷と涕淚とをもて燃ゆるが如くなる心情より祈禱をささぐべしさりながら汝ち心も痛く感じて高く呼ばざるを能はざるわらんかされど其の悲痛する所の者もありては殊も我がいひし如くは祈禱するを適當とす。モイセイも心も憂慟せりされども此の方法をもて祈禱せり而してきかれたりき故も主は彼に告げて『何ぞ我れも願ふか』といへり。アンナも聲の聞えざりし時望む所のものを切願したりき何となれば彼の心は呼びたればなり汝も嘆願するを彼等の如くせよ我は禁せざるなり預言者の命せし如く汝の心を裂けよ衣服を裂くもわらず『イオイル』の十三聖なる太閤に效ひて心の深きより神を呼び祈りていふべし』主や深き處より汝も願ふ』聖詠百廿九の二己の祈禱を秘密し心の深きより聲を擧げよ汝は神使等の隊に立ち神使長と共にしてセラフムと

共ニ歌ふなり。されど此の大なる集合はみな戦々兢兢として萬物の王たる神ニ其の奧密なる聖歌を献げ善き秩序を守るなり。汝ち祈禱して自から彼等の數ニ加りその不可思議なる美様ニ競ふべし。汝ち人ニ祈るとなかれ、何處も存在して汝の呼ぶ先だちてき。汝が心の奧密を知る所の神ニ祈るべし。蓋し彼れは自から見る可らざるものなるよぞ汝の祈禱も亦同じく然らんと欲す。

百一、常ニ神ニ感謝せん。けだし神の恩恵にて毎日實際ニ樂むも言語を以てさへ其の恩寵を認めざらんは極めて顛倒なり。況してこの認むるは更ニ新なる善を吾人ニ廣らすものなるをや。神は一も我等ニ須つ所あらざして却りて我等はすべてを彼れニ須つなり。感謝するは一も彼れニ加ふる所あるよあらざして却りて我等を彼れといよ。親しさものとならしむるなり。もし我等は人々の恩恵を記憶しつゝ彼等ニ對するの愛にていよ。強く煖めらるゝならば況して我等が若及ひ主の我等ニ於る數ニ可らざるの

恩恵を斷えず記憶したらんよは我等彼れニ對して最切愛なるものとなり彼の誠命ニ對して最熱心なるものとならざらんや。故ニパウロもいへり『恩ニ感謝すべし』と。コロス三の十五。恩恵の賜を守るは恩恵の最良なる記憶にして不斷の感謝の眞ニ實際ニ現はるゝなり。畏る可く且救の力の充滿するありて何れの聖堂の集會も行はるゝハリストスの聖なる機密は、エウハリストヤ「聖體禮儀」と名つけらる。何となればこの機密は多く且大なる恩恵の記憶として神が我等を慮るの首因と頂上とを自ら表示すればなり。もし處女より生るゝは大なる奇跡たらんよは我等が爲ニ犠牲となりて屠らるゝは我等これを何の處よいかなる高きニ置くべきか。我等の爲ニ釘うたれて己の血を流し自ら己を我等の食ニ賜ふて靈神上飽くを得せしめ給ふは我等これをなよとか名つけん。されば斷えず彼れニ感謝せん。我等の言ふ於ても行ふ於ても感謝は常ニ先だつ可し。されども感謝はたゞ自己の爲めのみならず他人の爲も行ふべし。此ニ由り我等は嫉妬を己れニ絶ち愛をし

て最親密な最眞摯なるものとならしめん。けだし何人の爲にかまは感謝をさしげて其人を嫉悪するは最早汝は顛倒なるべければなり。故に司祭も其の陳設する者の畏るべき献祭の前は於て我等を呼び我等をして諸父兄弟の既死せる者の爲めにも今生存する者の爲めにも神に感謝せしむるなり。これ我等を地より脱して天に移らしめ人よりして天使とならしむるなり。けだし神使等も隊を成して神が我等をそとに所の善の爲に神に感謝し歌ふていへり。上は於ては神に榮あれ地は平安人は恩澤あれ」とルカ二の十四。彼等地上にあるはあらず又人類もあらずれば我等は何の關係あらん。されどもこれ彼等は吾人は模範を示して我等は神の同僕たるものを愛し其の同僕の善をもて己の善と爲すべきを教ふるなり。故にパウロも其のいづれの書に於ても全世界に於ける恩恵の爲に神に感謝したりき。我等も亦自己の善の爲め他人の善の爲め大なる者の爲め小なる者の爲め常々神に感謝せん。賜はりし所の者は大ならざりしも神より賜はりしよ

よりて大なるあるべし。神よりて成る所のものは一として小なるなし。さりながら神によるの恩恵も其の性質により大にしてたゞ其の神よりするが爲めあらず其の夥多なるを砂の數より超越するものあり。他の諸物を越えて我等が救の攝理と比し得べきものやある。神の爲めあらゆるものより寶なりし者——獨生の子——其れを神は我等敵たりし者の爲め與へ給へり。且たゞは與へしのみあらず既にこれを與へて自ら我等の爲めすべてを爲して其の晩餐に於て我等は陳設し給へり。即ちこれを賜ふが爲め。又其の賜の爲め我等をして感謝する者とならしむるが爲め。すべて爲さるる所なかりき。此事を念ひつゝ充分の感謝をあらはさんが爲めは適當なる言を我等は何の處に看出すべきか。感情は包括する所言語と智識とより大なり。されども此の道ふ可らざる善の高さと深さと廣さとは感情も及ばざらんとす。

百二、神の言をさし或は讀みて靈神上の事にかはる談話を愛する者は

救ふ關する大なる善を心と與ふるなり。此事を慮るより我等は神と悦ばるべくして我等が口もこれを靈神上の談話にて練習せしむる時は阿責誹謗、猥褻の談、罵詈の爲に穢されざるべし。我等己の舌をかける談話にて武装せしむる時は魔鬼の爲に怖るべきものとなり。我等神の恩寵を多く己に誘引するに於ては我等の識見はいよゝゝ透明なるべく視、言、聽覺及びすべての肢体は眞に神と勤め獨り神と悦ばるゝとのみを言ひ且行ひて常に讚榮と感謝の歌を神とさゝぐるを學ばん。身体は清潔の空氣をうけ樂んてますゝ健康を得るが如く心靈も此等の業に養れて更に聰明なるを得ん。

百三、人多くいへらく此に聖堂より出て聞く所の事を心よりくる時は我等己れは歸るありされども此處より離るゝや早くも再び他の我れとなりて熱心の火は我等に消滅す。如何にしてこれを預め除くべきか。これを除かんは其のこれを生せしむる所の者を除くべし。されば彼れ何よりて生ずるか。これ此處より出てし後當然にあらざるものより自ら従事しあしき

人々と共し時を送るよりて生ずるなり。聖堂より出てし後我等は聖堂に不適當なるの事と接手すべからず。家より歸らばよろしく聖書を手に取るべく併せて聖堂に於て講話せられし所の事を妻兒と共に記憶して其後最早世俗の事と接する可なり。もし浴場より出てなば市に往きて浴場よりうけし所の利益を奪はるゝを欲せずんばまして汝は聖堂より出てし此を心すべきにあらすや。されど我等はこれと反對に行爲するが故にすべてを失ふなり。又前より言へる我等は有益なる事の我等は確立せざるも夫の外物の來る恰もつよき旋風の如く我等は注ぎてすべてを顛覆しこれを外に投出して靈中一の空虛をのみ殘すよるなり。

百四、誠命を行ふより自らすべての注意を爲すべきのみならず夫の必ず來りて我等が苦行を弛べ我等の爲にすべてを輕からしむる上よりの助けを呼ぶべし。故に主は願ふを命じ又其願を成就せしむるをも約し給へり。然れども又單に願はずして大なる注意と盡力とを以て願ふべきを命じ給

へりけだし尋ねよとは此の謂なり何となれば尋ねる者は他のすべての意思を頭腦より擲去てしたゞ其の尋ねる所のものは注意を向はしめ一も外餘の事を思はざるよよる救世主は尋ねよとの言よて此を示す又叩けよといひて堅き決心よて就くべきを示す忍耐と切迫とをもて願ふべくたといひ彼れ憐みの門を速よ啓かずとも失望せず手を垂れず渴望して待つべきを示す故よ忍耐をもて願ふべしさらば必ず受けん

百五、我等が救の崇拜すべき記章を何人も自ら耻づるなかれこれ靈神上幸福の首因よして我等はこれよよりて活き又これよよりて存すハリストスの十字架を我等は榮冠として戴かんけだし我等が救の事は於けるすべては此よて成就せらるればなり上より生まれんを要するか十字架のあるあり此の奥密の食よて(体と血とよて)養はるるか將た按手叙聖せらるるか將た又他の何事を成さんとするか此の勝利の記號は何處よも我等が前よ立たんとす故よ我等はすべての注意をもて家よも壁よも戸よも額よも心

よもこれを畫かんけだし十字架は我等が救とすべて我等が主宰の贖と憐みの記號なればなり故よ十字架よてあるさるゝ時は其の全くの價値を想ふて忿怒或は其他もろくの欲を消滅せよ十字架よてあるさるゝ時は充分の希望を其額(智識)よ充たし心靈を自由ならしむべしけだしこれを單よ指よてあるすべからず殊よ自由と十分の信仰とを以てあるすべしもしかくの如くこれを己の額よあるす時は其の刺さるべき劍を見又其の死傷をうくべき武器を見て汚鬼の一も汝よ近づく能はざらんかゝる善物を自ら耻づるなかれ然らばハリストスも其榮よ乘じて來らん時及ひ此の記章が太陽の光線よりも大よ光り輝きて其の前よあらばれん時よ汝を耻づるなからん此の記章は我等が元祖の時も今日も關されし戸を啓き有害物の力を奪ひ毒を無効ならしめて猛獸の死咬を愈せりさればこれを己の智識よ印し此の我が靈魂の救を心をもて抱けよこの十字架は全世界を救ひ迷を驅り眞理を恢復し地を天よ翻へし人を天使とならしめたりきこの能力よ

よりて魔鬼も最早怖ろしからず死も死よあらざりき。すべて我等よ敵するものは十字架よて貶黜せられ且蹂躪せられたりき。

百六 汝はいはん我等此處よありて神の寶坐の前よ高く立たんといかんして能くし得んやと抑抑ハワルも亦同じく地上よありてセラフムとヘルワイムムの居る處よありたりき。もし欲するわらは我等も此を能くせん。けだし主は場所よて遠ざかれるならば汝の疑を容るゝは理由あらん。されども彼は何處よも在らざるなからんよは彼はすべて其智識を彼れよ注ぐ所の者よ。邇し。故よ預言者もいへらく『汝は我と共よすれば我れ惡を畏れず』と〔聖詠廿二の四〕而して神は自自からいひ給へり『我れ近き所よ於て神たり遠き所よ於て神たらざらんや』イエレミヤ廿三の廿三。又神の事をいへるあり『汝ち叫ぶとき我れこゝよありといはん』イサイヤ五十八の九。そもいかなる父は何れの時よかくの如く子よ注意したりしや。いへらく汝が未だ己の願を終へざる先きよ神は既よこれをきゝて汝よ近しと。されば我等は常よ彼れの欲する如くよ彼を呼ばん。

百七 祈禱の行はるゝ時聖堂よ於て談話する者あり。吁狂妄なり彼等はいかんして救を待つべけんや。いかんして神の哀憐を被むるべけんや。そも夫の殊異多様なると共よ整然として調成せられたる琴は其調成の各部の齊整よより好音を發するが如く實よ此處よ於ても衆人よよりて一の整然たる和合を調成せざるべからず。けだし我等は唯一の教會を成し整然として好合せられたる唯一の首の諸肢なればなり。我等はみな一の体なり。もし一の或肢が自から侮りて棄てらるゝあらば全体も自から侮りて敗壞せん。かくの如く一者の無次序よよりすべての善き秩序は敗られん。豈汝は諸神使と偕よ立つを知らざるか。汝は彼等と偕よ歌ひ彼等と偕よ讚美を献ぐるなり。然るを汝はこゝよ立ちて談笑するか。王は前よ立ち軍勢天の環視す。然るを汝は彼等の目前よ於て笑ふか。かくの如きの驚畏すべき時よ於てすら笑ふ者は何れの時よか笑を制する。祝福の時よ於てすら談話する者は何れ

の時よか空談を禁ずる。彼等は實に在る所の諸天使に耻ぢざるか。實に神を畏れざるか。我等の爲に心の不注意にて足れりとせず祈禱をなして思の所々方々を漂蕩するも尙足れりとせずして更なる笑と大笑とを添ふ。吁豈茲處は劇場ならんや。

百八、聖ペートルの獄に囚はれて死の宣告をうけしや。夜間悉くの信者は一同彼の前より集まりて彼の爲に祈りたりき。行傳十二の五。全夜を寝ぬるの婦人は當時何くもありしや。床上に轉展反側するだに欲せざるの男子は何くもありしや。汝は彼等の靈のいかゞ微醒したりしを見るか。彼等は妻兒及び下婢と共に憂愁より天より清くなりて讚頌したりき。當時の教會より光明なるは決してあらざるべし。彼れに傲はん。彼れと共に競はん。そもく夜を與へられしは全夜を寝ねて閑散し送らんが爲めならず。これが證者は諸職人、駱を追ふ者、商賈、夜間起る所の神の教會是なり。汝も起きて星の運行と深き穩靜と大なる緘黙とを一見せよ。而して汝の主の爲す所を奇と

すべし。然る時は心はいよ／＼清かるべく、いよ／＼輕かるべく、且いよ／＼微醒せん。殊に飛揚して高く昇る。堪ふるものとならん。夜の黯黒と全然の沈黙とは大に感動を興さしめん。膝を屈め慨嘆して汝の主は憐みを垂れ給はんとを祈るべし。汝は夜間の祈禱より休息の時をもて哀みの時と爲す時は彼は特に仁慈に傾くなり。王の自ら己の事をいへるを記憶すべし。曰く『我れ嘆きて憊れたり。毎夜我が榻を濡し我が涙にて我の褥を濡す』(聖詠六の七)。又他篇にもいへらく『我れ夜半に起きて汝が義なる定めのため汝を讚榮せり』(聖詠百十八の六十二)。汝夫たる者も汝婦たる者も共に同じく爲すべし。汝曹の家は教會とならん。汝夫たゞ獨りなると彼れ婦たゞ獨りなるとがこれに妨ぐと思ふべからず。主はいへらく『我が名の爲に二三人集まるれば我れ亦其中にあり』(馬太十八の二十)。そもハリストスのある處は神使も神使長も其他の諸天軍も共にあり。故にもろくの主が汝等と共にする時は汝曹一りなるもあらず。もし汝も子女あらば子女をも起すべし。然して夜

間全家を教會とならしむべし。かくの如き祈禱の行はるゝ住居より美はしきは決してあらず。

百九、されども我れ夜の一分を祈禱に献げよと言ふ時或はいふ者あらん我れ晝間大に疲れたれば能はずと。これ遁辞なり。托言なり。けだし汝は幾何も勞せし打銅匠より多くは勞せざるべければなり。彼はあれ程の重き鐵槌をもて働き全身烟を喫しながら尙これをもて夜の大半を送るなり。そもゝ汝集會に行く所の婦も彼處に於て殆んど全夜を眠らずして易しく経過するを知るなり。かくの如く汝も靈神的鍛房のあるあり鑊又は燒鍋を造るよあらずして銅と金とより成る所の諸の製造物より更に優れる汝の心靈を造るを致すべし。罪よりて古びたる心靈を悔改の鍛籠に投せよ。これを打つよ罪の承認を以てすると槌を以てするが如くして聖神の火をますゝ燃すべし。かくの如き工藝は更に殊勝なりとす。汝の製作するは金器よあらずしてすべての金よりも最寶なる所の心靈なり。汝は物質的器物を備

ふるよあらずして心靈を世のもろくの苦慮より脱せしむるなり。汝の前は燈を立つべし。これ燃ゆる所の燈よあらずして預言者が己れよ有したる所の者なると彼れの自ら言ふが如し。曰く『汝の言は我が足の燈なり』(聖詠百十八の百五)祈禱をもて心靈を燃すべし。もし其の既に充分に紅熱したるを見る時はこれを取り出して欲する如く飾り製すべし。我れよ信せよ。火の金屬の錆を滅すは夜間の祈禱の我等が罪の錆を滅すよ若かず。

百十、何故ハリストスは自から山上に於て一夜を送られしや。路加十六の十二。自ら己をもて我等に模範を與へんが爲よあらずや。我等は徒らに彼の名にて飾らるゝを免れん。が爲よ一分たりとも彼れよ傲はん。我れよ告げよ。植物は何の時よ其力を回復するか。夜間に於てするなり。彼の時特に心靈は植物よりも尙己れよ露をうくるの必用を有す。晝間太陽よ燒かれたるものは夜をもて新鮮よせらるべし。夜間の涙は欲望よももろくの焦熱よも降るとすべての露にまさりて何も害をうけしめざるべし。もし心靈は此の露よ

て養はれ且新鮮よせらるゝとなくんば漸々全く焦けんとす。

百十一 或者いへらく我等は聖堂を有し奉事は我等も常例の秩序をもてはこばれ我等集まりて且祈禱すと、吁復た何の言ふ所やある。是れ皆宜しきなり、されども此の一事よて誇るべきもあらず、もし此よりて汝曹の中よ敬虔の益、高まるあらば、もし毎回多少の効果を收め益を得て聖堂より家よ歸るあらばこれ以て誇るべし。かくの如く多次聖堂よありて誰か尙善く成りしよや、是れぞ心掛くべきの事なる。汝曹聖堂の集會よある時は預言者、福音記者、使徒等の汝と談話するあり、彼等はみな汝曹よ救の定理を陳べ品行を正うする事を勸む。何ぞや、此等の教訓が汝曹の生命よ入りしと幾何なるか。兵士は教場よ來りて軍事よ益、練達すべし、角力者は角力する所の觀場よ來りていよゝゝ角力よ熱練せん、醫を學ぶものは師よ就きていよゝゝ智を増しいよゝゝ悟りいよゝゝ進んで研究するなり、されども汝曹は聖堂よ在るよより何の益をか得たる。吁汝曹聖堂よ行くの一事をもて敬虔の最上と

思ふか否、これ充分よあらざるなり。聖堂は恰も染舗の如し、もし汝曹常よ何の着色も受けずして、良善なる意志を受けずして、退くあらば汝曹はばゝゝ此處よあるよよりて何の益あらん。汝曹はばゝゝ聖堂よあるを喜ぶ、されども余は願ひ且祈る汝等は聖堂よ來るの事のみを力めずして己が情欲よ對し或る治療をうけて歸宅するをも力めんを。

百十二 古はみな咸く集まりて相偕よ歌へり、これ今日我等も爲す所なり、然れども當時は『衆みな一心一靈なりき』〔行傳四の三十二〕さりながら今日は一の靈よだもかゝる合同は見えざるなり、却りて何の處よも大なる不和を見るあるのみ。今日も教會の長老は衆人よ和平を望む、されども和平の名のまばゝゝ反復せらるゝよ拘はらずその實際、和平の何れの處よもあらず。當時は家も聖堂なりき、されども今日は聖堂も家なり將たもろゝゝの家よりあしきものだよこれあり、家よ於てはもろゝゝの善き順序の見るを得べきあり、家の主婦は椅子よ座してすべての端正の爲めよ監視し、家婢は賦

して紡績し、家中の人々は各々其の委ねられたるものを手よす、然るを此處よは大なる喧噪と大なる無次序のあるありて我等が集會はいかんしても旅舎と異なるなし、此處よは浴場よ於けるが如く又は市場よ於けるが如きの笑語と喧噪とありてみなく、叫んで騒然たるなり。そもくこはたゞ此處よ於て見るあるのみ、却りて他の處の聖堂よ於ては近く立つ者よ言をいひかくるだも許されず、たとひ誰か其の久しく遇はざる所の友よ接するありとも許されざるなり、これ尤當然なり。聖堂は店舗よあらず又市場よあらずして神の使等の居る所、神使長等の居る所、神の國なり、天なり、誰かもし天を啓て汝を彼れよ導くものありとせば汝はたとひ父を見るときも兄弟よ遇ふとも敢て談話せざらん、實よ其の如く此處よ於ても何も言ふあるべからず、蓋此處は天なればなり、汝もし信せずんば此の祭壇を一見して彼れは誰の爲め何事の爲めよ立てられしを記憶し此處よ誰の來らんとするを思へよ、而して時よ先だちてさへ戰慄すべし、誰か王の座位を見るか、直ちよ王

の出御を待ち其の心よ於て自ら儆醒するあるべし、實よ其の如く汝も怖るべき時〔機密を行ふの時〕よ先だち畏れて儆醒せよ、而して幕のあがると先行する神使の群を見るよ先だちて自ら天よ登るべし。

百十三、多くの人何をかいふ讀む所の事は我れ聞かず言ふところのものは我れ解せずといふか、されども是れ汝の談話するよよる、何ぞや、騒がしければなり、恭敬を充つるの心をもて來らざればなり、汝は讀む所の事を解せずといふ、さらば解せんが爲めよ、自から注意すべし、汝ち言ふ所のものを解せざらんか、解せんを祈るべし、將た一步を進めていはん、汝ちすべてを解せざらんとは能はざるものとす、何となれば多分はおのづから解し易く且明白なればなり、されどもたとひすべてを解せざりしよせよさる場合よ於ても汝は夫の注意して聞く所の者等を逐出さゝらんが爲め又神が汝の無言と恭敬とを見て汝の爲よ明白ならざるものを明白なる者とならしめんが爲めよ沈黙すべし、されども汝は沈黙するよ能はざるか、戶外よ出て、害

を他人に及ぼさざらんを致すべし。教會に於ては常に唯一の聲をきくべし。蓋し教會は唯一の体なればなり。

百十四、謹慎して祈禱を聖堂に集まり互に祈禱せん。此を爲して我等は誠命を行ひ、イアコフ五の十六、愛を上進していよく、熱心な神を感謝するを學ばん。けだし他をあらはされたる恩恵の爲め、神を感謝する者は自己よりうけたる恩恵の爲めは尙神を感謝すべし。太閤はかく行ひき、けだしいへらく『我れと偕に主を尊めよ、偕に彼の名を崇讃めん』〔聖詠三十三の四〕。我等も同くかく行ふべし、即ち神の恩恵を衆人の前に宣べて衆人をして神を讃揚するを勵ましむべし。我等は預め諸聖人に祈りて我等の爲め、神を感謝せしむるをなす、されども亦自らも互に神を感謝せん。眞個これ司祭の特別の職分なり、故に我等は神の前に進みて先づ全世界の爲め、全般の幸福の爲め、感謝を献ぐるなり。されども各人も亦此の衆人の爲めの感謝を分を有すべし。けだし神の恩恵は總て衆人に關係するものなれども、汝も衆人の中より救

をうけたればなり。かくの主は汝一人の爲めならず衆人の爲め、太陽を輝かすといへども、汝もこれを益すると衆人と等しければなり。故に衆人が相偕に神を報ゆべき所の感謝を汝も亦同く報むざるべからず。

百十五、神の審判を常に目前に有すべし、さらばすべての欲、否甚だ狂暴なる欲も静息せん。さてかくの如くにして汝に祈禱の時、於て誰れと共に談話するを想起するあらは、清醒なる注意を留むるを得ん。されば謹んで一の思念をも決して此の時、於て汝の靈を占領せしむるなかれ。祈禱は神への献祭なり。アウラムが其の献祭を執行する時、妻をも僕をも其他何人をもこれにあづからしめざりしを記憶せよ。かくの如く、汝も己の側よりいかなる欲をも止めずして一の――すべてを超然たる――祈禱の山に登るべし。もし不當なる思念の中何の思念か、汝と共に此の山に登らんと亢進するあらは、汝は彼等の主人の如く、此を禁じていふべし。曰く、此處に居るべし。我れ及び兒は叩拜して歸らん。〔創世記廿二の五〕。すべて無言なるものと無智なるも

の、即ち驢をも僕をも山の麓よといひむべし、而して自からたゞ有智なるものを携ふるをアウラムがイサクを携へし如くよして登るべし。かくの如くアウラムと同様すべて人間は属するものより解脱し自己の天性より上り立ちて祭壇を築くべし。げだし彼れもし自己の天性の上りたゞざりせば子を屠るを決せざりしならん。故に此の時よ於て何も汝を擾すものあらずして諸天の上りあらしむべし。痛く哀み且嘆息して献祭の代りよ罪の告解と中心の悲痛とを献ぐべし。此の献祭は灰燼と歸せず、烟と共に消散せず、これが爲に薪も火も決して要するあらずして要するものはたゞ傷める心なり。是れ即ち薪なり、是れ即ち火なり、火焰よて薪を圍めどもこれを焼盡さず。げだし火焰の如き熱心をもて祈る者は焼けども焼盡さず、火よて試さるゝ金の如くたゞいよゝ純然といよゝ光明ならんとす。

百十六、使徒はいへらく聖神の恩寵より『汝等の心よ於て主を歌へよ』
「コロス三の十六」たゞ口を以てするのみならず心を以て歌はんを誡命す。

げだし是れ實に神よ歌ふといふべくして彼は空氣よ歌ふなり、何ぞや、聲は空氣よ散乱すればなり、されば汝は何の處よ於ても歌ふを得ん。汝は市場よもあるべし、彼れよありても己の内部よ向ひ誰よも聞かしめずして神よ歌ふを得べし。かくの如くモイセイは祈りてきかれたりき、神はモイセイといへらく『何ぞ我れは額ぶか』と。されどもモイセイは彼の時何も言よていふ所あらずしてたゞ悲傷せる心をもて思よて呼びたりしなり。たゞひ途を行く時よ於ても心よ祈りて高く昇るよ何も妨ぐるものあらざるなり。『汝曹が爲す所の諸事或は言或は行みな主イ、ス、ハリストスの名よ於てこれを行ひ彼れよよりて神父よ感謝すべし』
「コロス三の十七」もし汝等はかくの如く行爲するあらば其のハリストスの呼ばるゝ處よ於て何も嫌はしきもの又は潔からざる者の爲めよ餘地あらざらん。食はんか、飲まんか、將た途よ出發せんか、すべて神の名よ依り即ち神を助けよ呼んでそを爲すべし。先づ神よ祈禱して業よ就くべし。汝ち何を言ふあらんと欲するか。前以て祈禱を爲す

べし。すべてを主の名に依て行ふべし。さらばすべては汝に福ならん。

百十七、『我が榻よて汝を記憶し夜更に汝を思ふ』(聖詠六十二の七)神を記憶するは何時も入用なれども、智識の休息する時即ち夜間は殊に入用なり。晝はたとひ神を記憶せんと力むるも、其の來る所の費心は此の記憶を打消さんとす。されども夜間は固く記憶するを得べし。蓋其時心は平安にして静息するなり。晝も神の事を記憶すべし。されどもこゝに汝曹は世の諸事を牽かるゝなり。故に要するに榻よ於て神の事を記憶すべく晨に神の事を思ふべし。若し我等晨に此事をつとむるあらば安然として出て、己が業に就くを得ん。我等に武器は入用なり。然して祈禱は大なる武器なり。されば我等は毎夜徹醒の祈禱無るべからず。我等晝出て、譏笑よかゝらざるが爲め。慮らん。我等の前には我等の何か不當なる又は不要なるをいはざるや否や。注意してこれを聞かんとする苦行の立定者自ら父の右に坐するあり。けだし彼は我等の行の裁判者たるのみならず言の裁判者たればなり。

百十八、ハリストスは祈禱に要あらざれども汝を教へんと欲し、汝をして常に祈禱に注意せしめ、斷えず清肅に大に徹醒してこれを行はしめんと欲して自ら祈禱を行ひ給へり。徹醒とは夜間は眠らざる事をのみいふ。非ず晝間も祈禱に徹醒するをいふなり。人其の靈の神に向ひ誰と談話し誰れも祈禱の言をつぐるを思ひ、又神使等といへども畏れと戰慄をもて神の前に立つを常に心よ存して其の恭敬の心を新にするある時はこれ祈禱に徹醒するなり。祈禱に勉勵せん。祈禱は若し熱心にして浮誇なるなく、誠實の心よよりて行はれ、殊に謙遜をもて行はるるあらはこれ大なる武器なり。若し謙遜をもて祈るあらば、若し税吏の如く己の膺を拊つあらば、若し彼れの如く傷心をもて呼で、『神よ我れ罪人を矜み給へ』(ルカ十八の十四)といふあらば、汝はすべてうけざるなけん。至愛者よ我等は大に悔改し大に祈禱し大に忍耐し多くの熱心をあらはさんとを要す。我等に允許せられたる諸善をうけんが爲なり。